

山木戸遺跡第1次発掘調査概報

1992

新潟市教育委員会

例 言

1. 本書は新潟市山木戸438番地ほかに所在する山木戸（やまきど）遺跡の第1次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、有限会社ヨシゼンのマンション建設に伴う事前調査として、同社から新潟市が受託し、新潟市教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査は、平成3年6月1日から9月30日までの期間に実施した。
4. 発掘調査によって出土した遺物は、すべて新潟市教育委員会が保管している。遺物の注記は「山」である。
5. 整理途中であるため、主な遺構と遺物資料の概要報告にとどめた。
6. 本書は小池邦明と本間桂吉が執筆・編集した。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々からご協力及びご指導を賜った。感謝の意を表し、御礼申し上げます。

凡 例

1. 本書で用いた方角はすべて真北である。真北は磁北から東偏約7度20分である。
2. 土器・陶磁器の拓本は、中心線より左側が内面、右側が外面を示す。
3. 遺物実測図のうち、須恵器のみ断面を黒塗りした。また、粘土紐の痕跡がよく残るものについては破線で記入した。
4. 破片が小さく、復元図の誤差が大きいと思われるものについて、中心線の両端を切って示した。
5. 白磁や灰釉陶器など釉薬がかかっている部分は破線で示した。
6. 土器内面の黒色処理は網掛けで示した。
7. 曲物は残存状況から模式的に復元した。また遺物により、復元した器形の形状を破線で示した。
8. 遺物は、挿図・図版及び写真図版とも同一の通し番号である。また、写真は縮尺不同である。
9. 遺跡の位置図は1万分の1地形図（昭和59年 新潟市）による。
10. 出土遺物の分類及び編年は、主として下記の文献を参考とした。

坂井秀弥ほか 1989『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

山本信夫 1988「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府を中心として－」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会

横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入貿易陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

吉岡康暢 1989『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕』六興出版

目次

I 調査に至る経過	1	SK 1・2・12・13
1 調査に至る経緯		SX 6
2 試掘調査		遺構外出土の遺物
II 遺跡の位置と環境	3	
III 調査の概要	4	
1 調査の方法		3 中世の遺構と遺物
2 層序		SB 1～3
3 調査の経過		SE 1～11
IV 遺構と出土遺物	9	SD 1～3
1 遺構の概要		SK 5・6
2 平安時代の遺構と遺物		遺構外出土の遺物
V まとめ	14	
1 平安時代		
2 中世		

挿図・図版目次

第1図 試掘坑配置図	1	第22図 出土遺物7 (SK12・13・土師器・須恵器)	30
第2図 遺跡周辺図	2	第23図 出土遺物8 (須恵器・土師器)	31
第3図 地形概念図	3	第24図 出土遺物9 (土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・石帯)	32
第4図 遺跡位置図	3	第25図 出土遺物10 (墨書土器)	33
第5図 土層柱状図	5	第26図 出土遺物11 (白磁・青磁・土師質土器)	34
第6図 調査区全体図	7-8	第27図 出土遺物12 (珠洲焼)	35
第7図 遺構実測図1 (SB3・SK5・6・13)	15	第28図 出土遺物13 (珠洲焼)	36
第8図 遺構実測図2 (SD1・3・SB1・SK9・甕)	16	第29図 出土遺物14 (珠洲焼)	37
第9図 遺構実測図3 (SB2・SD2・SX6)	17	第30図 出土遺物15 (瓷器系陶器・越前焼)	38
第10図 遺構実測図4 (SE1～3)	18	第31図 出土遺物16 (土器片円盤)	39
第11図 遺構実測図5 (SE4～6)	19	第32図 出土遺物17 (土器片円盤)	40
第12図 遺構実測図6 (SE7・8・11)	20	第33図 出土遺物18 (土錘)	41
第13図 遺構実測図7 (SE9・10)	21	第34図 出土遺物19 (木製品・井戸部材)	42
第14図 遺構実測図8 (SK3・4・7・8・10・11)	22	第35図 出土遺物20 (木製品・井戸部材)	43
第15図 遺構実測図9 (SK1・2・12・101～104)	23	第36図 出土遺物21 (曲物・側板)	44
第16図 出土遺物1 (SX6)	24	第37図 出土遺物22 (曲物)	45
第17図 出土遺物2 (SX6)	25	第38図 出土遺物23 (曲物)	46
第18図 出土遺物3 (SE1～4)	26	第39図 出土遺物24 (曲物)	47
第19図 出土遺物4 (SE5・6・9)	27	第40図 出土遺物25 (曲物)	48
第20図 出土遺物5 (SE9～11)	28	第41図 出土遺物26 (木製品)	49
第21図 出土遺物6 (SD1～3, SK1・4・6～9)	29	第42図 出土遺物27 (木製品・砥石)	50

写真図版目次

写真図版 1	51	写真図版13	63
写真図版 2	52	写真図版14	64
写真図版 3	53	写真図版15	65
写真図版 4	54	写真図版16	66
写真図版 5	55	写真図版17	67
写真図版 6	56	写真図版18	68
写真図版 7	57	写真図版19	69
写真図版 8	58	写真図版20	70
写真図版 9	59	写真図版21	71
写真図版10	60	写真図版22	72
写真図版11	61	写真図版23	73
写真図版12	62	写真図版24	74

調査体制

調査主体 新潟市教育委員会（教育長 石井 淳 次長 吉本善助）
総括 太田義昭（生涯学習課長） 相澤修司（生涯学習課長補佐）
事務 皆川泰男（生涯学習課主事） 和田明彦（同）
調査担当 小池邦明（生涯学習課主事）
調査員 大森 豊（生涯学習課主事） 本間桂吉（同） 野村政美（同囑託）

発掘作業員 阿部瑞枝・荒井節子・河内知子・杵渕庄二・小林和元・近藤金夫・坂井芳雄・佐藤幸一
佐藤幸子・柴野美砂枝・鳥名レン・清田 貞・高橋 詢・高見芳子・田代 哲・田中良平
永井和子・永井 訓・永井 律・長谷川忠平・藤島健一・星山良作・前田タケ・山田久美子
若部幸子

整理作業員 天野雅代・小林愛子・境口真由美・桜井恵子・渋井和子・西潟静香・森 良子

I 調査に至る経過

1 調査に至る経緯

平成元年4月に山木戸4丁目442番地ほかで平安時代の須恵器及び土師器と中世の土師質土器の破片が発見され、同年5月18日付新教文第253号により文化財保護法第57条の6第1項の規定にもとづく遺跡発見の通知を文化庁へ提出した。古代・中世の新遺跡として遺跡台帳に登録された。遺跡番号は113である。

同年5月、山木戸遺跡所在地においてマンション建設を計画していた事業者が、市都市計画課より予定地が遺跡にかかることを指摘され、市教育委員会文化行政課（当時）に照会があった。市教育委員会は、事業計画者と遺跡の保護について協議を重ね、できるだけ早い段階で確認調査を実施して遺跡の範囲・性格等を把握することとなった。この間、複数の事業者が関与したため、確定するまで協議を繰り返した。

2 試掘調査

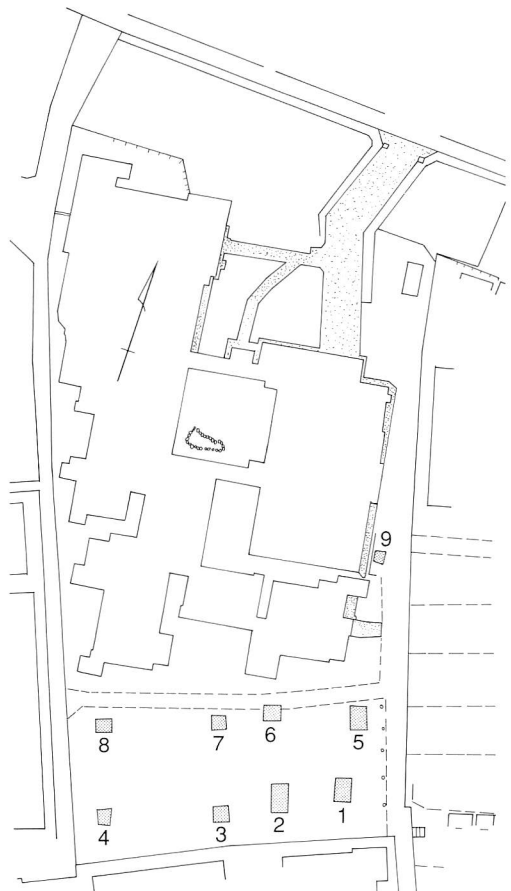
文化財保護法第98条の2第1項の規定にもとづき、平成2年5月23日付新教文第252号により文化庁あてに埋蔵文化財発掘調査について通知した。

同年7月2日～5日の4日間にわたり、小池邦明が試掘調査を担当した。現地は天理教新潟大教会の建物敷地として利用されているため、調査は開発予定地のうち、南側畑部分を中心に行った。畑の作付が行われており、発掘による作付への影響が最小限にとどまるよう試掘坑を配置した。9箇所設定し、合計39㎡調査した。深度は0.7～2.0mで、掘り下げは全て人力で行った。調査後の埋め戻しは、事業者より小型バックホーの提供を得て行った。

調査の結果、発掘地点は過去の砂取りにより削平が進んでいることが明らかであった。特に砂丘頂上部側の1～4試掘坑では大きく削平され、耕作土直下に地山の黄褐色砂を確認した。北側の6・9試掘坑では客土の下に暗黒褐色砂の包含層が確認でき、地山層上面で掘立柱建物の柱穴や井戸など遺構を確認した。また、遺物は平安時代から中・近世の土器・陶磁器がコンテナ1箱分出土した。器種は、坏・坏蓋・壺・甕・鍋である。また、羽口・鉄滓・砥石・墨書土器が出土しており、この遺跡が集落跡であることが想定された。また、教会の建物敷地の下にも遺構が存在する可能性が高いことがわかった。

この調査結果をもとに事業者・県教育庁文化行政課・市教育委員会文化行政課の三者協議を行い、マンション本体部分・本舗装部分・その他恒久施設部分については本格調査が必要となるため、市が発掘調査を行うこと、また、表土除去など土工部分については委託者側で実施することなどで合意した。

平成3年4月24日、有限会社ヨシゼンより文化財保護法第57条の2第1項にもとづく埋蔵文化財発掘の届出が文化庁長官へ提出された。同年5月1日、市教育委員会は事業者であ

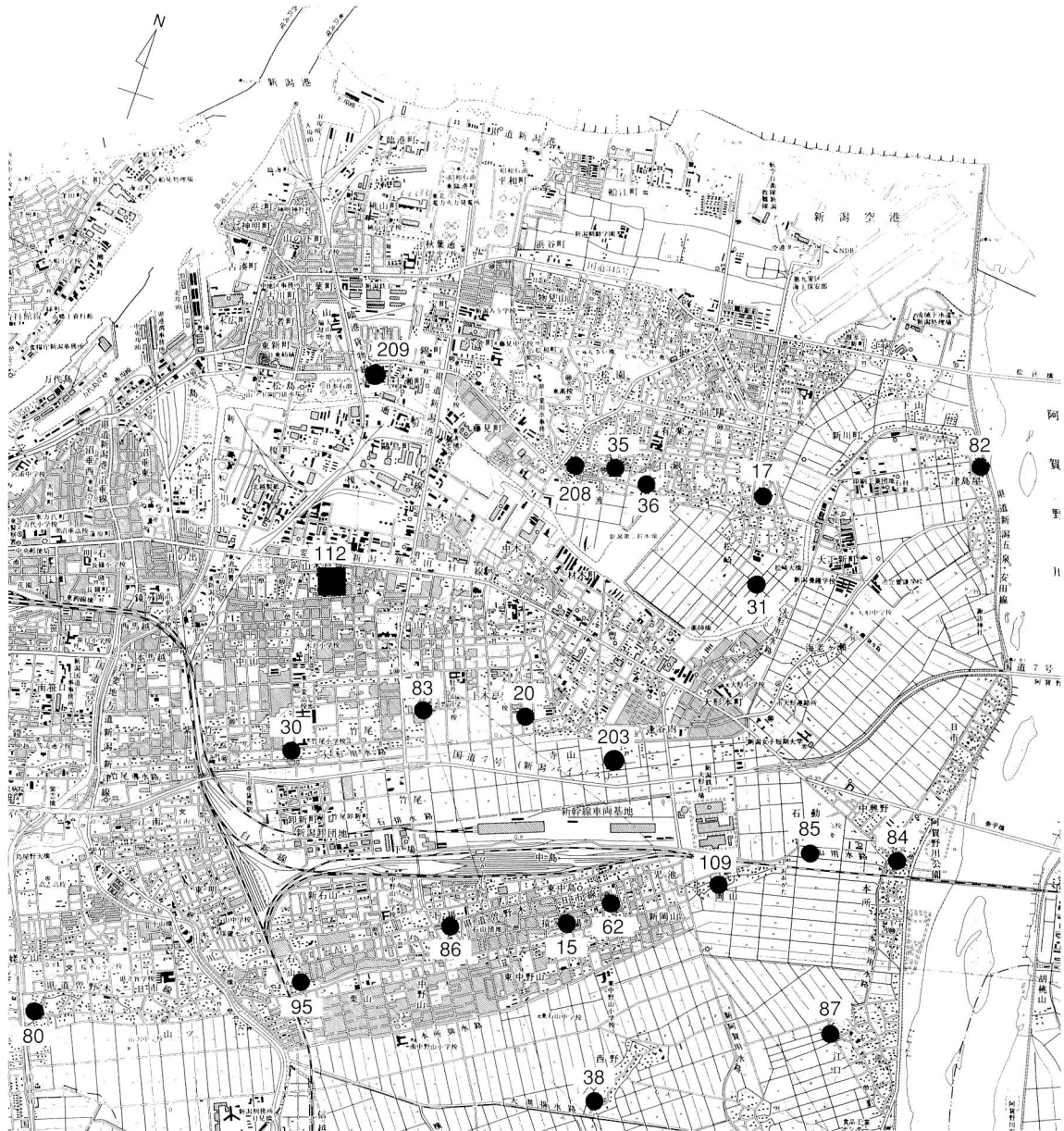


第1図 試掘坑配置図 (S = 1/900)

る有限会社ヨシゼンと発掘調査受託契約を締結した。契約金額は18,386,000円である。

市教育委員会は同年5月7日付新教生第87号により文化財保護法第98条の2第1項にもとづく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官へ提出し、5月27日から現地調査に入った。

調査現場には嘱託職員1名を含む市職員4名が常駐し、5月27日から9月30の間実施した。発掘総面積は1,440㎡で、掘削及び記録作業に発掘作業員延べ1,195人の労力を必要とした。平成4年3月31日に事業の完了を報告し、精算を行った。精算金額は14,933,588円であった。



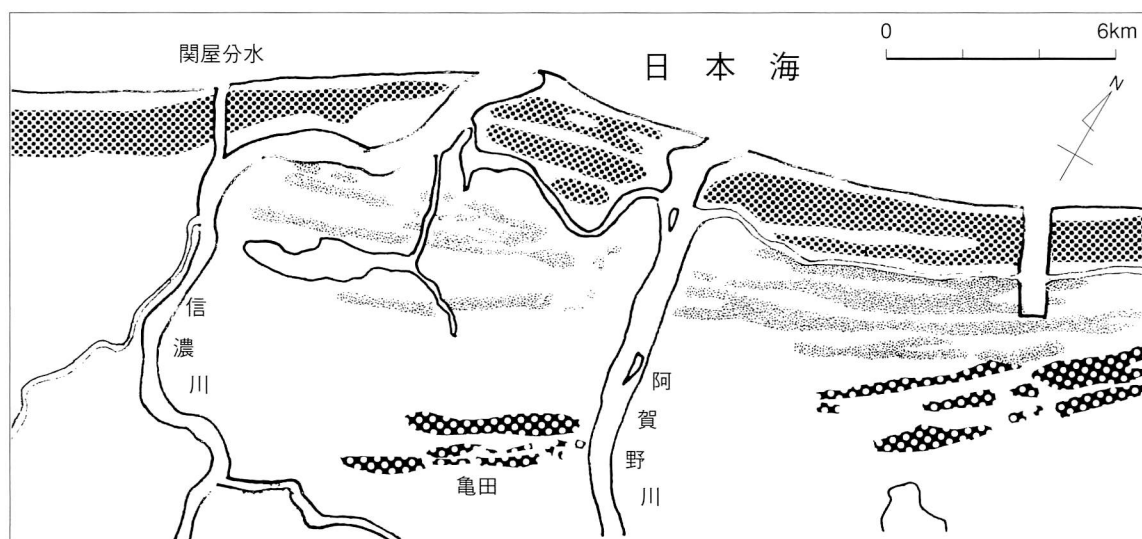
番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
15	猿ヶ馬場A	平安・室町	82	津島屋の石仏	南北朝
17	居浦郷	平安	83	竹尾西	平安
20	寺山	平安	84	本所居館跡	室町
30	竹尾	中世	85	石動	古墳・平安・中世
31	古屋敷	室町・江戸	86	下馬	平安・中世
35	宮浦	平安	87	江口館跡	不明
36	溜池	平安	95	石山の石仏	中世
38	西野	平安	109	岡山の石仏	中世
62	猿ヶ馬場B	鎌倉・室町・江戸	112	山木戸	古墳・平安・中世

第2図 遺跡周辺図 (S = 1 / 50,000)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

遺跡は新砂丘Ⅱ-4に分類される牡丹山砂丘上に立地する。東西に走る標高+1.2m前後の砂丘の北側斜面に位置し、約19,000㎡が遺跡範囲と推定されている。調査地の標高は+0.1m前後である。遺跡の北側約1.2kmには旧阿賀野川の流路である通船川が流れており、遺跡と川の間はその氾濫原にあたる。南側には砂丘間低地を挟んで、牡丹山-中山-近江の集落をのせる標高1m前後の砂丘（新砂丘Ⅱ）が並行している。

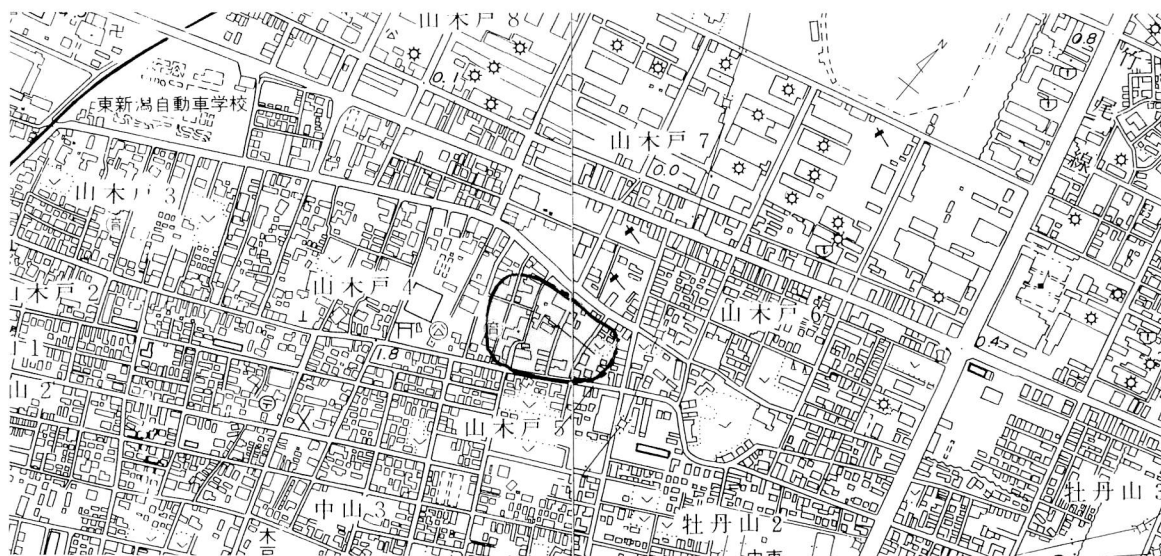
周辺の遺跡はいずれも砂丘列か自然堤防上に立地しており、古代から中世にかけての時期が多い。調査が行われた遺跡は少なく、実態は不明である。遺跡の周辺は市街化が進み、住宅や工場が密集して立ち並ぶ。地表面はアスファルトで覆われ、砂丘の高まりに沿って点在する畑地が旧地形の面影をわずかに残している。



第3図 地形概念図

凡例

-  新砂丘Ⅰ
-  新砂丘Ⅱ
-  新砂丘Ⅲ



第4図 遺跡位置図 (S=1/10,000)

Ⅲ 調査の概要

1 調査の方法

(1) グリッドの設定

発掘区が細長い区画となることから、作業効率を考慮し、グリッド軸を調査区の長軸に合わせて設定した。グリッド軸は真北から約21度に西偏する。グリッドは20m方眼で、さらに4m角の小グリッドに区分した。グリッドの呼称は、大グリッドが東西軸をアルファベット順、南北軸にアラビア数字とした。小グリッドは北西隅が1番として西から東に数え、南東隅が25番となる。

(2) 表土の除去

試掘調査により、地表には厚く耕作土や客土が堆積していることがわかったため、表土の除去にはバックホーを使用した。削平およびかく乱が深く見られたため、包含層上部の暗褐色土まで重機で除去した。

(3) 遺物包含層の掘削

遺物包含層は全て人力発掘とした。包含層発掘面積は1,440㎡で、平均層厚は40cmである。以下は遺構の精査を繰り返しながら人力で掘り下げ、排土はベルトコンベアーで発掘区の周囲に盛った。包含層遺物は小グリッド単位（4m角）で取り上げた。

(4) 遺構の検出・実測

包含層掘削後、遺構の検出のため精査を行った。遺構は形状や出土遺物から掘立柱建物・土坑・溝・性格不明遺構などに分類し、種別毎に通し番号をつけた。遺構番号は検出順に付したが、一部整理作業時に付け替えた。小穴は小グリッド毎に整理し、番号をつけた。

遺構測量には平板測量と簡易遺方測量を併用した。井戸などの大きい遺構は1/4や1/2に分割し、断面を観察しながら少しずつ掘り下げた。掘立柱建物の柱穴などは半裁して掘り下げた。遺構内遺物は原則としてレベルおよび出土位置を記録したが、一部は層位ごとに取上げた。図面は平・断面図が1/20、微細図が1/10である。レベルは山木戸3丁目の水準点（標高+1.174m）から移動して使用した。

最後に平板測量を行い、遺構全測図を1/100で作成した。

2 層序

調査範囲は教会屋敷地として利用されていたところであり、標高は0m前後の平坦面である。南から北へゆるく傾斜しているが、ところどころ小砂丘の起伏があり、頂部にあたる場所は削平が進み、凹地のところに包含層が残存している。全体にかく乱が多く見られ、北側に向かうにつれて客土が厚くなっている。

1層 耕作土及び表土

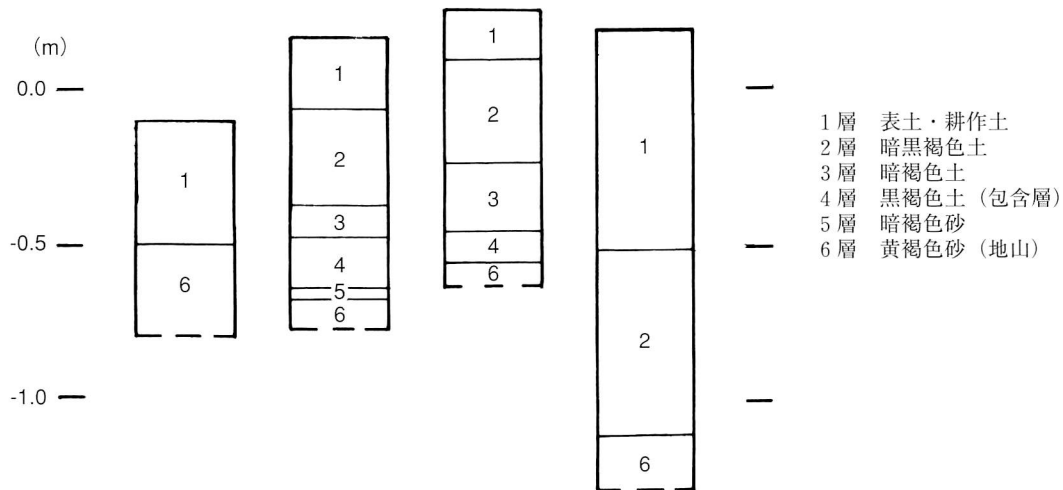
2層 暗黒褐色土（近代以降の客土層）南部の6Bグリッドでは比較的単一な様相を示すが、北部の2Aグリッドでは数枚の層に区分される。

3層 暗褐色土（客土層）2層よりやや褐色をおびる。固くしまっており、近世・近代の陶磁器から平安・中世の遺物が出土する。

4層 黒褐色土（遺物包含層）3B・5B・5Cグリッドを中心に存在し、それ以外は削平されているところが多い。平安・中世の遺物包含層であるが、層位的な時代の区分は不可能であった。

5層 暗褐色砂 地山と包含層の漸移層であるが、あまり発達せず、存在しないところもある。遺構はこの層から地山層にかけて初めて明瞭となる。

6層 黄褐色砂（遺構確認面）地山を形成する砂層である。平安・中世の遺構の多くはこの面で検出した。



第5図 土層柱状図

3 調査の経過

5月上旬 準備作業開始。

下旬 工事立会い。

27日 現地の建物撤去終了後、調査地北側部分（2 B 8）で試掘調査を行った。基盤砂層まで後世のかく乱や削平が及んでいるのを確認した。上層の客土からも遺物が発見されたため、当初の予定通り人力で調査を行うこととした。

28日 発掘区の表土除去を開始。

6月1日 現地プレハブ、仮設トイレを設置。

2～4日 グリッド杭打ちを行う。

6日 作業員雇用開始。調査開始。ベルトコンベアーを設置。

10日 雨のため発掘作業を中止。職員で遺物の選別、袋詰作業を行う。これ以降天候の不順な日が多く、たびたび野外作業の中断を余儀なくされた。

6月下旬～7月上旬 5 B・5 Cグリッドの暗褐色土を掘り下げ、包含層の残存状況確認のため精査。近代のかく乱が多く、包含層の確認に手間取る。包含層は凹地上に堆積し、砂丘間の地形に合致した残存状況を示す。包含層上面で遺構の確認を行うが、不明瞭なため移植ゴテで掘り下げる。遺構は地山直上の暗褐色砂層（5層）になって明瞭に捉えられる。包含層中は平安時代と中世の遺物が混在する。緑釉陶器や灰釉陶器の破片が出土し、一般集落と異なる様相をうかがわせる。順次北側に向かって調査を進めた。

7月16日 この日より雨の日が多く、22日には豪雨のため5 B・5 Cグリッドが冠水。24日までポンプで排水作業を行う。遺構確認面は標高-0.7m前後と低いいため水はけが悪い。排水体制が整うまで遺構の発掘は中止し、北側の3 B・4 Bグリッドに作業面を拡大する。

8月5日 5 B・5 Cグリッドの遺構調査を開始。直径1 m程度の円形プランは井戸であることが判明。その他多数の小穴を検出。

9日 北側の2 Bグリッドを掘り下げるが、基盤の砂層まで削平され、かく乱を受けているためSK 6以北の拡張を断念し、南側発掘区の精査に専念することとした。

中旬～下旬 井戸等遺構の掘り下げを継続。ほとんどの井戸で井戸枠など部材が残っているのを発見。曲物が多い。平安時代の遺物は小破片が多く、上～下層からはやや大型の破片を含め、珠洲焼や青磁の破片が出土した。

9月2日 5C1・2グリッドのSX6は平面プランの確認が難しく、ジョレンがけを繰り返す。隅丸方形の平面形であるが、約半分が調査区外に延びている。あるいは堅穴式住居かとも思われる。

5日 写真撮影のため発掘調査区全体を清掃する。SD4より、底部に墨書のある土師器皿が完形で出土。

6日 山木戸保育園屋上より遺跡の全体写真を撮影。5B・5Cグリッドでの遺構実測作業の継続。3B17グリッドで大型の土坑を検出。2基の井戸が重複していることが判明。遺構の掘り下げを急ぐ。翌日の現地説明会の準備。

7日 午後2時より現地説明会を開催。地元住民の方々を中心として200名を超える参加があった。見学者多数のため2班に分けて遺構や遺物の説明を行う。参加者には資料を配布。

8～17日 遅れている井戸等の実測を継続。井戸は曲物が2段に積み重ねられているものが多く、その内側の発掘に手間取った。遺構確認面より1m下で湧水。並行して地表面のレベルを計測。

18日 井戸部材取り上げを開始。SE5・SE6は下部の曲物がしっかりしており、側板も残存。SE3・SE8は脆弱。湧水が激しく、砂の流入が多いため取り上げが難航。

19～26日 井戸部材取り上げを続行。2段重ねの井戸は下部曲物の取り上げがなかなか進まない。取り上げと並行して下部のエレベーション図作成。

27日 焼土遺構の実測・記録を終了。現場撤収準備。

30日 現場より機材を撤収。現地調査終了。

10月25日 新教生第435号により新潟東警察署長宛て遺物発見届・埋蔵物保管請書、県教育委員会宛て埋蔵文化財保管証提出。



発掘調査オールスタッフ

2

3

4

5

6



第6図 調査区全体図

Ⅳ 遺構と出土遺物

1 概要

発掘地のうち、3 Bグリッドの北側は後世のかく乱を受けている。また、4 Aグリッドの細長い発掘区には近世以降のかく乱などが数多くあり、当時の遺構を破壊している可能性がある。遺物包含層の厚さは平均40cmで、平安時代から中世の遺物が混在する。

遺構は地山である黄褐色砂層を確認面として検出した。覆土が暗褐色～黒褐色土（砂）のものが多く、包含層とよく似た色調をしていた。そのため、掘り込みが浅く、地山まで達していない遺構は見逃した可能性がある。遺構はほとんどが標高-0.5～-0.7mに集中している。平安時代の遺構は土坑（SK 1・2・12・13）4基と性格不明の遺構（SX 6）が1基ある。それらの位置関係を見ると、SK 2とSK 12が近接しているほかは、調査区内に散在している。中世では掘立柱建物3棟（SB 1～3）、溝3条（SD 1～3）、井戸11基（SE 1～11）、土坑9基（SK 3～11）、小穴300基以上などがあり、4 Bグリッドを境に北側と南側に分かれて分布する。

遺物は土器・陶磁器類コンテナ117箱、木製品水槽4槽分出土した。土器類は約8割が平安時代に属する。ほとんどが小片で遺構以外から出土して復元できるものは少ない。木製品は井戸及び土坑から出土している。挿図・図版には主なものを選択して示した。

2 平安時代の遺構と遺物

SKは土坑、SXは性格不明の遺構をさす。

SK 1（第15・21図97、写真図版6・12） 一辺約1mの隅丸形状の土坑。深さ26cmを計る。覆土は2層に分かれ、両方から平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。97は長頸瓶である。

SK 2（第15・21図98、写真図版6・12） 歪んだ円形の土坑。北東端が調査区外にかかり、全体の大きさは不明である。深さ40cm以上を計る。覆土は3層に分かれる。98は須恵器有台坏である。このほかに小型の須恵器の坏蓋の破片などが出土した。

SK 12（第15・22図108・109） 小型楕円形の土坑。長軸60cm、深さ24cmを計る。108の須恵器短頸壺がつぶれた状態で出土している。同一個体と思われる甕の破片が多量に出土している。

SK 13（第7・22図110、写真図版6） ほぼ円形の土坑。土坑内からは、土師器小甕が口縁を下に向けた状態で出土した。土器は2次的に火を受けた跡があるが、この土坑内で受けたものかわからない。

SX 6（第9・16・17図1～35、写真図版2・9・10） 隅丸形状の土坑。南側長辺は約4.8mを計る。地山から床面まで40cm近く掘り込んでいる。遺物は4層から確認でき、7層で最も多く出土した。底面からは十数cm浮いた状態であった。大きさ、形状から古代の堅穴式住居の可能性を検討したが、柱穴、カマド等の付帯施設が確認できず、不明遺構とした。出土した遺物は9世紀後半のものが主体である。

遺構外出土の遺物（第22～25図111～214、写真図版12～13・19） 遺構外の遺物は包含層4層を中心とし、下部の5層、上部の3層およびかく乱層から出土している。土器は、土師器、須恵器、遠隔地から搬入された京都篠窯産須恵器（130・131）、緑釉陶器、灰釉陶器があげられる。

須恵器の甕や土師器長胴甕・鍋などは比較的多く出土したが、小破片が大半を占めたため、図化できたものは数点にとどまった。本報告の際に個体識別数は増える見込である。また、施釉陶器の年代などから9世紀後半～10世紀代が中心と考えられる。

須恵器 112～120は形や胎土から佐渡産と思われる。114の底部が回転ヘラケズリ調整されている。114以外は回転ヘラ切り調整である。121は双耳坏で、県内の消費地遺跡で数点出土しているが、生産地では確認されていない。132～139は底部回転糸切調整の須恵器である。141・142は双耳瓶の耳である。

土師器 111の土師器甕は内外面ともハケによる調整がみられる。古墳時代のものと思われる。

143～148は無台椀、149～151は無台皿である。152は双耳椀である。土師器でこの形状のものはこれ1点のみの出土である。156の土師器甕の口縁部内面は横方向のハケメが残り、外側は輪積痕がみられる。体部外面は縦方向のハケメが残る。口縁部内部のハケメと同じ工具を用いたようである。口縁端部には浅い沈線が施されている。他の長胴甕や佐渡甕と胎土が異なり、やや粗い胎土を使用する。157の土師器甕は外面は縦方向のハケメ調整が施され、内面はナデられている。胴部に火を受けた跡があり、特に外面は表面が剥離している個所がある。

緑釉陶器 素地は軟質の淡褐色で、釉色は淡黄緑色を呈する。底部は削り出し高台である。9世紀後半代の京都産の可能性があると指摘されている。

灰釉陶器 164～167は皿、168～170は椀である。少し粗い胎土でやや灰色味がかかった色をしており、猿投産の可能性が指摘されている。高台は図示できなかったものも含め、三日月状を呈するものがほとんどである。瓶は器壁が薄く、丁寧なつくりである。鉢の胎土は壺等に比べ、ざらついて砂っぽい。

石製品 黒色安山岩製の鈍尾が1点出土している。長さ45mm、幅29.5mm、厚さ5.5mm、重さ16.9gである。表面はよく磨かれ、光沢がある。裏面は2対の穴が3箇所穿孔されている。

墨書土器 68点確認できたうち、良好なものを選んで図示した。器種では須恵器無台坏・坏蓋、土師器椀・皿があり、須恵器無台坏が2/3を占めている。土器にかかれた文字は1字のものが多い。「福」「善」等の吉祥を示す文字もあるが、多くは意味が不明である。底部に文字が書かれているものが多い。土師器は、体部に書かれるものが比較的多いようである。

3 中世の遺構と遺物

S Bは掘立柱建物、S Eは井戸、S Kは土坑、S Dは溝をさす。

掘立柱建物は3棟確認されている。小穴は多いが規格性をもって並ぶものは少なく、柱根も残っていなかった。井戸は全部で11基検出した。素掘りや石組みの井戸はなく、いずれも板や曲物、削り抜き材など木材を利用している。井戸の部材の残存状況は良好である。主要な遺構について記述する。

S B 1（第7・8図、写真図版2） 3間（6.5m）×2間（3.6m）の南北棟建物で、方位は北から14度西偏する。南妻の中柱は検出されていない。桁行の柱間寸法は南側へ行くに従い広がる。建物内の南側半分は、深さ約50cmの掘り込みがあり、そこからは長径約14cmの鉄滓が出土した。また、それに隣接して覆土に炭化物を多く含んだ浅いくぼみがある。建物外の東側には焼土A～Cがある。これらはS B 1に伴う遺構

と考えられ、鍛冶関連の建物と思われる。

S B 2 (第9図) 4間(8.1m) × 2間(7.2m)の総柱南北棟建物で、方位は北から23度西偏する。柱間寸法は梁行で約3.6m、桁行では南北の妻側が1.9m、中央2間が約2.2mである。東柱の深さは他の柱穴とあまり変わらない。

S B 3 (第7図、写真図版2) 2間(4.4m) × 1間(3.0m)の小形の南北棟建物である。方位は北から13度西偏し、S B 1とほぼ同じ方位を示す。柱の深さは約40~50cmで、S B 1・2よりやや深い。

S E 1 (第10・18図36~39、写真図版3・10・21・24) 直径約1.76mの平面形を呈する。深さは1.6mほどである。掘り形は湧水が激しかったため、明確にとらえることはできなかった。直径60cmほどの円形の削り抜き材を水溜とし、その周りを縦板で囲っている。須恵器の無台坏・甕と珠洲焼のすり鉢・甕(壺か)、箸などが出土している。

S E 2 (第10・18図40~48、写真図版3・10・21) 直径約2.28mの平面形を呈する。桶を転用して水溜とし、その上部に横棧を組み、その外側に縦板を2重に周している。縦板の上部は少し傷んでいた。桶板には作成時に付けたと思われる印が残っている。井戸の廃棄時に円礫を数点投げ込んでいる。珠洲焼の鉢・甕、土師質土器の小皿等が出土している。

S E 3 (第10・18図49~51、写真図版3・10・22) 調査区外に南端がかかるため全形はわからないが、約1.8mの円形になるものと思われる。曲物を2段に重ねている。上部の曲物はやや残りが悪い。上下とも直径約65cm前後の大きさで、同一個体を分割した可能性がある。井戸内から梅か桃の種子が3点出土しており、井戸廃棄の行為に伴うものと思われる。このほかに珠洲焼甕・鉢や、土師器の細片が少量出土している。

S E 4 (第11・18図52~54、写真図版3・10・22) 平面形はほぼ円形で、直径2.5mほどである。井戸枠に厚さ45mmの削り抜き材を用いる。瓷器系陶器の壺や白磁の椀・皿の底部等が出土している。

S E 5 (第11・19図55~60、写真図版4・10・22) 平面形はやや歪んだ円形で、直径2.9mほどである。曲物を2段に重ね、その外側を板で一部囲っている。本来は周囲を覆っていたものと思われる。須恵器甕、土師器無台椀、瓷器系陶器甕などが出土している。60は土師質土器皿で底部ヘラ切り無調整である。胎土は精良で、直径3~4mm程度の石英と微細な赤・白色粒子が含まれている。これらの遺物から使用年代は14世紀頃以前と推定される。

S E 6 (第11・19図61~67、写真図版4・10・23) 平面形は約3.1mの円形を呈し、深さ約1.1mである。曲物を2段に重ね、上部の曲物の周りに縦板を数枚巡らせている。須恵器甕、珠洲焼甕、土師器無台椀、箸などが出土している。

S E 7 (第12図、写真図版4・10・23) 半分ほどが調査区外にかかったため、大きさや形状は推定であ

る。平面形は約3.1mの円形を呈し、深さ約1.1m以上と考えられる。直径55cmほどの曲物を水溜とし、曲物の外周に横棧を方形に組み、その周りに厚手の板を巡らせている。板はやや丸みを持つ。須恵器坏・甕、土師器甕・無台椀、土錘、鉄滓などが出ているが、細片のため図示しなかった。ほとんどが平安時代の遺物と思われる。

SE 8（第12図、写真図版4・10・23） 平面形は1辺1.20～1.35mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、深さ約1.4mである。曲物を1段水溜とし、周りに縦板を数枚巡らせている。須恵器甕、珠洲焼甕、土師器無台椀、箸などが出ている。

SE 9・10（第13・20図68～84、42図64～82、写真図版5・10・24） 2つ合わせた長軸の長さは約4.1mである。平面的にはそれぞれ直径2.5m前後の円形を呈すると思われる。覆土の堆積状況からSE 9が先行し、その後SE 10が作られたと推測される。

SE 9は平面は直径2.5m前後の円形を呈すると思われる。水溜までの深さは約1mである。曲物が2段に重なっており、縦板を周囲に立てている。上部の曲物は上端が傷み、土圧で少し歪んでいる。下部は上部にくらべ一回り小型の約40cm前後の曲物を使用している。SE 10は平面はSE 9とほぼ同じ大きさと思われるが、深さは約0.84mとSE 9より浅く曲物を1段検出したのみである。

76と77はいずれも土師質土器で柱状高台を持つ小皿と思われる。76は直径1～2mmの石英などを多量に含み、やや粗い胎土を用い、表面には指や爪のような跡が残る。77は混和材の量も少なく、比較的精良な粘土を使用し、外面には横方向のナデの跡がみられる。80は古墳時代の高坏で、脚部上半部である。このほかに須恵器甕、珠洲焼・瓷器系甕、箸などが出ている。

SE 11（第12・20図85～89、写真図版5・10・24） 約3mの不整円形の平面形を呈し、深さは約1.4mである。上下2段に曲物を重ね、さらに縦板を配している。19・20のような転用材も使われている。85は土師器甕で、古墳時代のものと思われる。口縁部外面にススが付着する。89は瓷器系陶器甕で、珠洲焼鉢、瓷器系陶器甕の破片などが出土している。

SD 1（第8・21図90・91、写真図版12） 長軸8.1m、幅1m、深さ14cm程度の溝である。覆土1層で、炭化物を含む。90・91は珠洲焼である。90はすり鉢で、内面のおろし目が8～9条みられる。12世紀代と思われる。

SD 2（第9・21図92・93、写真図版6・12） 長軸12.6m以上、幅0.4～0.8m、深さ20cm前後の溝である。92は内外面黒色土器である。底部欠損しているが、有台椀と思われる。山木戸遺跡では1点だけの出土である。93は用途不明の土製品である。また、溝の底からほぼ完形の土師器皿が出土している。遺物量は少ない。

SD 3（第8・21図94～96、写真図版12） 長軸7.0m、幅0.5～0.55m、深さ28cm前後の溝である。

SK 5・6（第7・21図97、写真図版12） 遺構の半分近くが調査区外のため、大きさや形状は推定である。SK 5と6で重複しているが、新旧関係はわからない。SK 5は直径2.6m程度の円形を呈すると思わ

れる。深さはSK6よりやや浅く、1.0～1.1mを計る。SK6は一辺約4mの隅丸方形の土坑と思われる。深さ1.2mを計る。北端はかく乱によって破壊されているため、立ちあがりがかっきりしない。珠洲焼のすり鉢や甕の破片が出土した。

遺構外出土の遺物（第26～30図215～337、第31・32図1～133、第33図1～43、写真図版14～18・20）

青磁・白磁、土師質土器、珠洲焼や越前焼などが出土した。時期は12世紀後半から15世紀前半までの幅があるが、15世紀代以降は遺物量が減少する。時期が特定できない土器片円盤や土錘もこの章で併せて記載する。また、今回は図示していないが、鉄滓や刀子・釘なども10点近く出土している。

中国産磁器 白磁・青磁・青白磁がある。器種としては碗や小皿などの食膳具が確認できる。壺などは見当たらない。小片が多いが、可能な限り図化した。

白磁 215～220は碗である。215～218は玉縁碗と呼ばれるもので、口径約15～16cm、胎土は粗く灰白色であり、釉はそれよりやや白い。外面の体部下半と底部には施釉されない。224～227は玉縁碗の底部と思われる。219～223は口縁端部が少し外反する。223・228は皿の可能性もある。229～231は小皿である。230は白色の釉がかけられ、内面に花文が施される高級品である。これらの白磁は12世紀後半に位置付けられている。

青磁 白磁と同様に食膳具が多い。器種は碗と坏が確認できる。232は内面に劃花文を配する。233～235は蓮弁文碗、236は櫛描文碗、242は内面見込に花卉文を印刻する細い線描文の碗である。237・239は坏の可能性もある。238・240は碗、241は小碗の底部である。

青白磁 244は青白色の釉がかかる花卉文小皿である。

土師質土器 器種は皿、小皿がある。245～251はロクロ成形で底部は回転ヘラ切り調整である。245～247は器壁が厚くやや身の深い皿で、248～251は小皿である。胎土は精良で淡褐色を呈する。252・253はてづくねによって成形されている。252～254は248～251より新しく、254は15世紀代のものであろうロクロナデ調整をしている。土師質土器は口縁部にススが付着し、灯明皿として使われたものが多い。255～266は柱状高台をもつ小皿として取り上げた。胎土が粗雑で、内面にハケメのような痕跡を持つものなどがある。坏部が欠損して形状が不明であり、時期については今後の検討を要する。

珠洲焼 破片が多く、図化したものはすり鉢が多い。器壁が厚手のものを甕として扱い、296～305を甕、306～321を壺として記載した。269～295はすり鉢である。269～272はI期、273・291～293・295はII期、278・280～284はIV期ごろのものと思われる。285・286のI期縁部は欠損しているが、12条のしっかりとしたおろし目が底部まで入っている。III～IV期ごろの可能性もある。294は菊花の刻印がある。306・307は頸部に波状文が施されている。308・309は小型の壺と思われる。

瓷器系陶器 ほとんどが甕の破片である。器形が復元できるものはない。322・323は比較的胎土が精良で、外面は黒褐色を呈する。常滑焼の可能性もある。325～331は外面は赤褐色で、直径1～2mmの石英等を含む。大半は笹神丘陵の産と思われるが、胎土が精良なものは越前焼の可能性もある。

土器片円盤 ここで取り上げたものは、主に須恵器甕胴部破片を素材とし、縁辺を割り揃えて直径約2～3cmの円形にしたものである。割れ口が磨耗しているものが多い。特に集中地点などは見られなかった。用途はわからない。

土錘 漁網の重りである。基本的に時代による形態変化があまり見られないため、中世以降のものも含まれている可能性がある。40点以上出土している。

V まとめ

山木戸遺跡1次調査では、古墳時代、平安時代、中世、近世にわたる遺構や遺物が発見された。遺跡が形成される主な期間は平安時代と中世の2時期に分かれる。年代的にはおよそ9世紀後半から10世紀代、12世紀代から15世紀代にわたる。この2時期を中心として遺物の構成や遺構について、これまでにわかったことを述べる。

1 平安時代

遺構は土坑4基と性格不明の遺構1基を確認したのみである。遺物は調査面積に対しテンバコ100箱分と量が多く、比較的規模が大きい集落であったことが予想される。9世紀後半に生産された緑釉陶器・灰釉陶器などの食膳具が破片ながらも10個体以上存在し、鉈尾や京都篠窯産須恵器など遠隔地で生産され、運ばれてきた遺物が目立つ。また、墨書土器の文字には、人名が少なく、吉祥文字や「寺」などの建物を指す字が見受けられ、一般的な居住区域とは異なる様相がうかがえる。当時周辺に存在したとされる港湾関連施設との関連があったことが考えられる。

また、越後では9世紀後半から10世紀代にかけて食膳具における須恵器と土師器の割合が変化し、土師器が増加する傾向が見られる。山木戸遺跡では土師器食膳具が少なく、10世紀前半に途絶えたものと思われる。

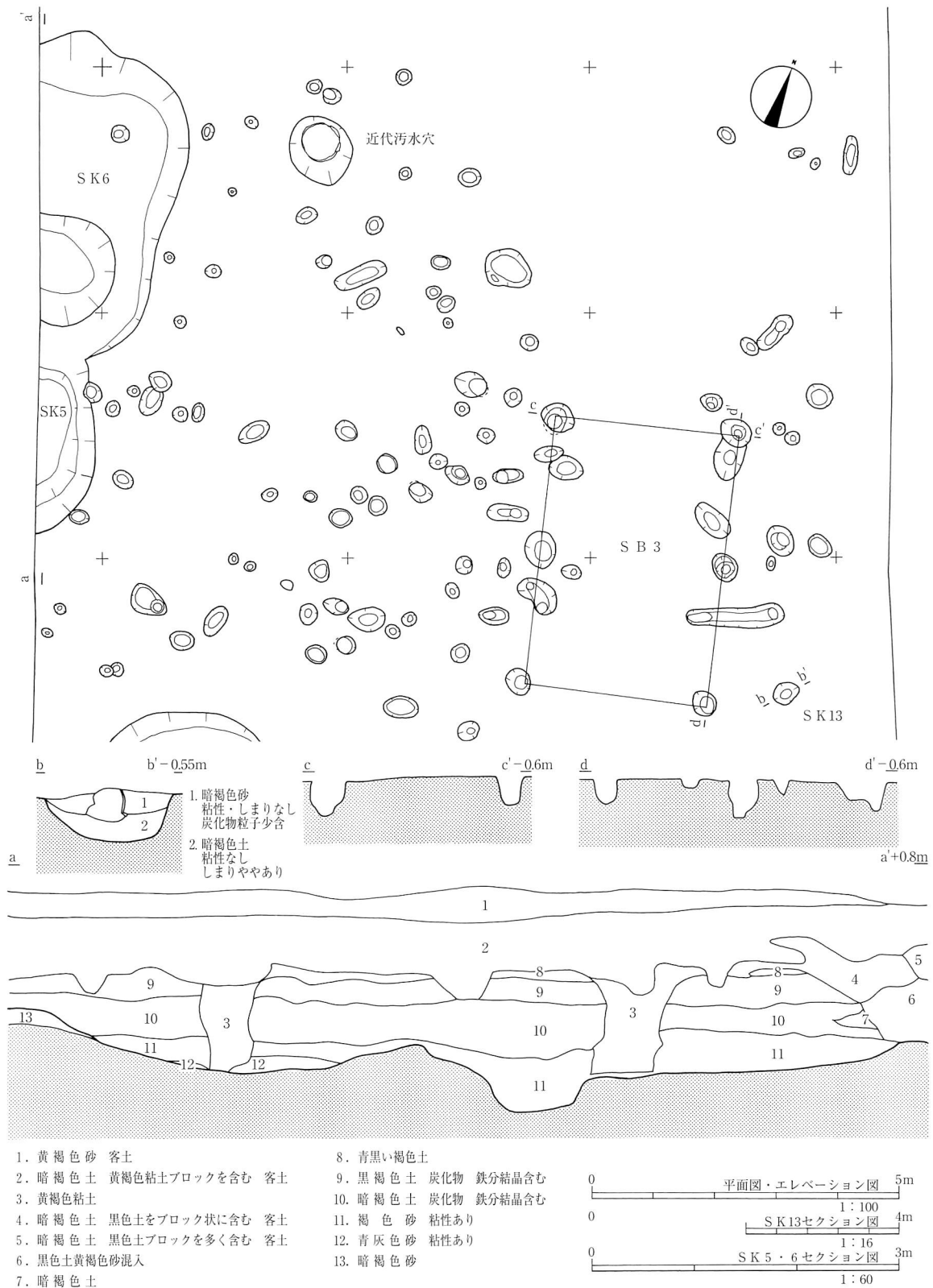
2 中世

12世紀代に比定される白磁玉縁碗の口縁部が出土していることから、このころから再びこの土地が利用されていたことがうかがえる。

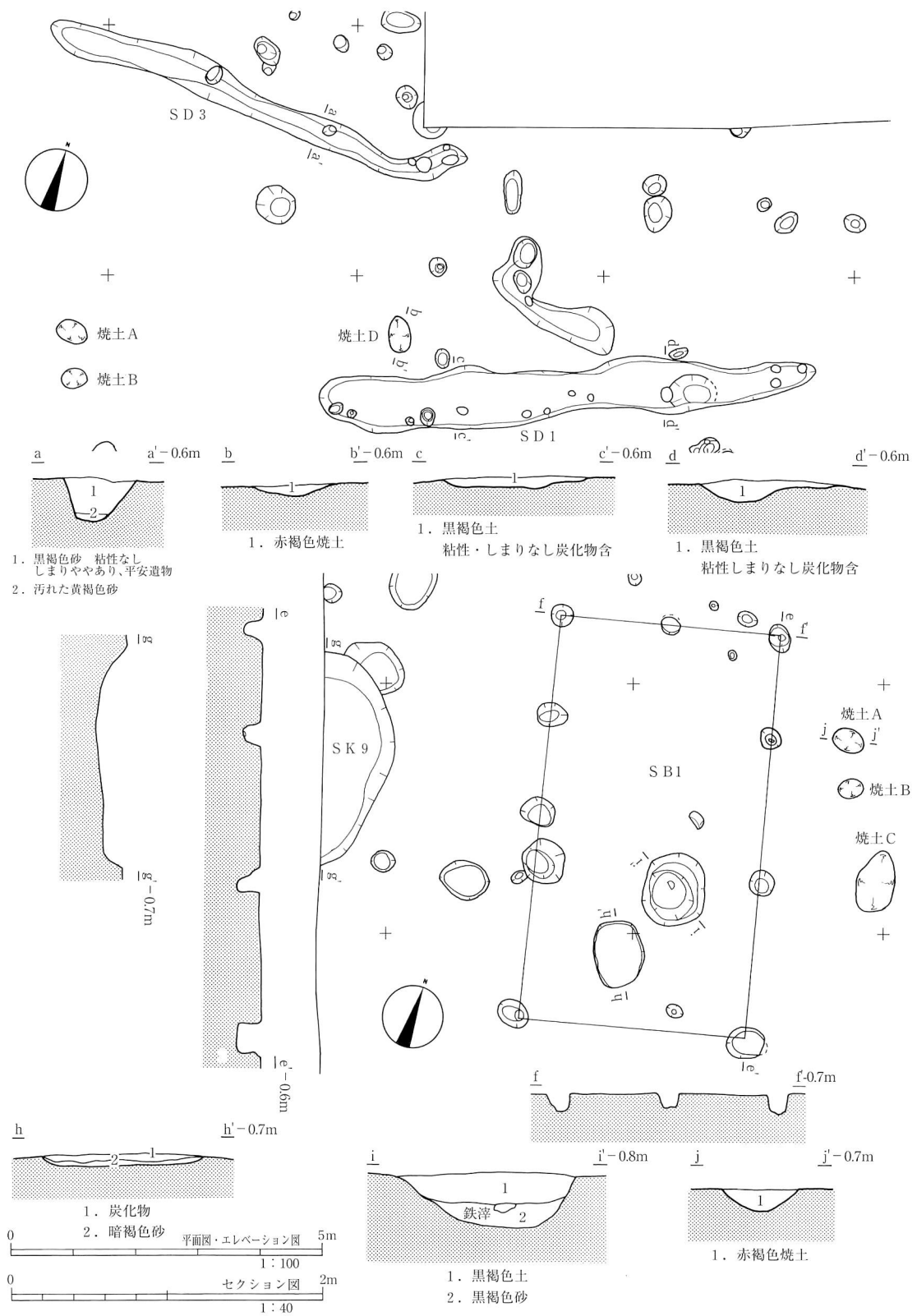
12世紀以降と思われる遺構としては、掘立柱建物・井戸・溝・土坑が検出されている。掘立柱建物は、二間×四間・一間×三間・一間×二間が各一棟ずつあるのみで、井戸が数多く見つまっていることから、この時期には集落を形成していると考えられる。井戸は、砂丘地に立地することから崩壊を防ぐための井戸枠がしっかりしているものが多く見られた。水溜部分の曲物だけ残っている井戸が複数あり、上部の井戸枠に用いられた縦板等を抜き取り、再利用した可能性が高い。

遺物は12世紀後半から14世紀代のものが主体であり、なかでも12世紀後半～13世紀代と14世紀代に遺物量増加のピークがある。また、越前焼のすり鉢がみられることから、15世紀代までは規模を縮小しながらも続いていたと考えられる。12～13世紀代の貿易陶磁が特に多くみられ、14世紀代以降のものはごく少量である。また、食器類の種別の構成をみると白磁や青磁などの貿易陶磁や、珠洲焼が比較的多く、在地で製作されたと考えられる土師質土器は少ない。また、漆器なども数点確認された。土師質土器は、てづくねやロクロ成形の小皿や皿、柱状高台などがある。しかし共伴資料に恵まれず、時期を特定することは難しい。今後周辺地域での資料の増加を待って比較することにした。また、遠隔地から搬入された陶磁器が多いことは、平安時代に引き続き、交易において大きな役割を担った可能性があり、重要な点と思われる。

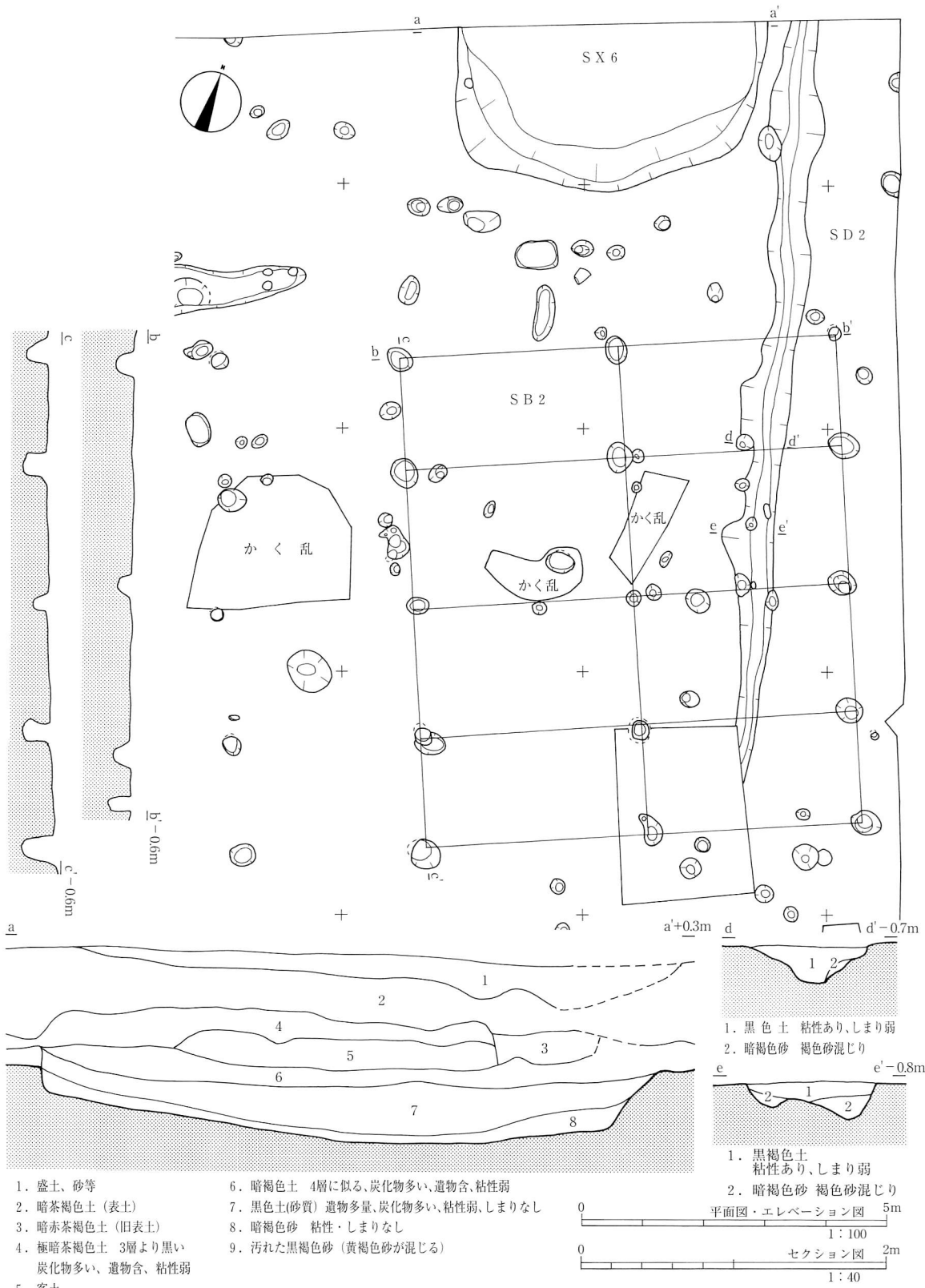
今回は約1,500㎡と比較的狭い調査面積であったが、県内でも事例の少ない中世前期を含む貴重な資料を得ることができた。今後改めて検討を加え、本報告を行う予定である。



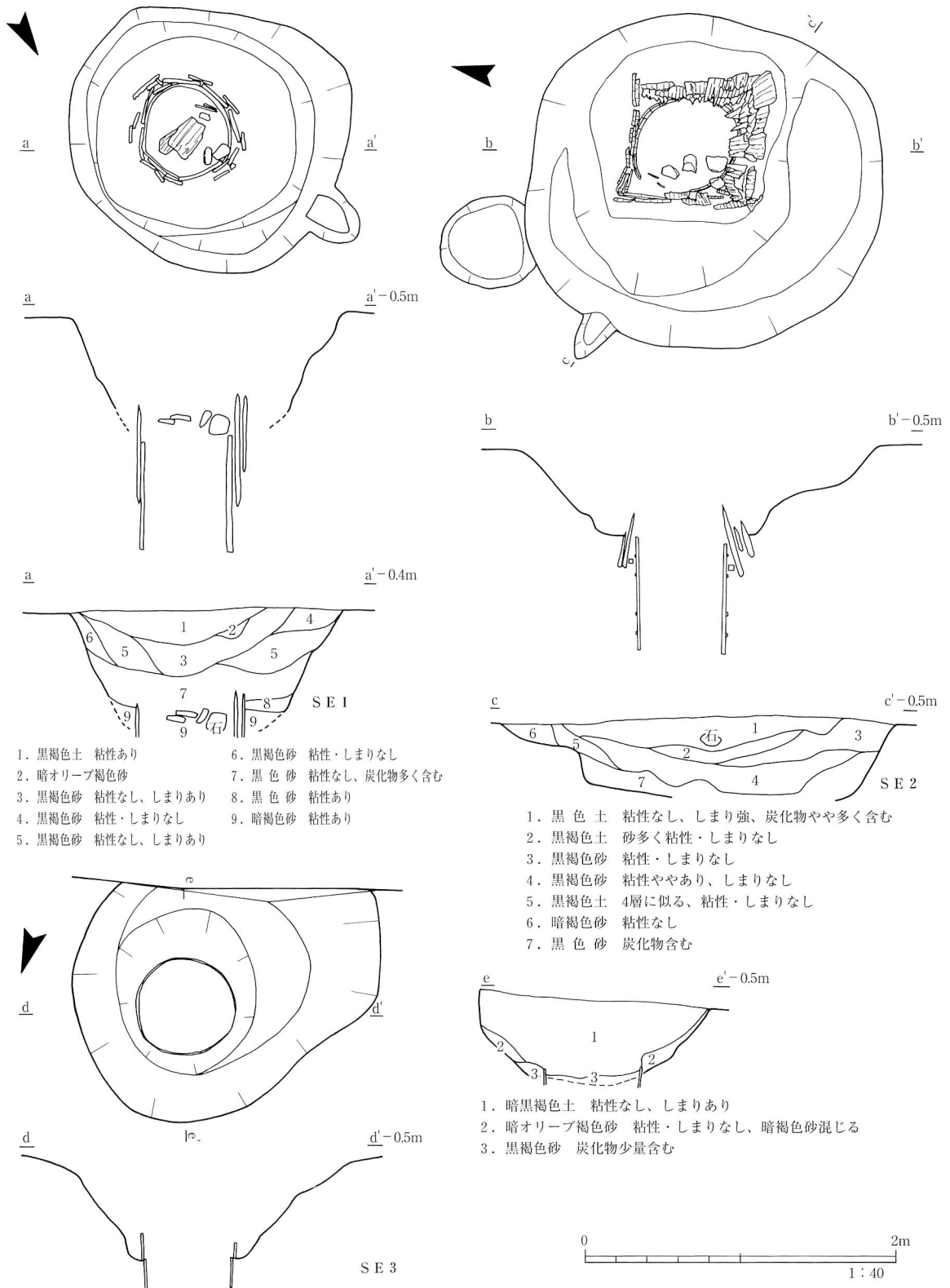
第7図 遺構実測図1 (SB3・SK5・6・13)



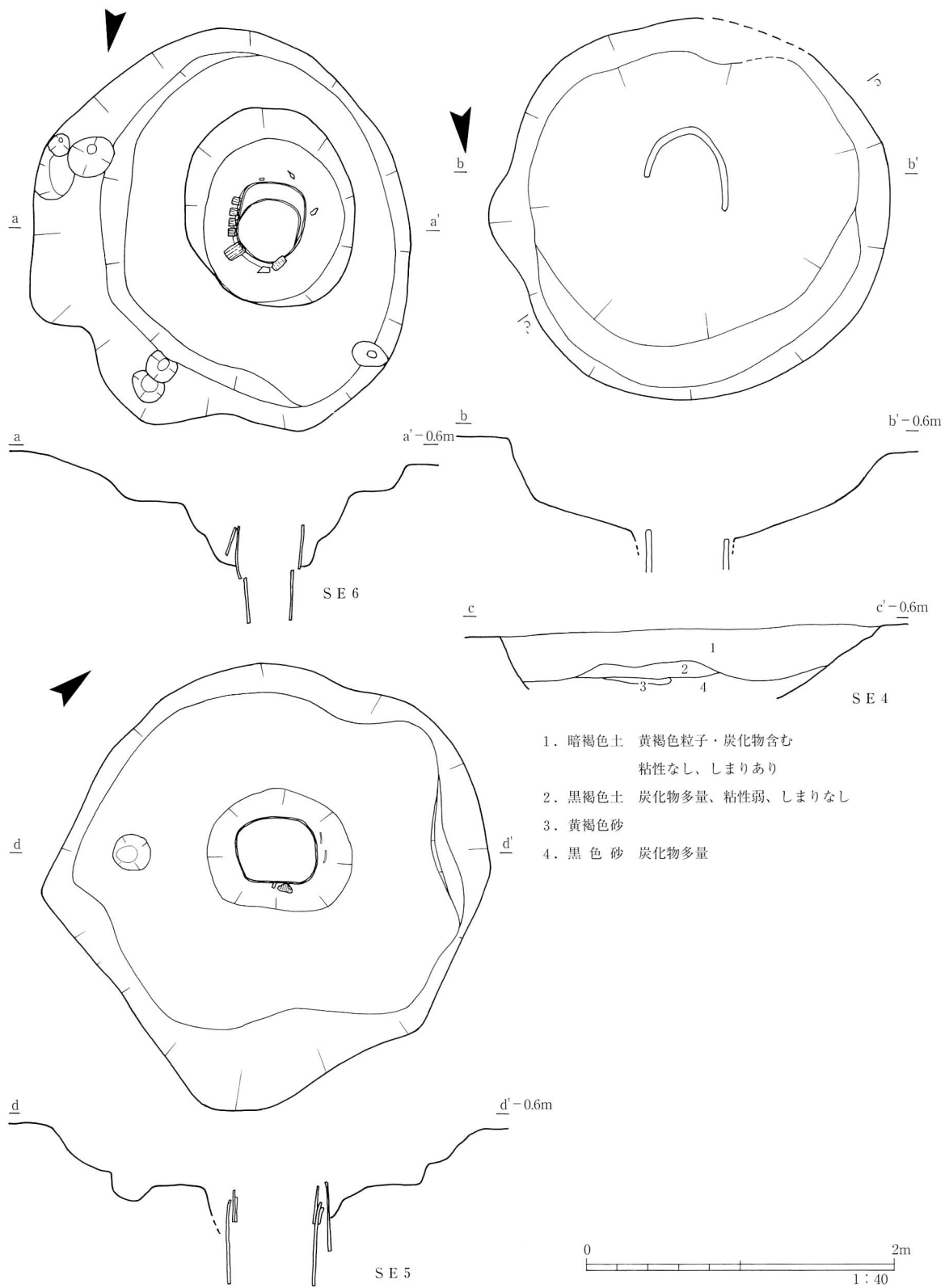
第 8 図 遺構実測図 2 (SD1・3・SB1・SK9・焼土)



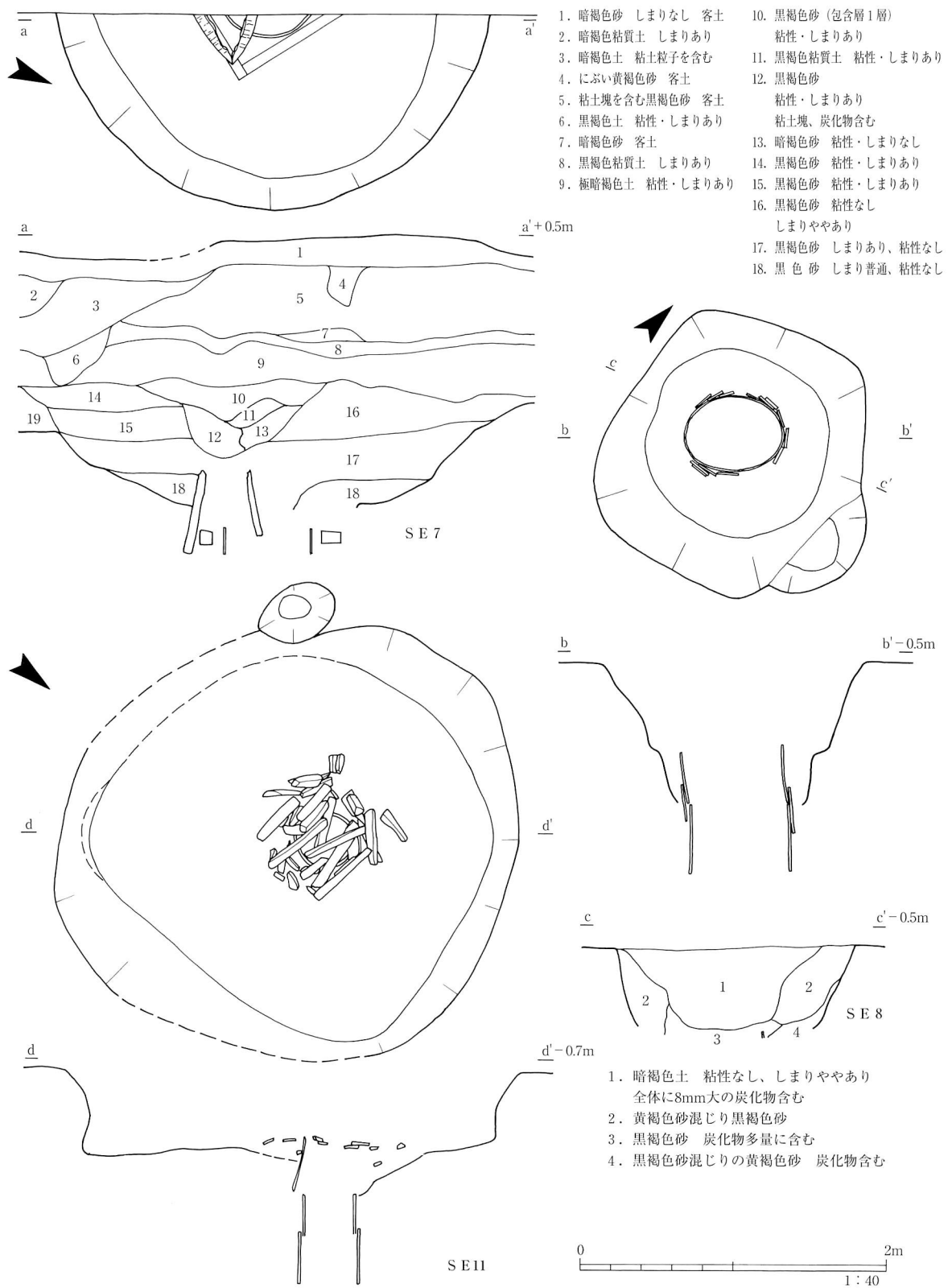
第9図 遺構実測図3 (SB2・SD2・SX6)



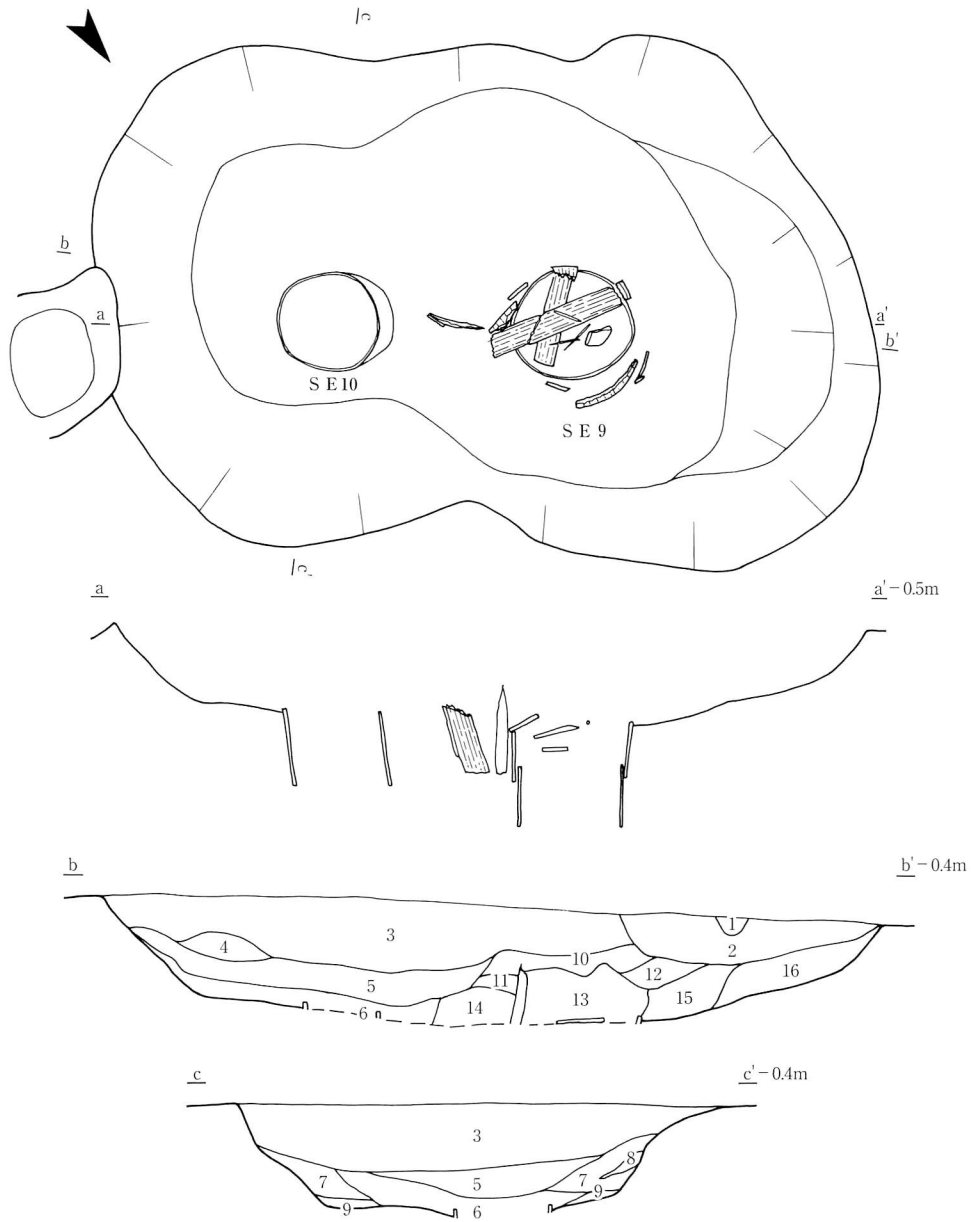
第10図 遺構実測図4 (SE1~3)



第11図 遺構実測図5 (SE4~6)



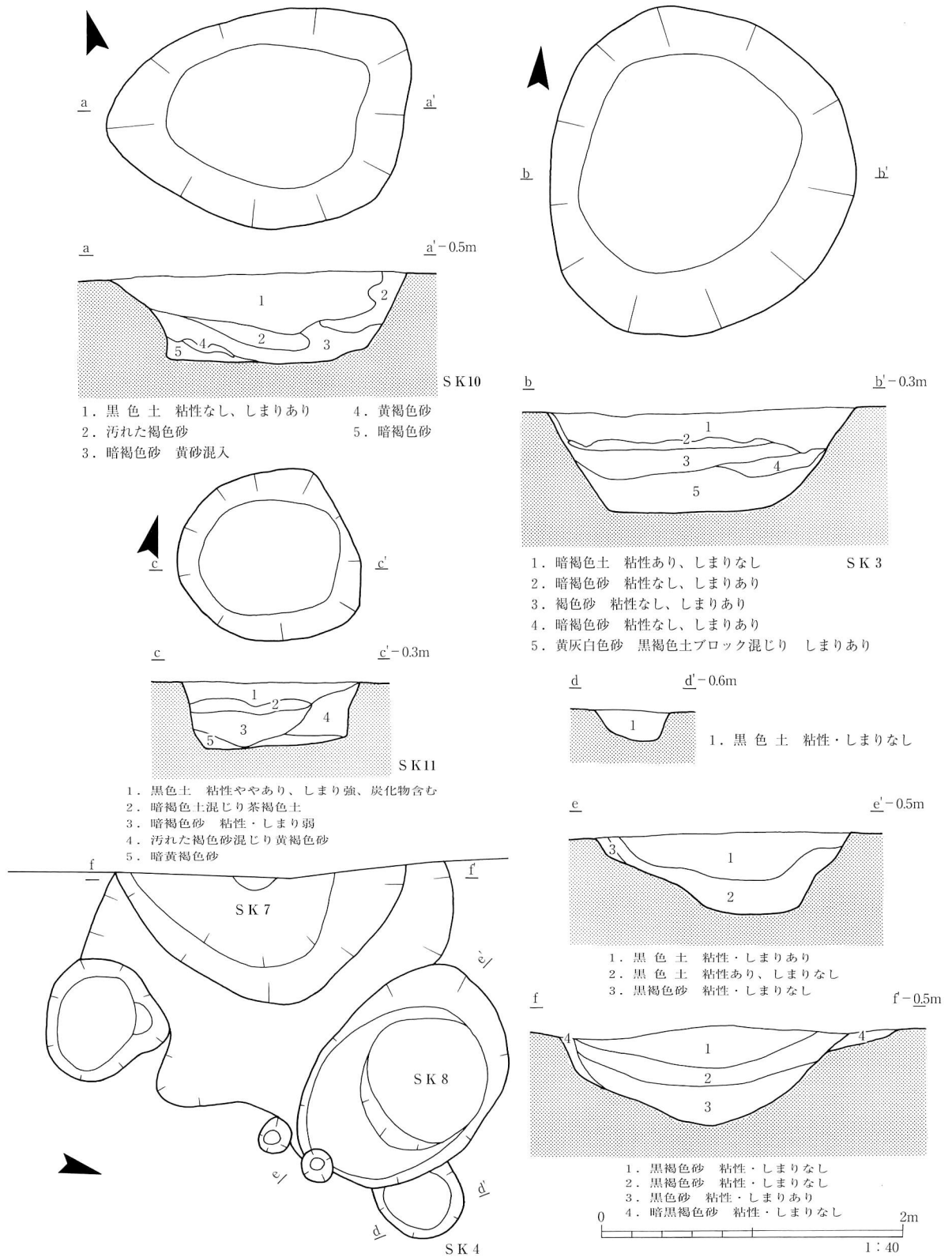
第12図 遺構実測図6 (SE7・8・11)



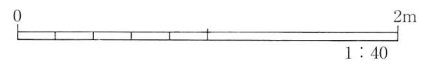
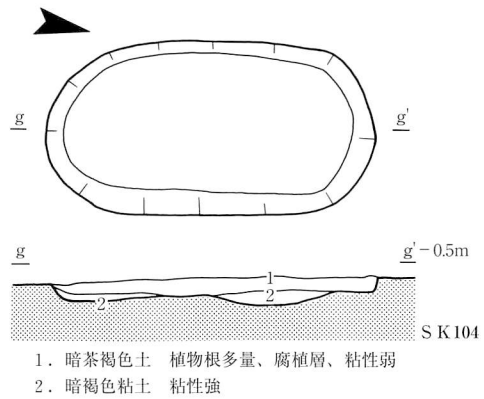
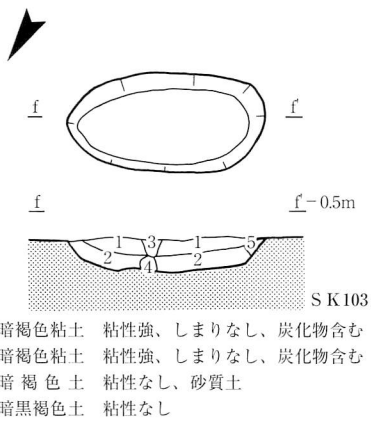
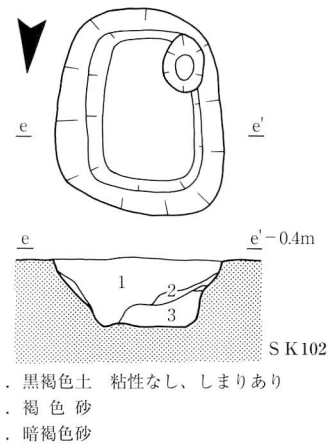
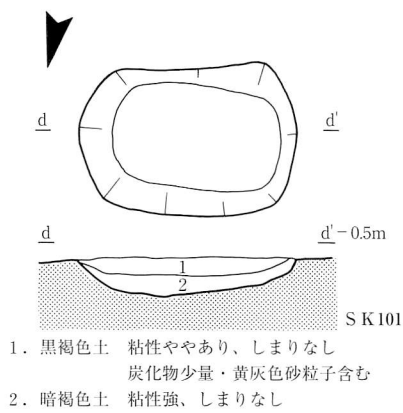
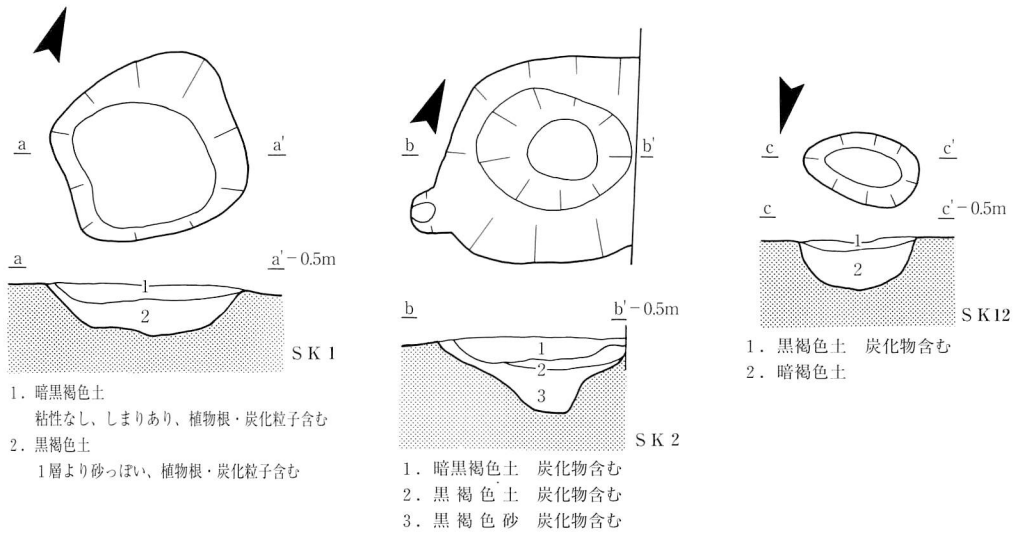
- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、径0.5~1cm大の炭化物多量含む</p> <p>2. 暗黒色土 粘性ややあり、しまりなし、炭化物・腐植物含む</p> <p>3. 黒色砂 粘性弱、しまりなし、炭化物・腐植物含む</p> <p>4. 暗黒褐色土 粘性・しまりややあり、炭化物・腐植物含む</p> <p>5. 汚れた黄褐色砂</p> <p>6. 黒褐色砂混じり黄褐色砂、炭化物・腐植物含む</p> <p>7. 汚れた黄褐色砂混じり黒褐色砂</p> <p>8. 暗褐色土 粘性なし、しまりあり</p> | <p>9. 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、炭化粒子含む</p> <p>10. 黒褐色土 砂質、粘性ややあり、しまりなし、炭化粒子含む</p> <p>11. 暗黒色土 粘性・しまりややあり、炭化粒子含む</p> <p>12. 暗黒褐色土 粘性・しまりあり、植物層・炭化粒子含む</p> <p>13. 黒褐色土 粘性あり、炭化粒子含む</p> <p>14. 暗褐色砂 汚れた黄砂・炭化粒子含む</p> <p>15. 黒色砂 粘性あり</p> <p>16. 黒色土 粘性あり、黄灰色砂混じり、植物含む</p> |
|---|--|



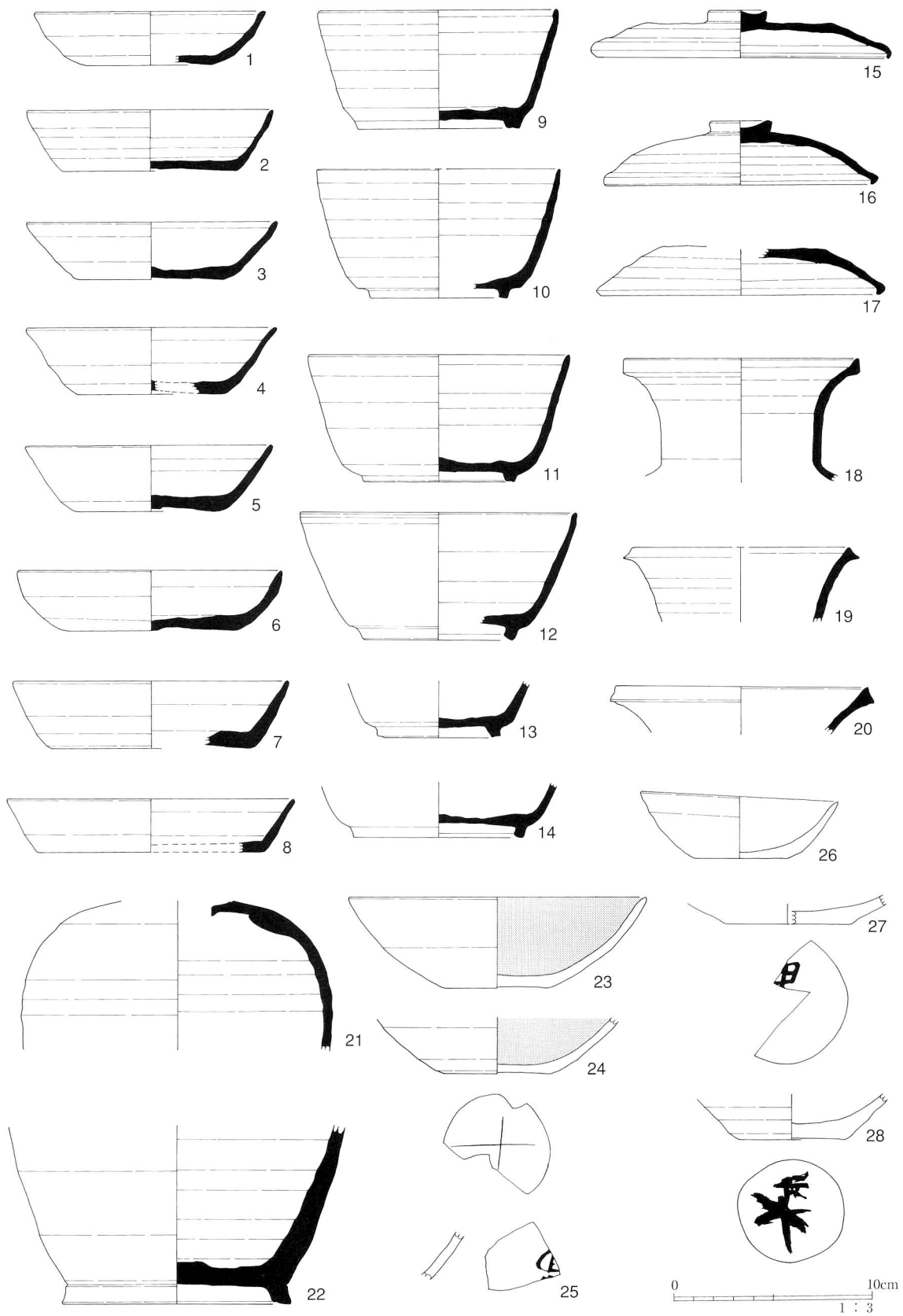
第13図 遺構実測図7 (SE9・10)



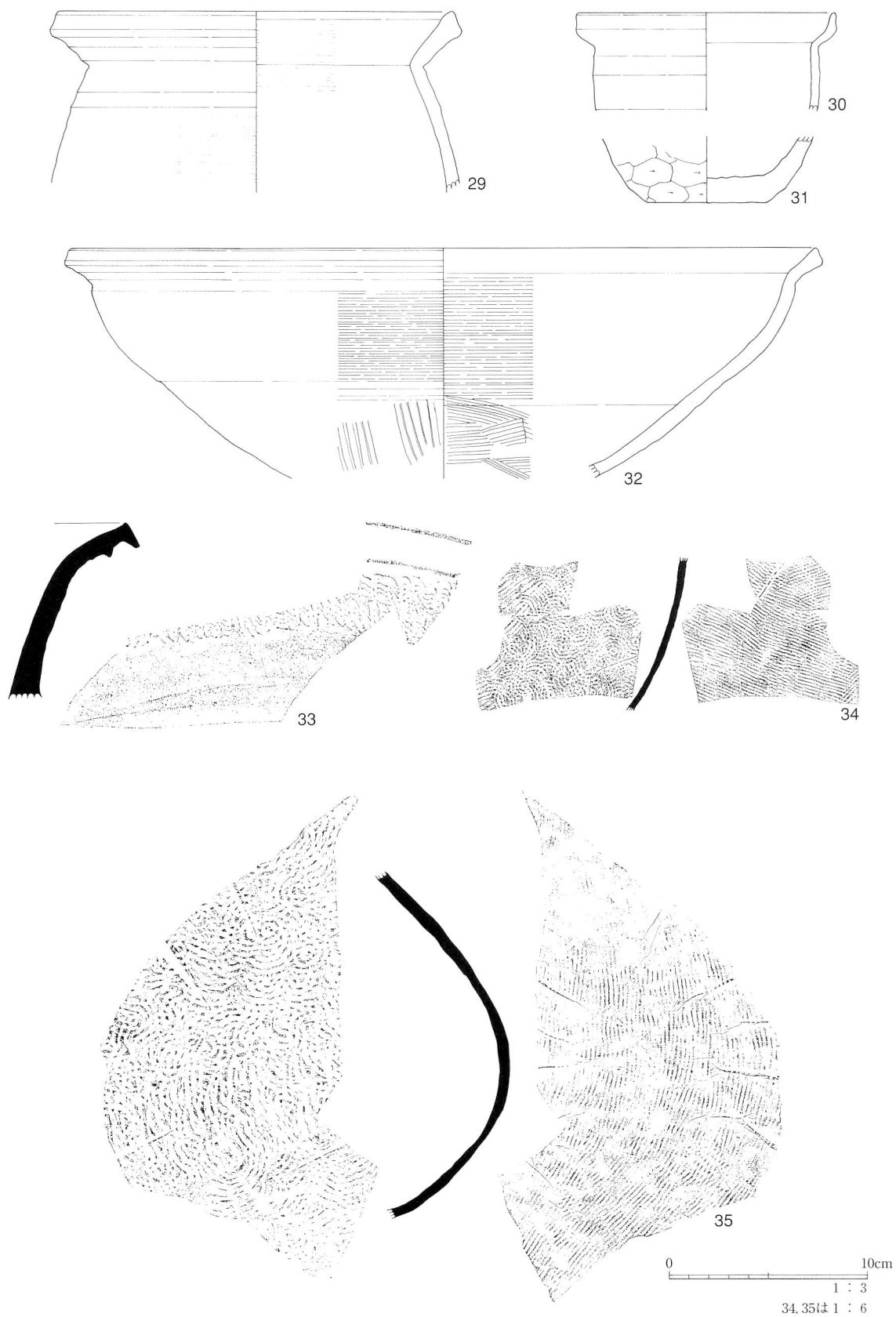
第14図 遺構実測図8 (SK3・4・7・8・10・11)



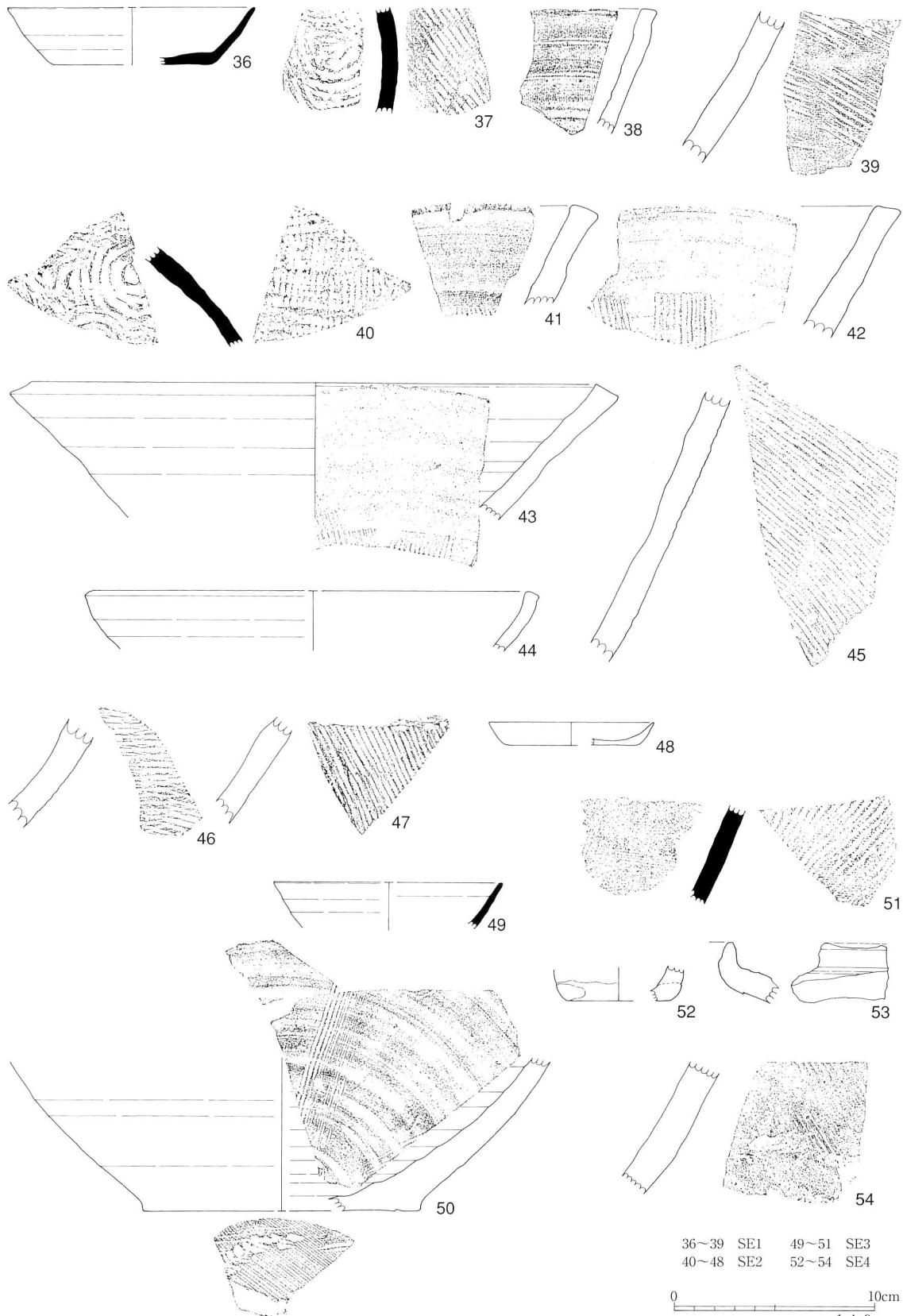
第15図 遺構実測図9 (SK1・2・12・101~104)



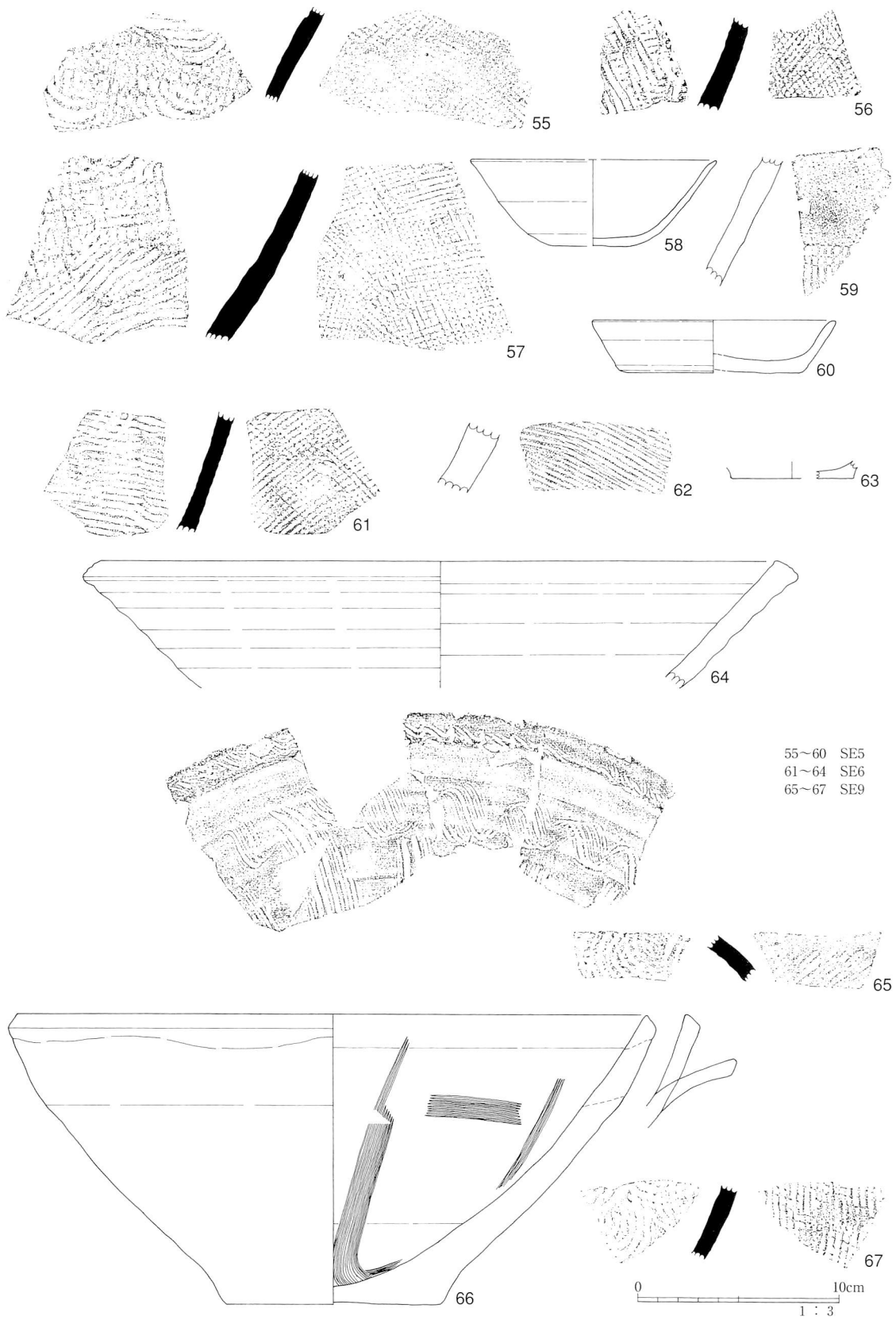
第16図 出土遺物1 (SX6)



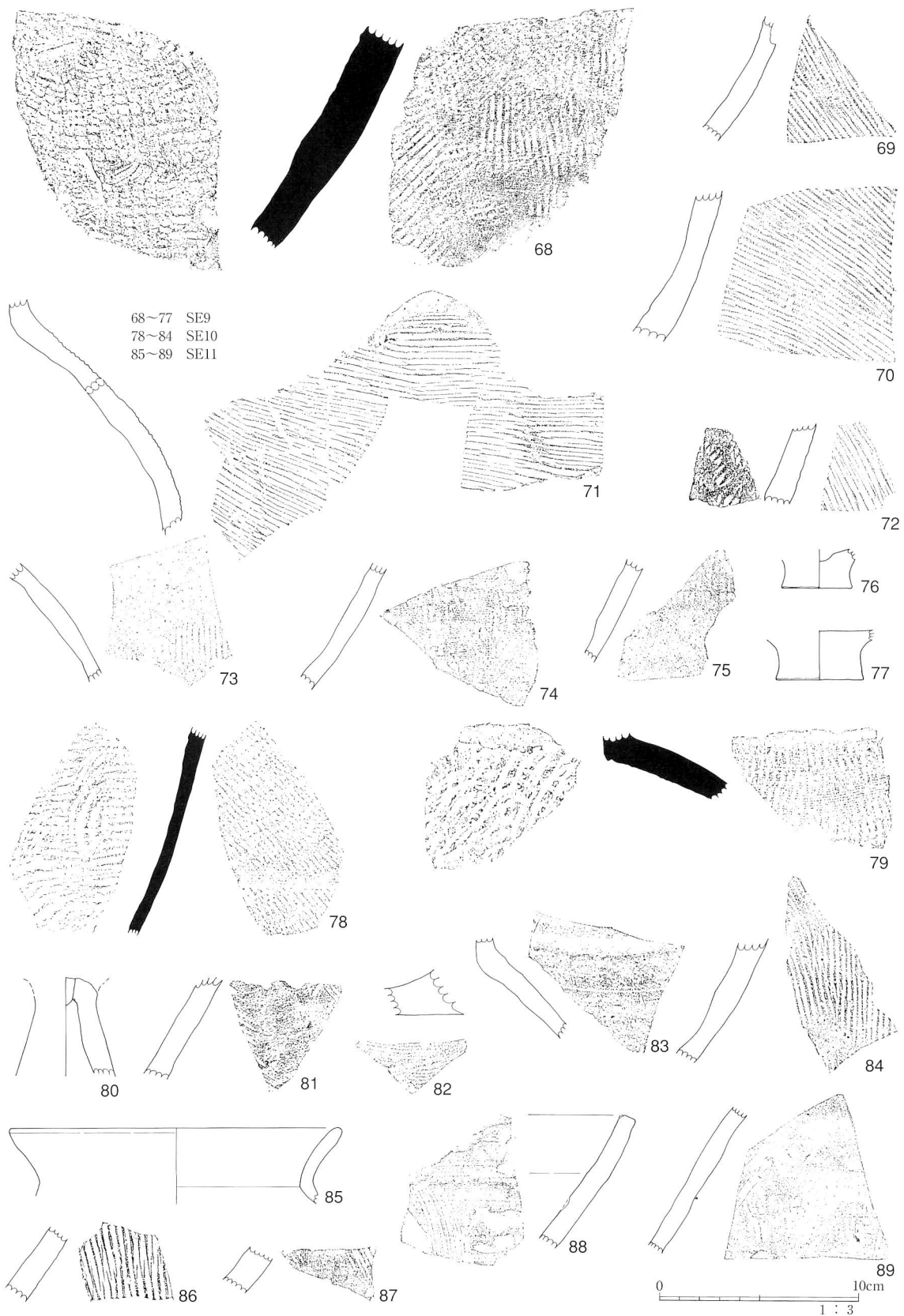
第17図 出土遺物2 (SX6)



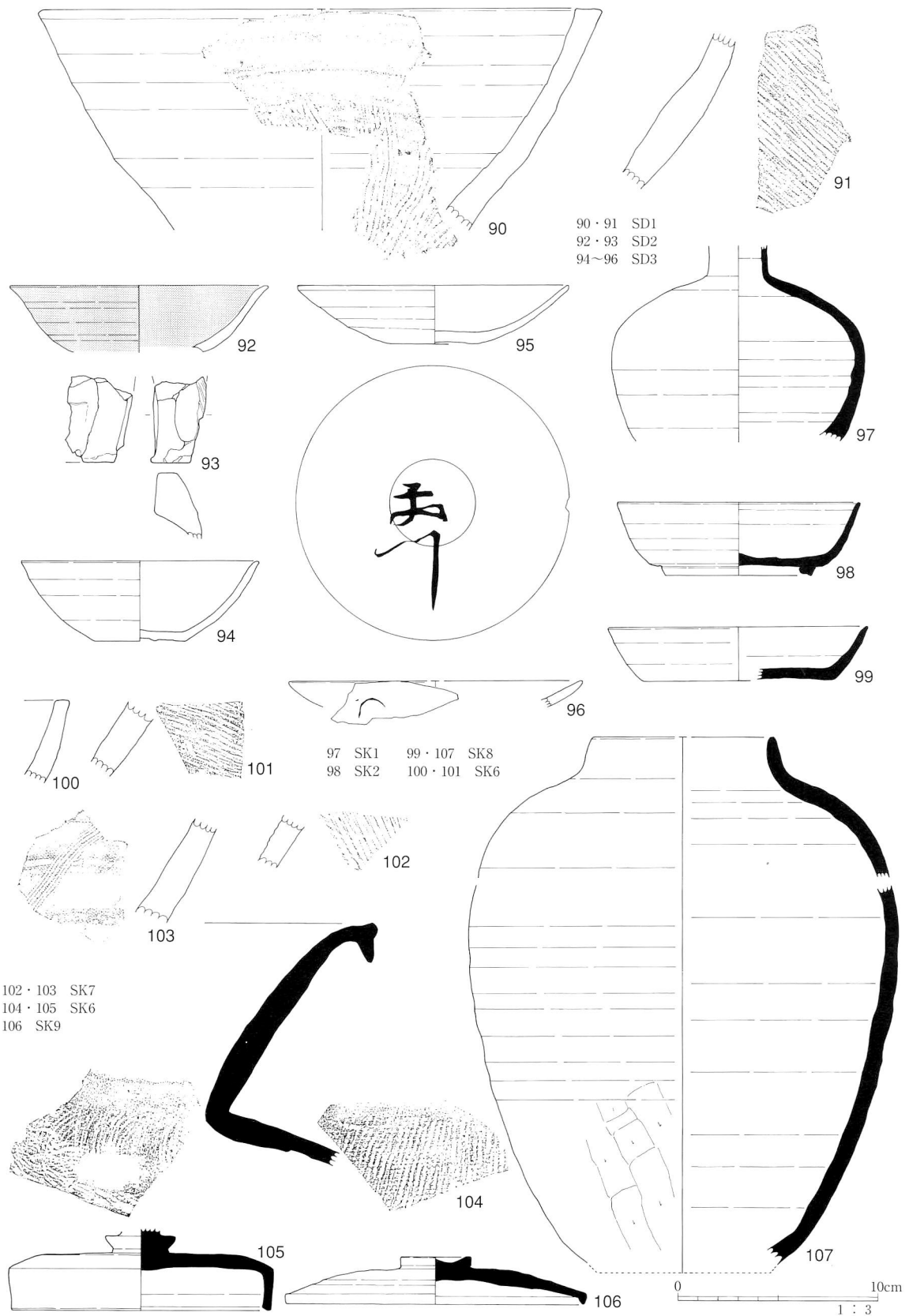
第18図 出土遺物3 (SE1~4)



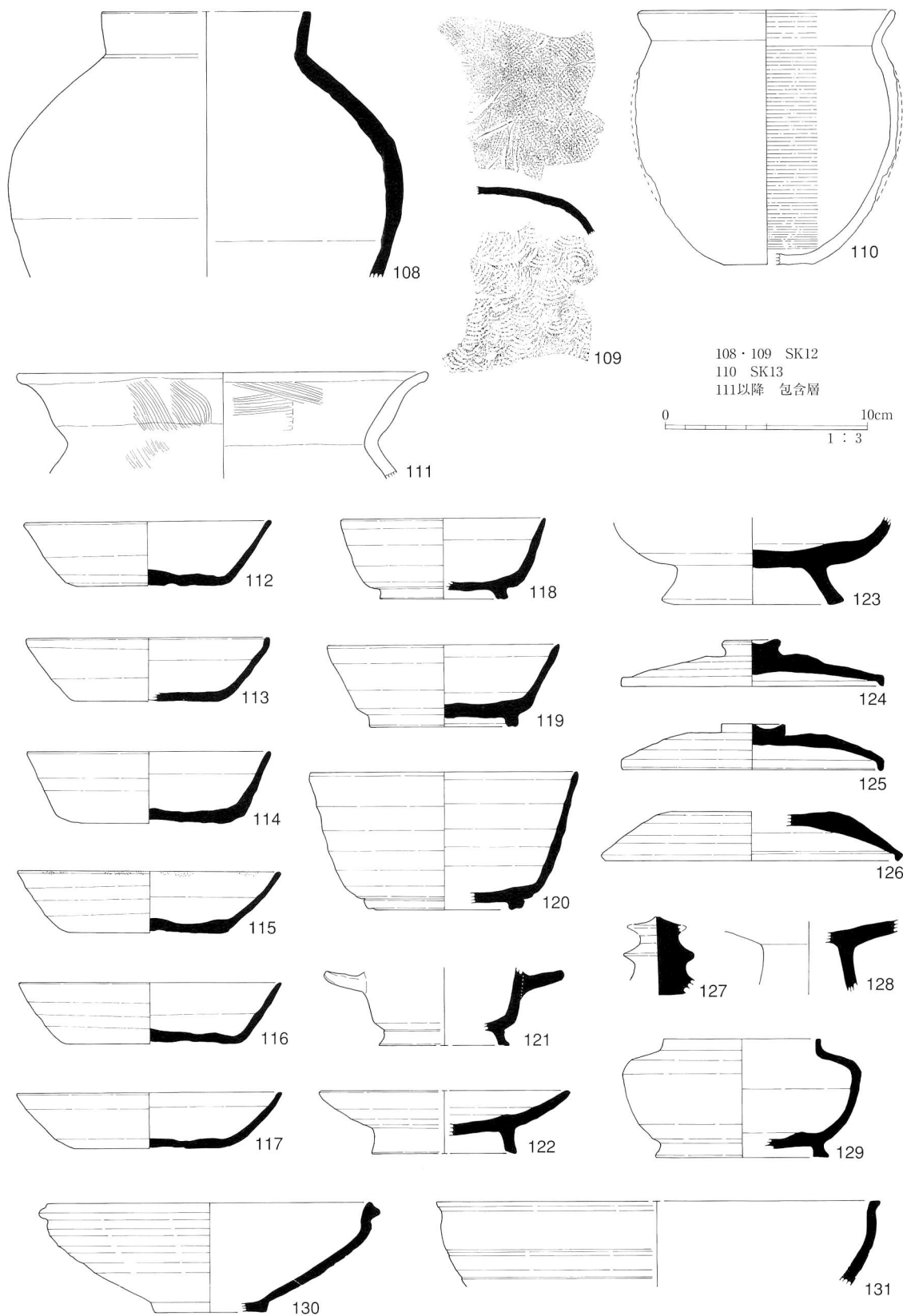
第19図 出土遺物4 (SE5・6・9)



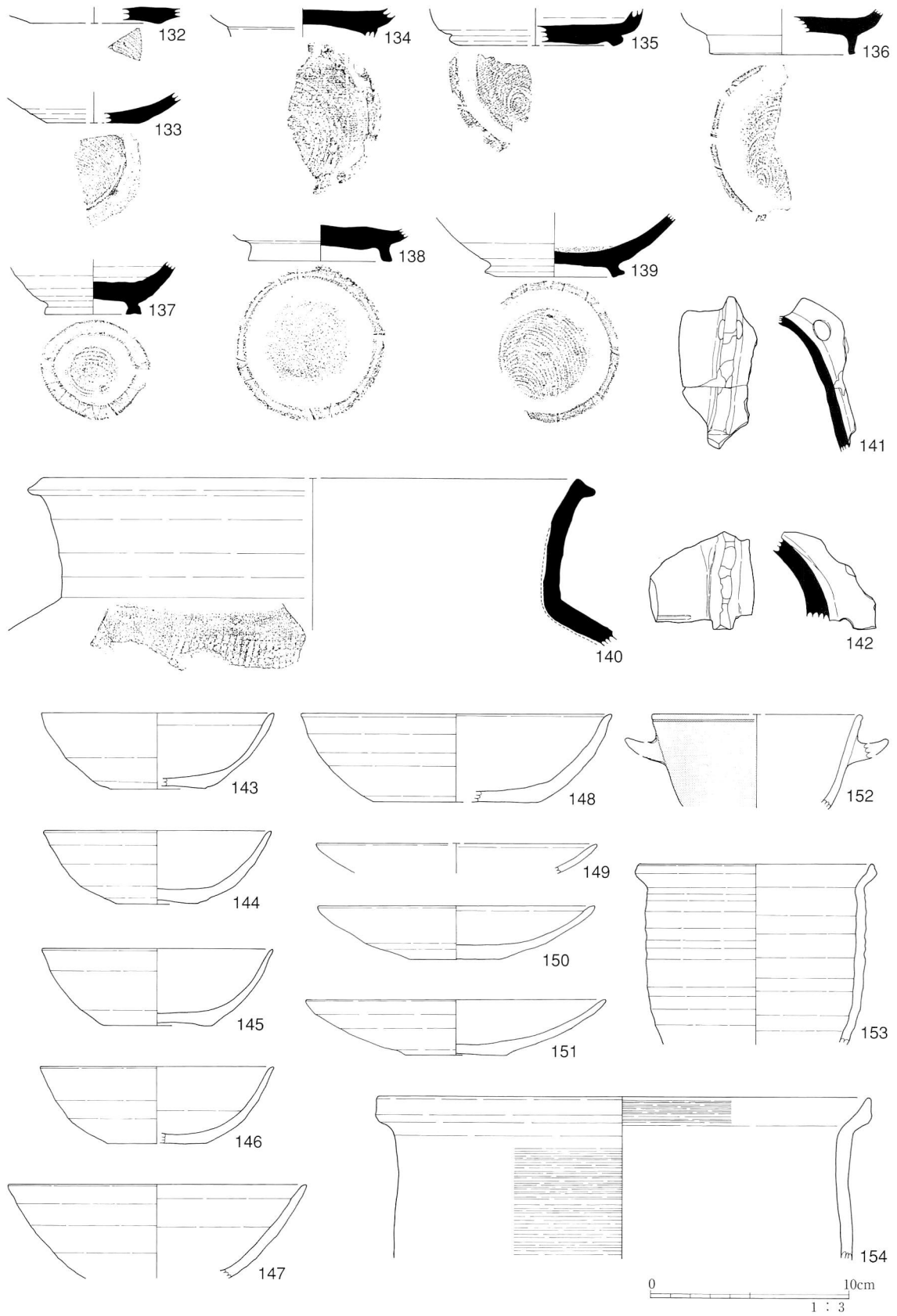
第20図 出土遺物5 (SE9~11)



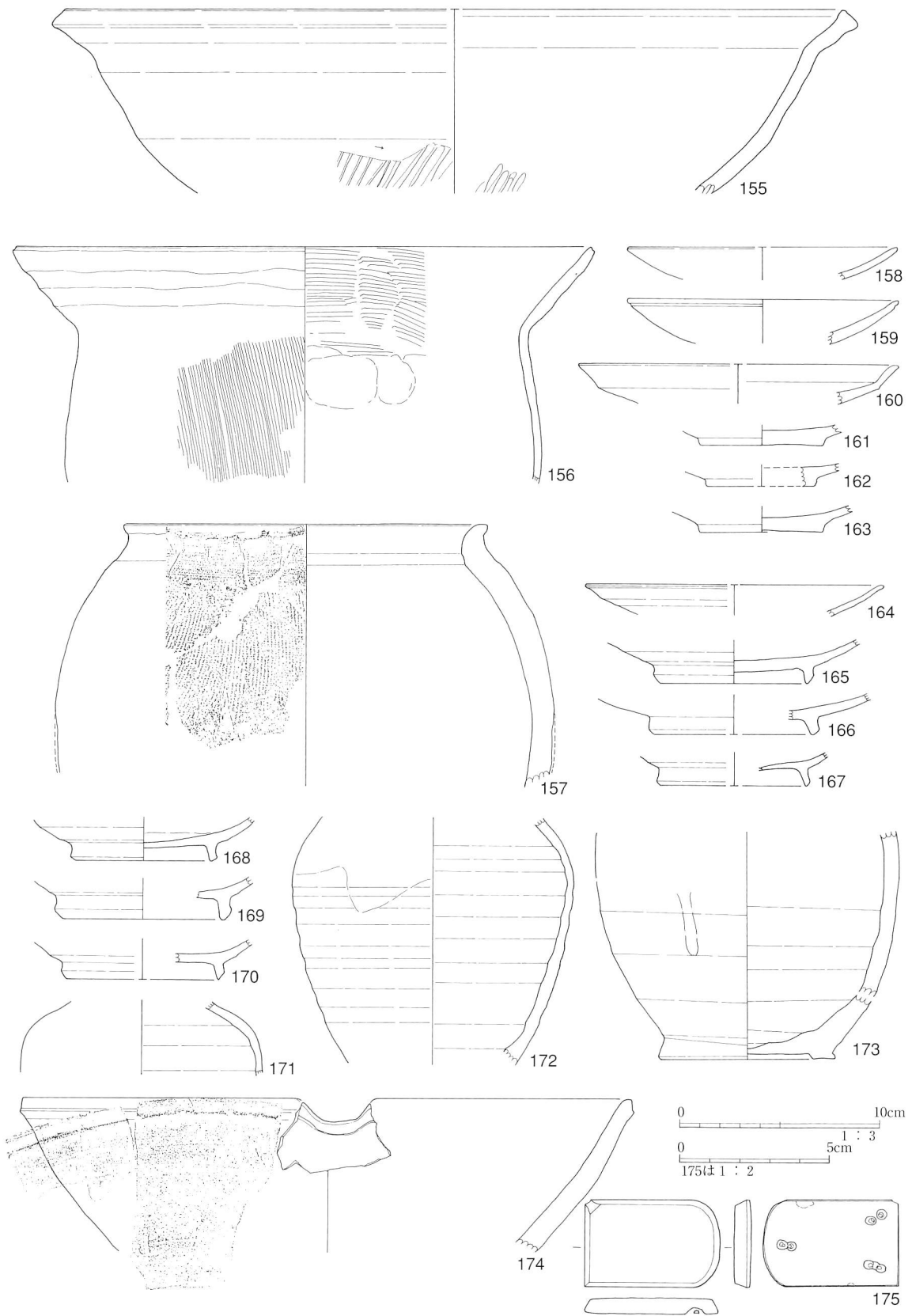
第21図 出土遺物6 (SD1~3 SK1・2・4・6~9)



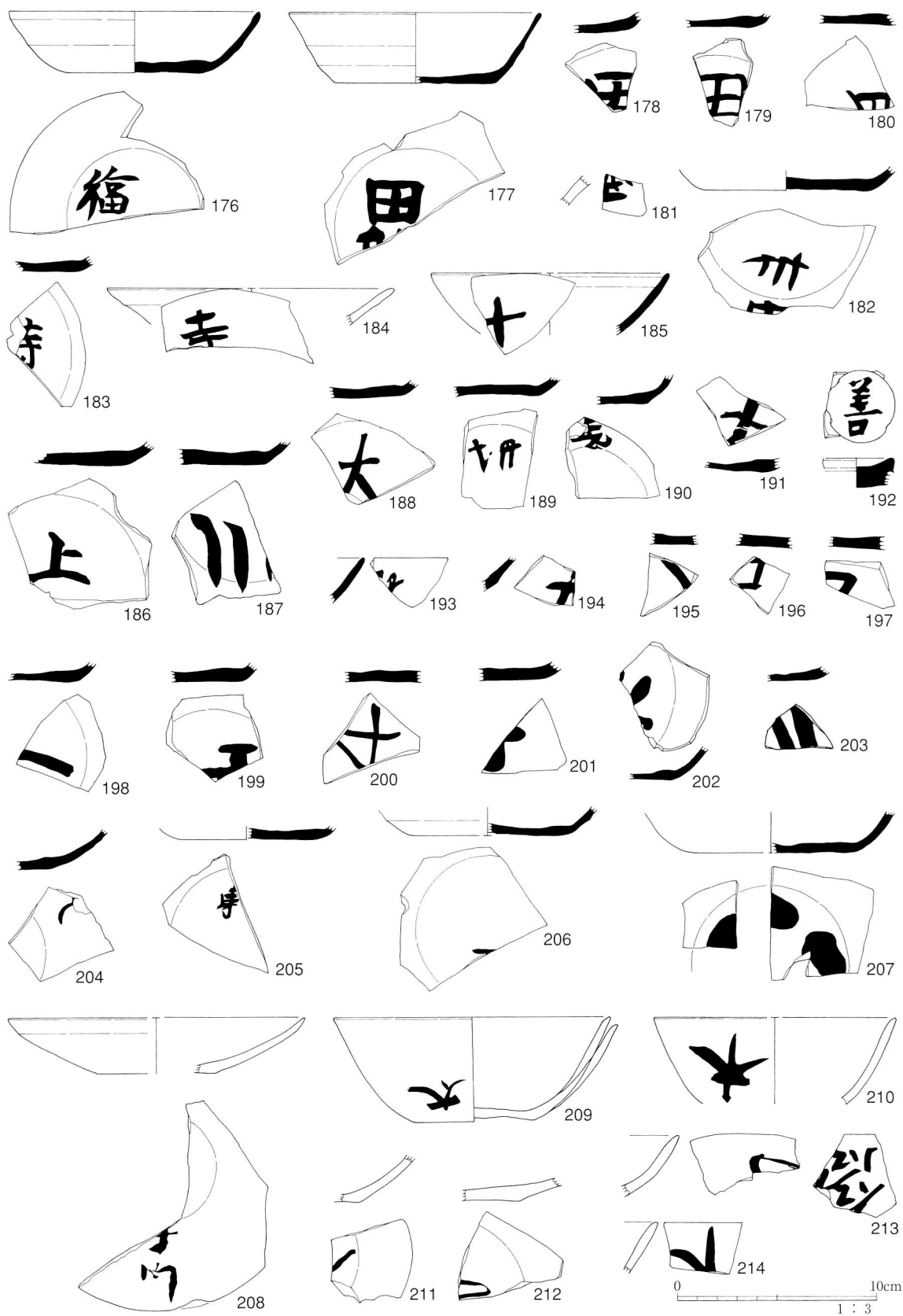
第22図 出土遺物7 (SK12・13・土師器・須恵器)



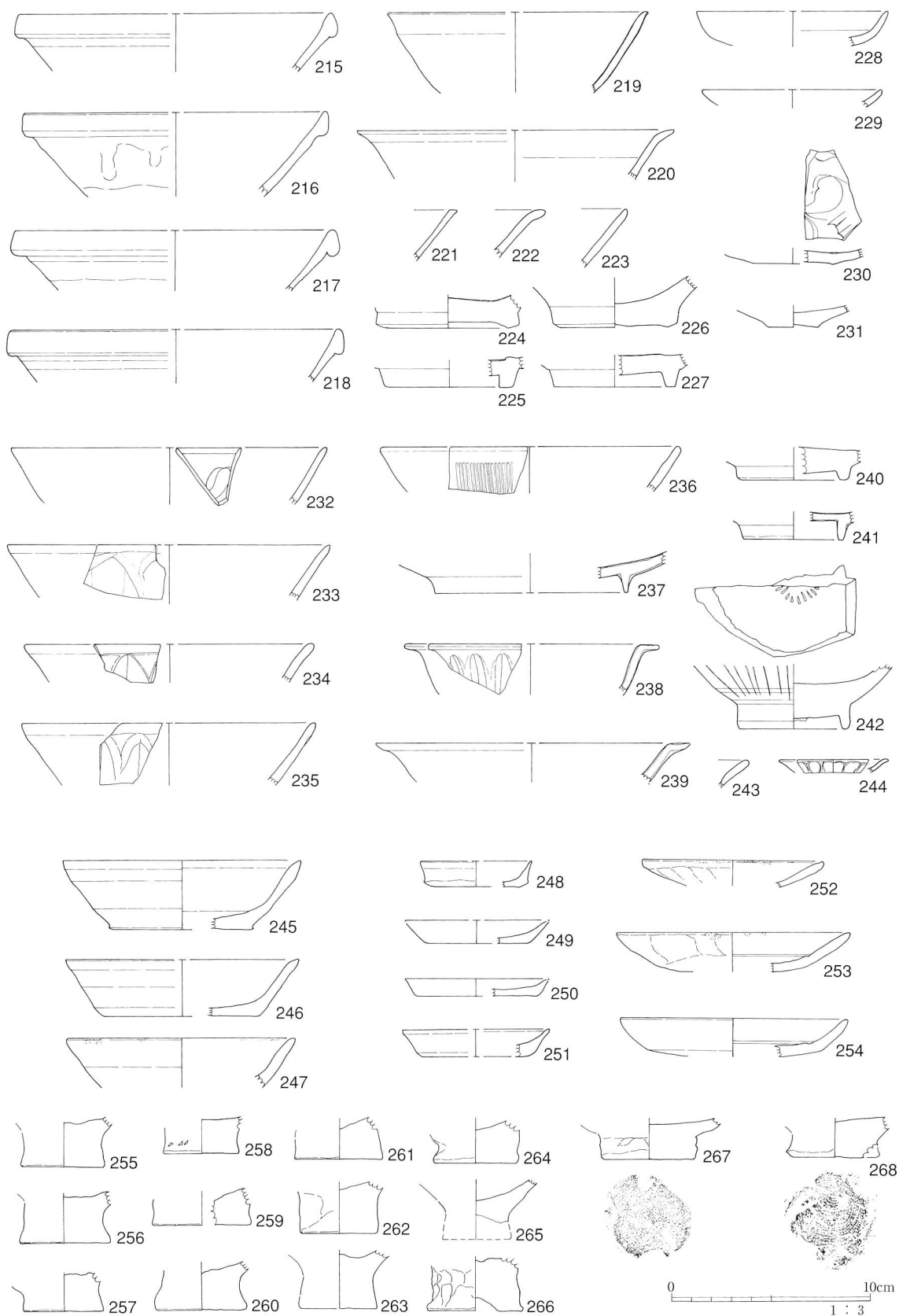
第23図 出土遺物8 (須恵器・土師器)



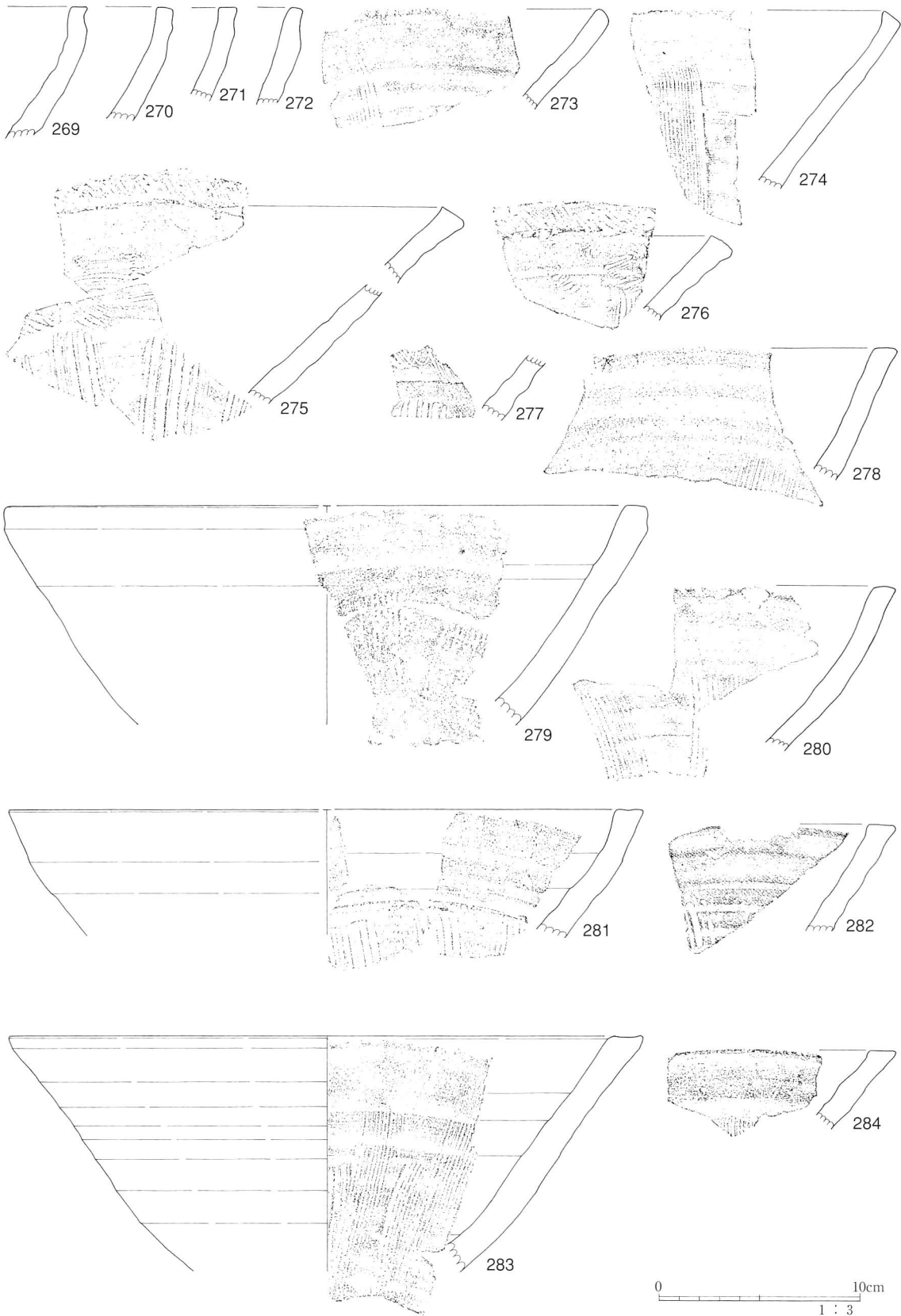
第24図 出土遺物9 (土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・石帯)



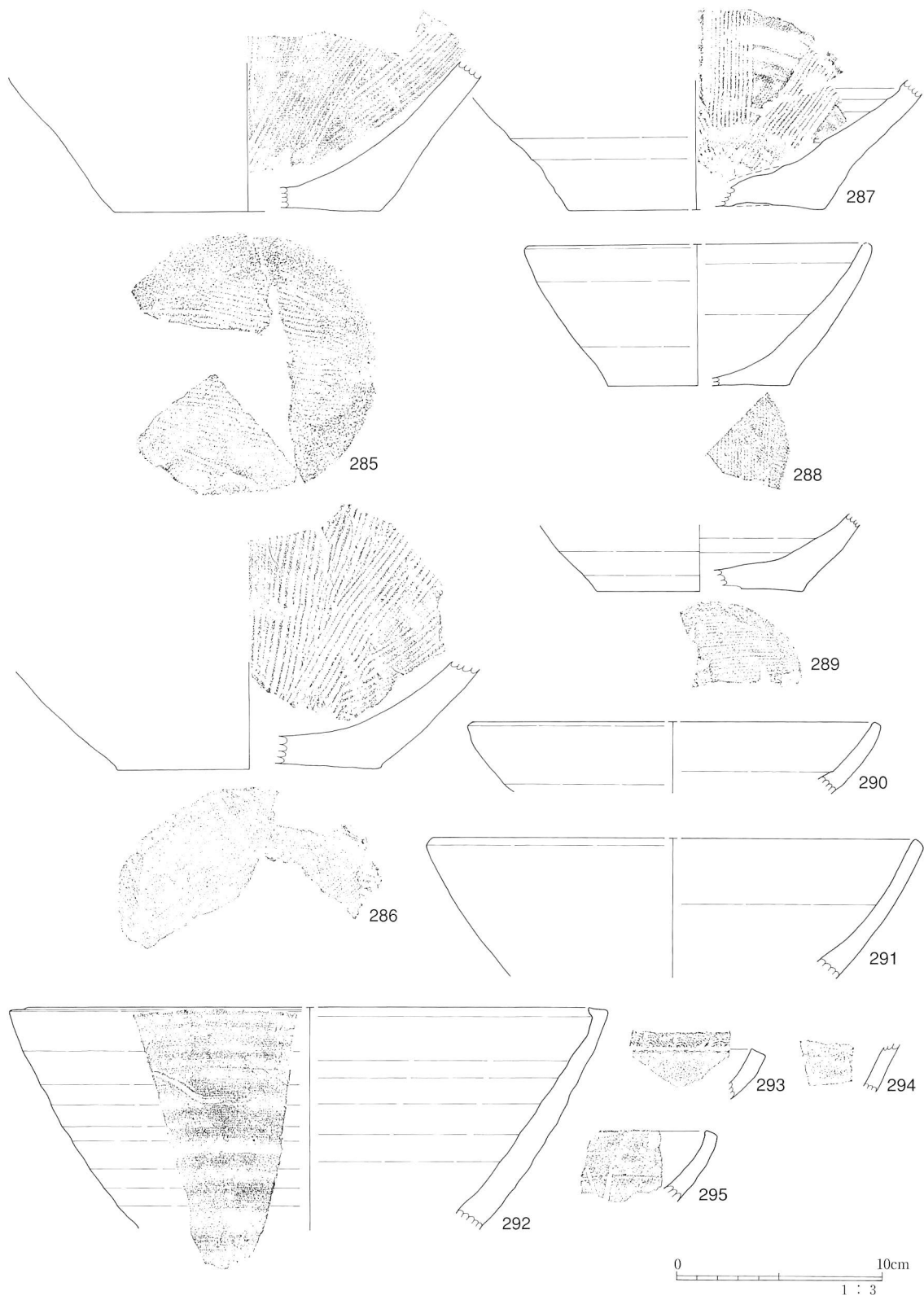
第25図 出土遺物10 (墨書土器)



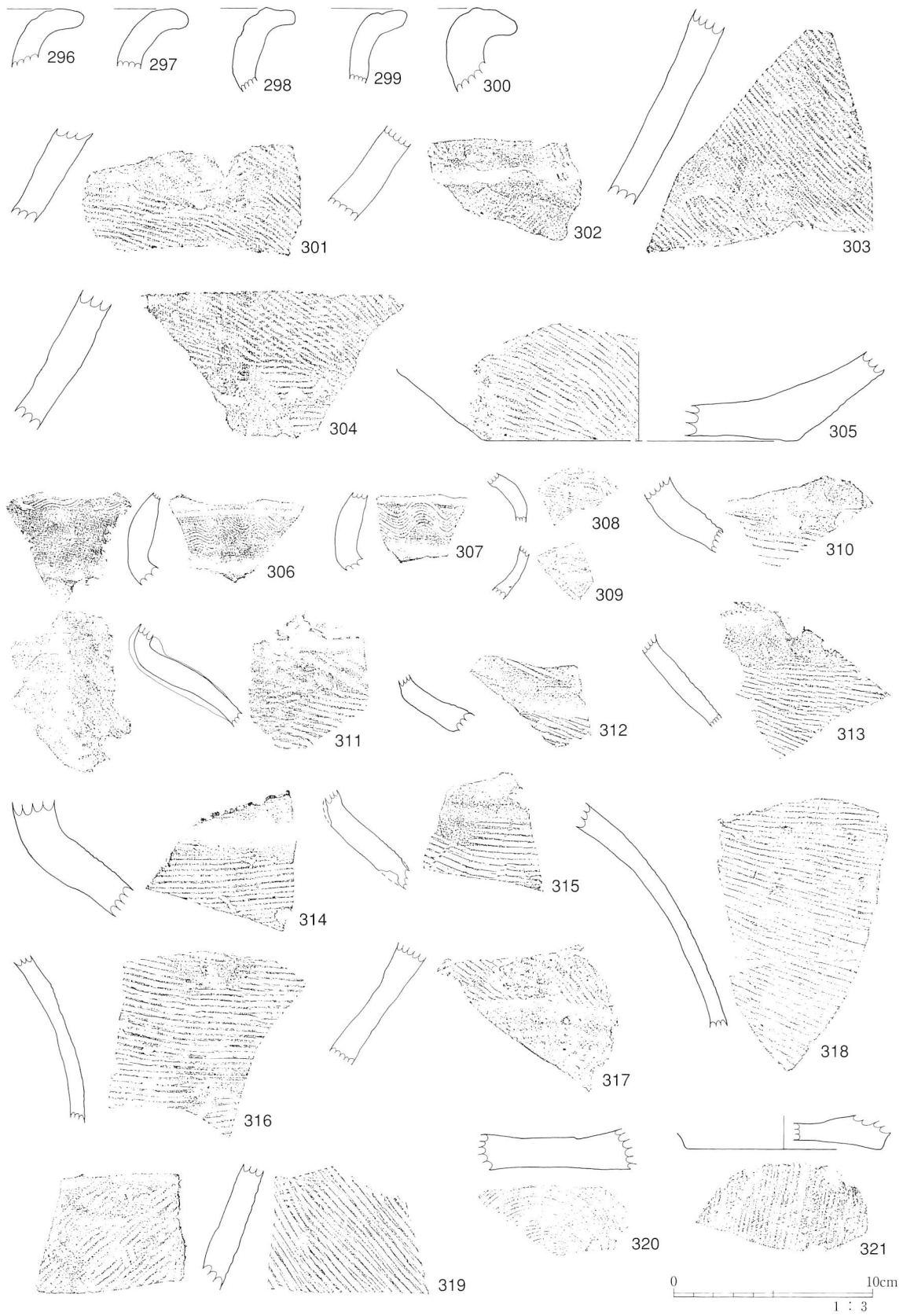
第26図 出土遺物11 (白磁・青磁・土師質土器)



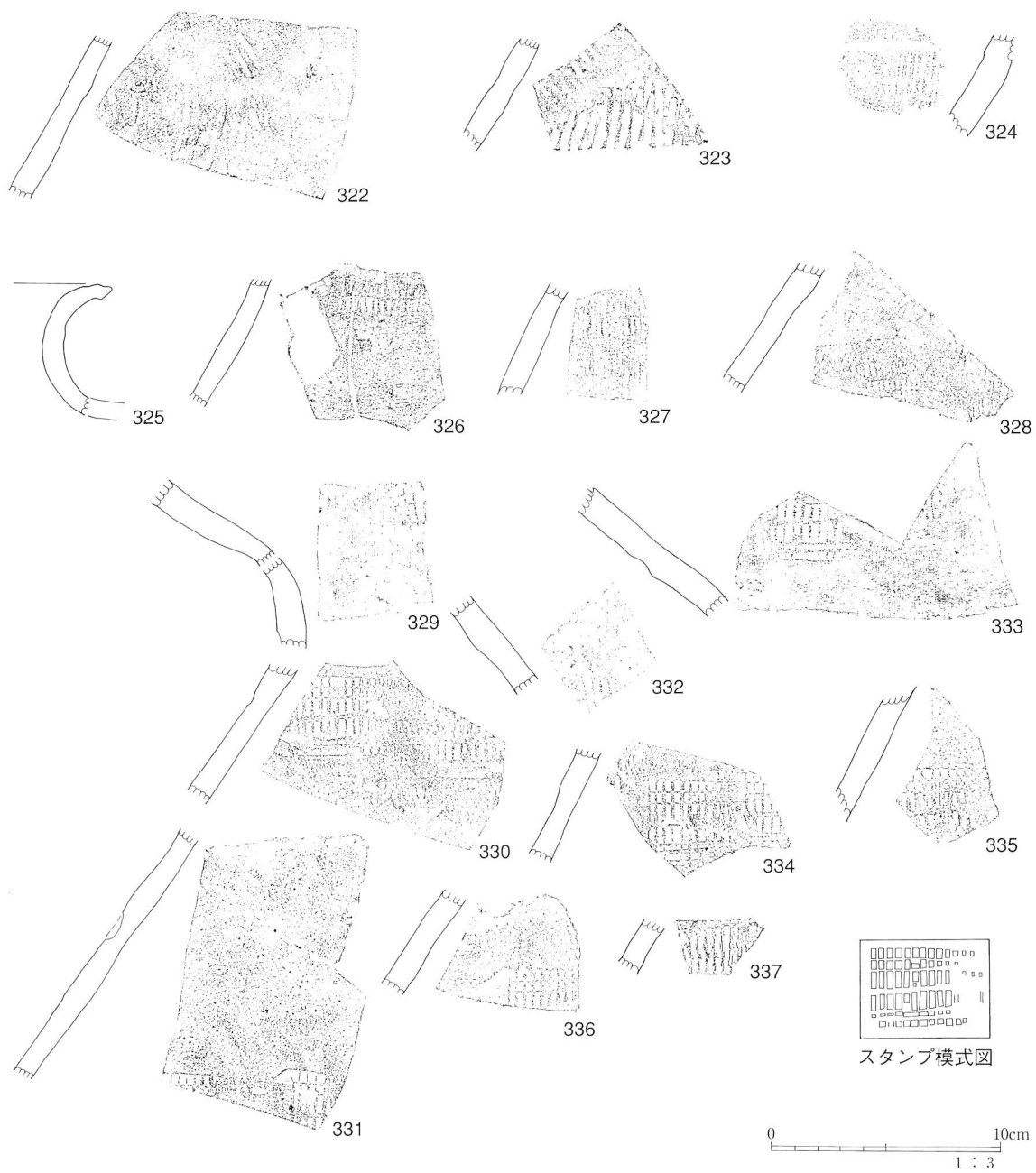
第27図 出土遺物12 (珠洲焼)



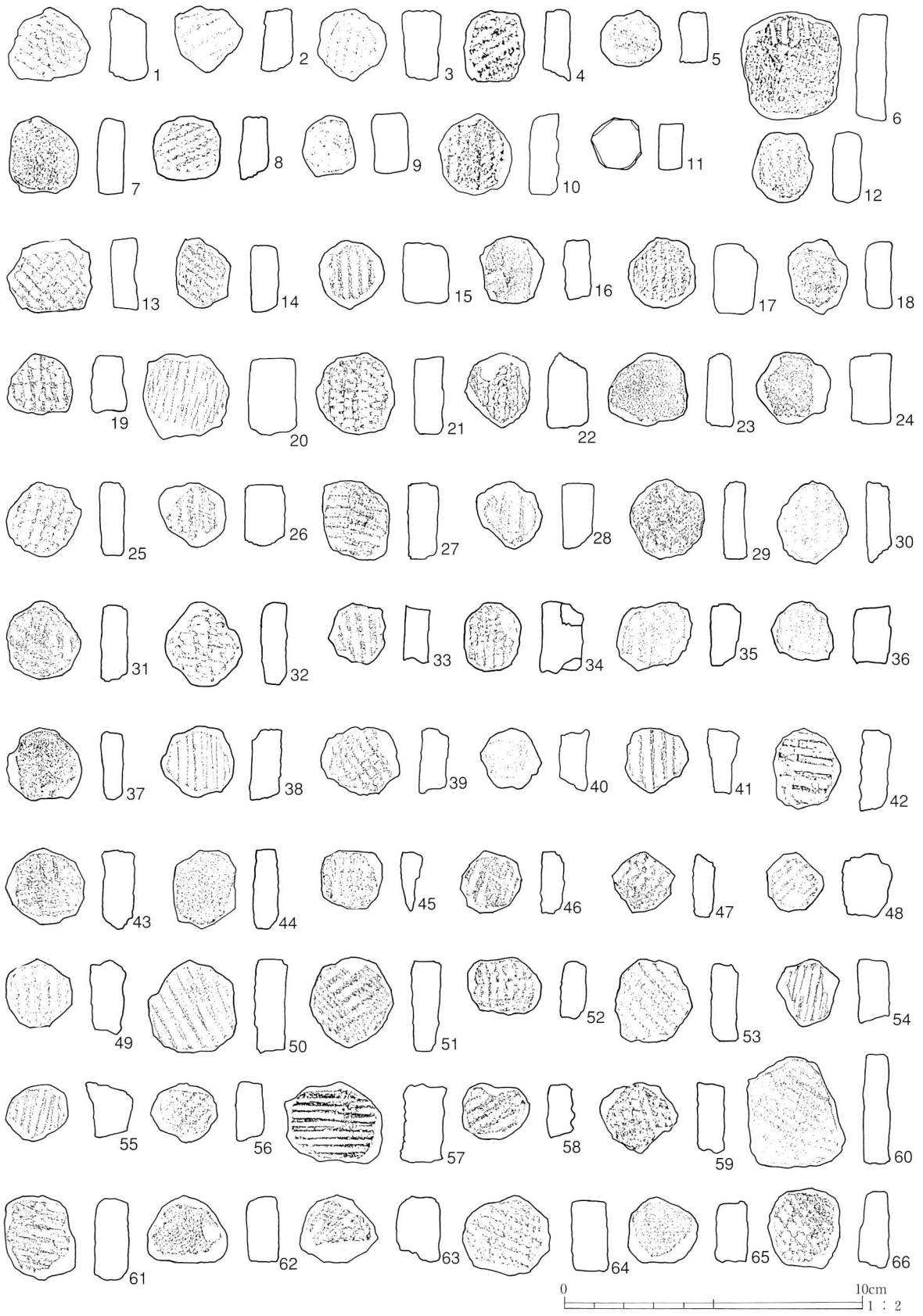
第28図 出土遺物13 (珠洲焼)



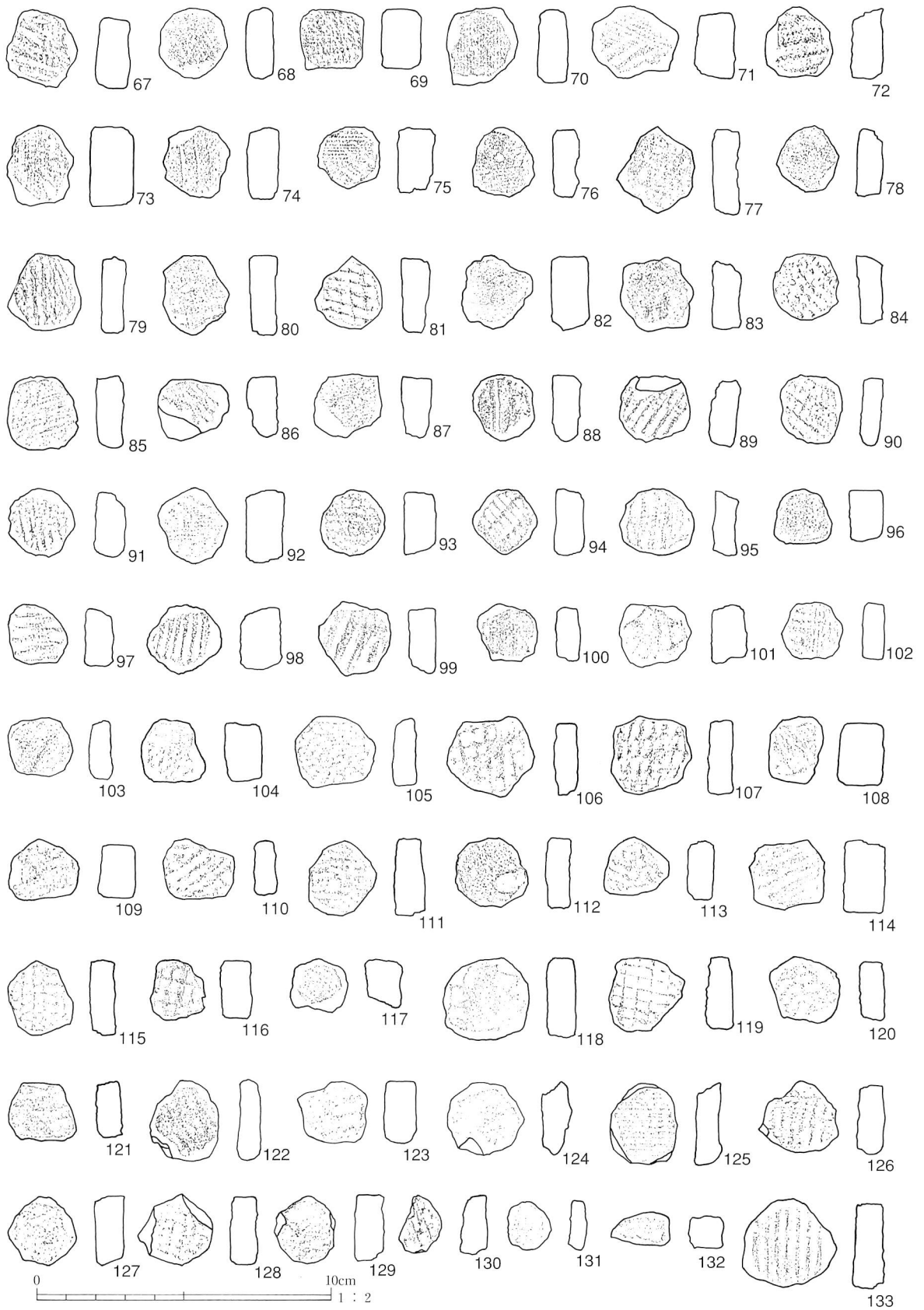
第29图 出土遺物14 (珠洲烧)



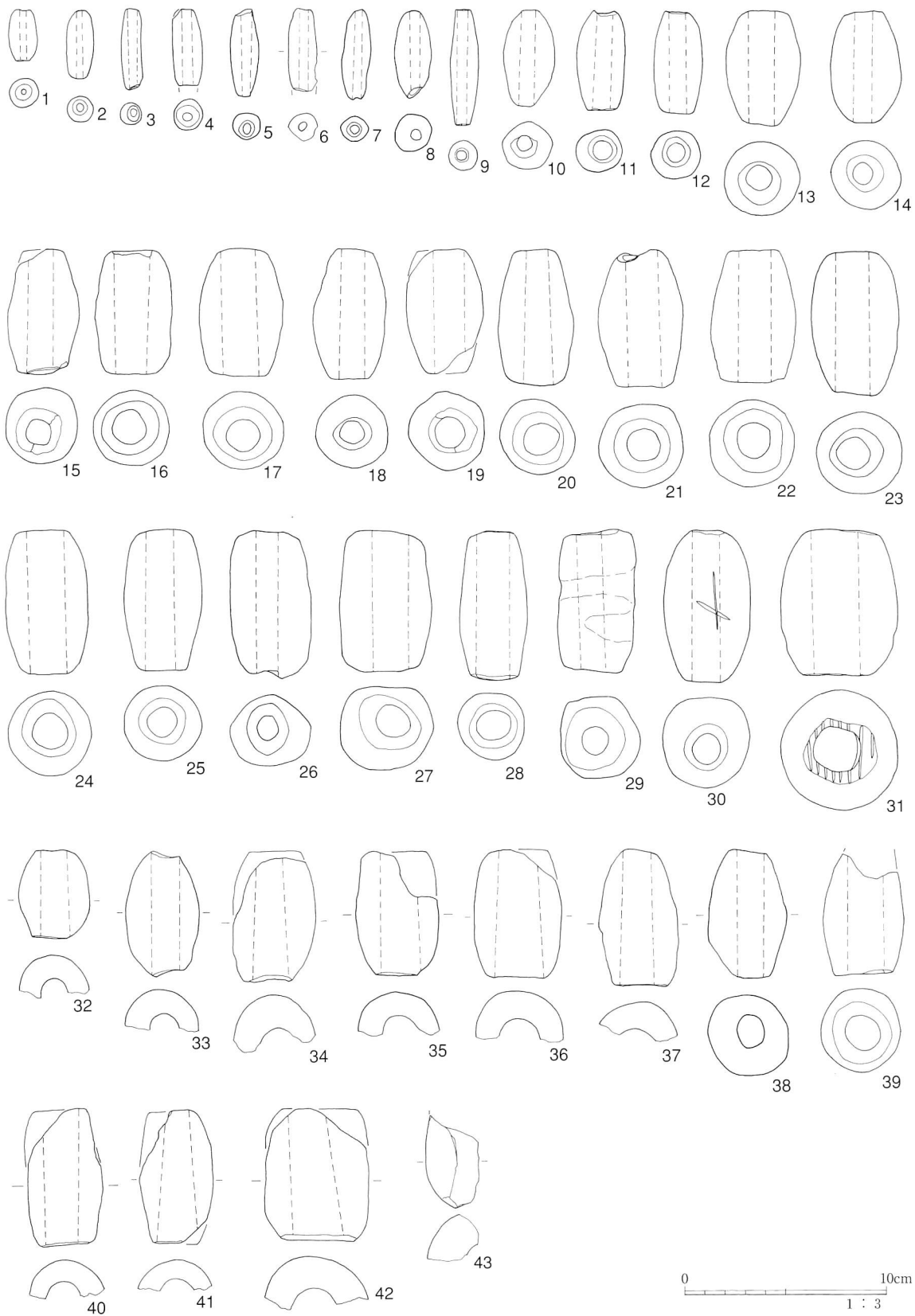
第30図 出土遺物15 (瓷器系陶器・越前焼)



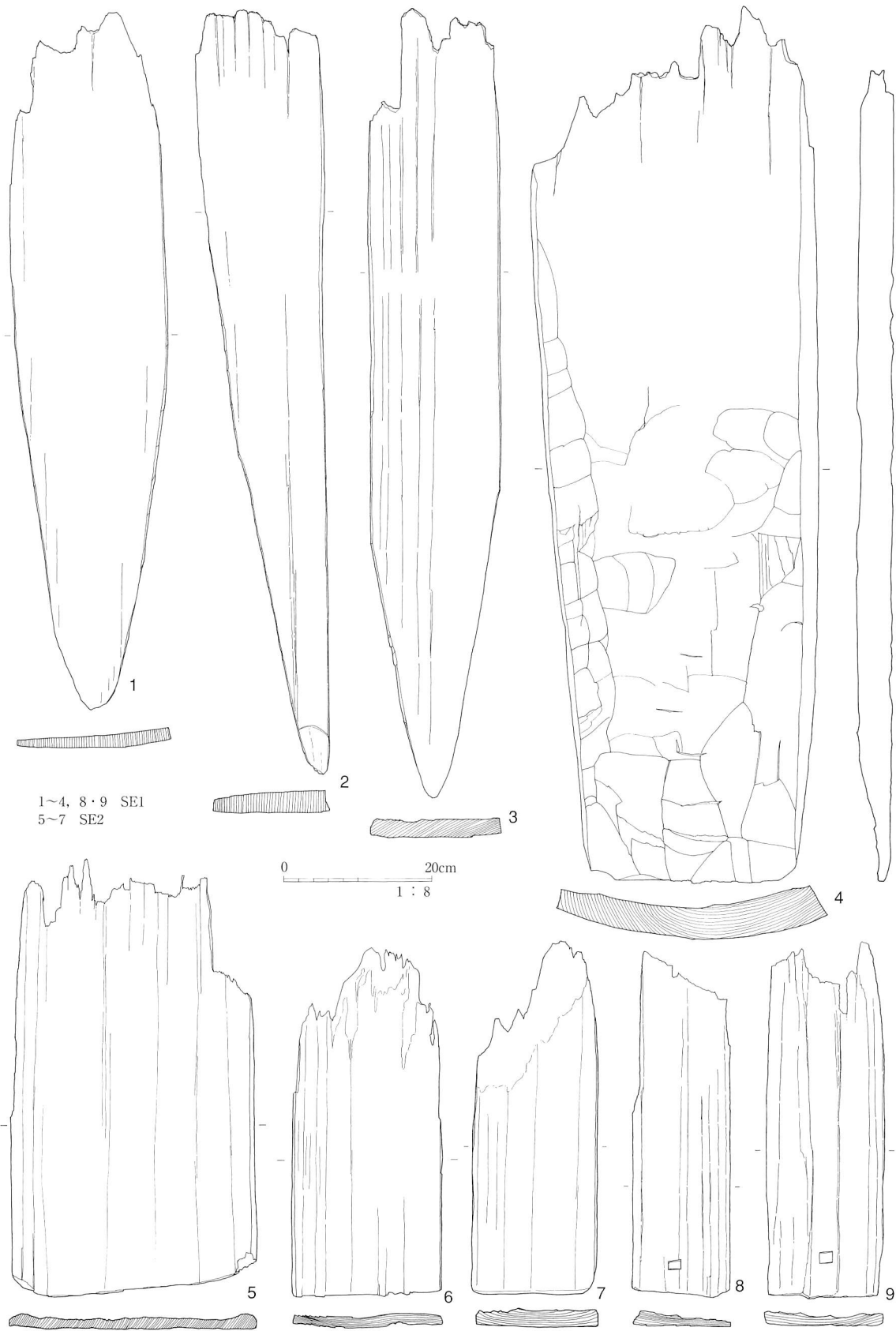
第31図 出土遺物16 (土器片円盤)



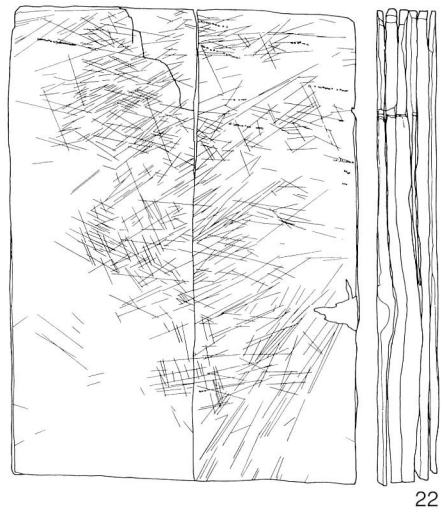
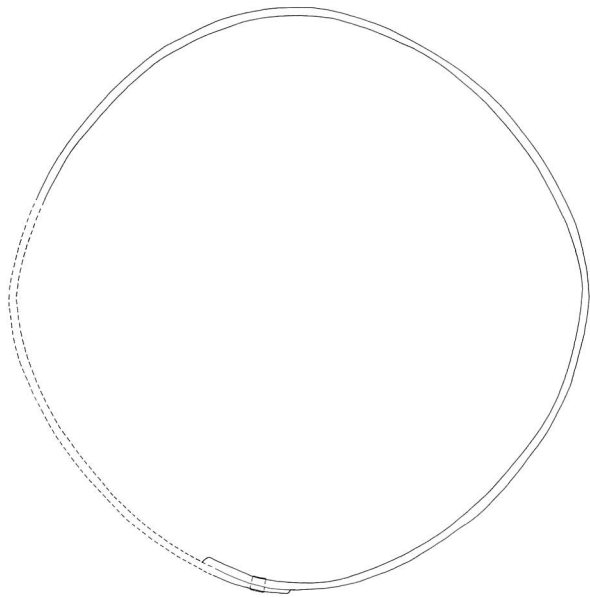
第32図 出土遺物17 (土器片円盤)



第33図 出土遺物18 (土錘)

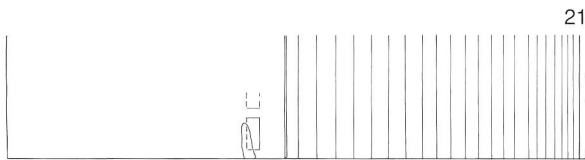


第34図 出土遺物19 (木製品・井戸部材)

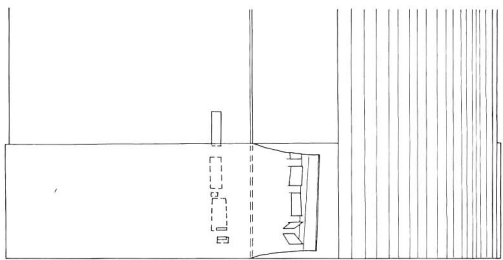
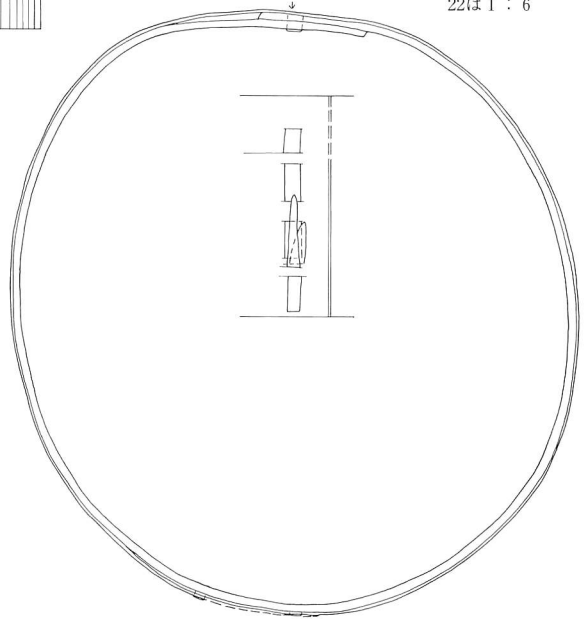
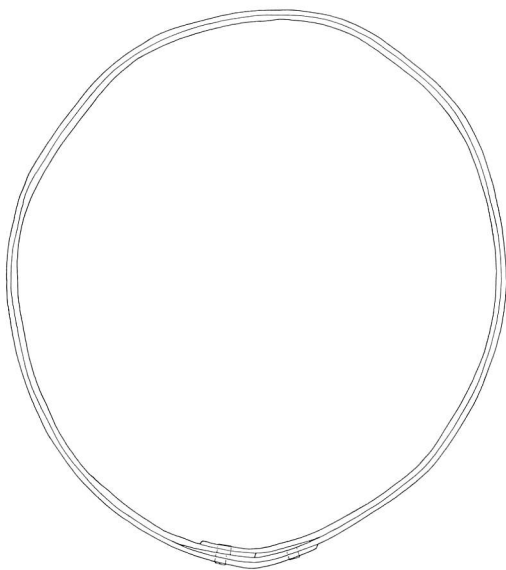
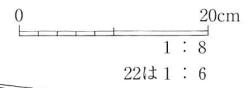


22

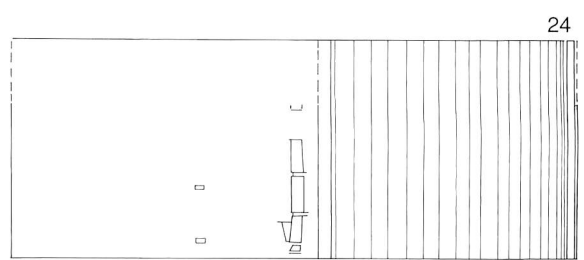
- 21 SE3上部曲物
- 22 SE8縦板
- 23 SE5上部曲物
- 24 SE3下部曲物



21



23

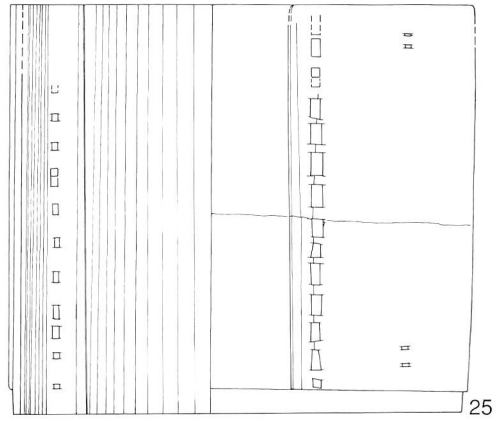
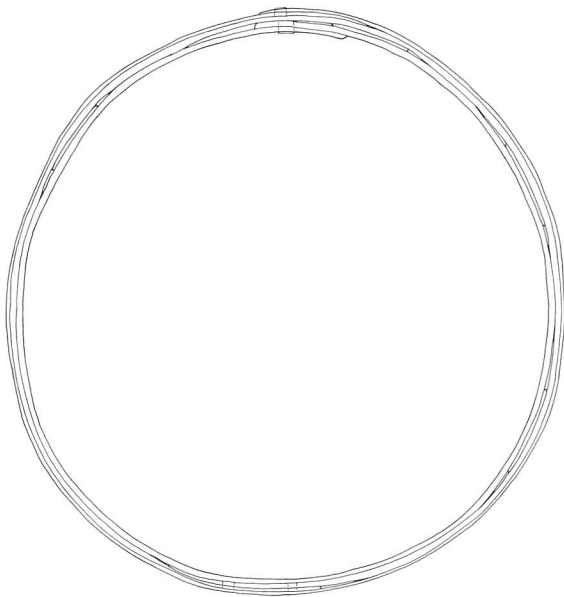
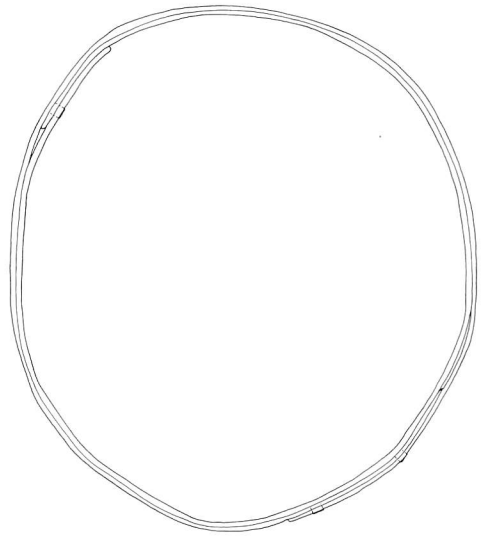


24

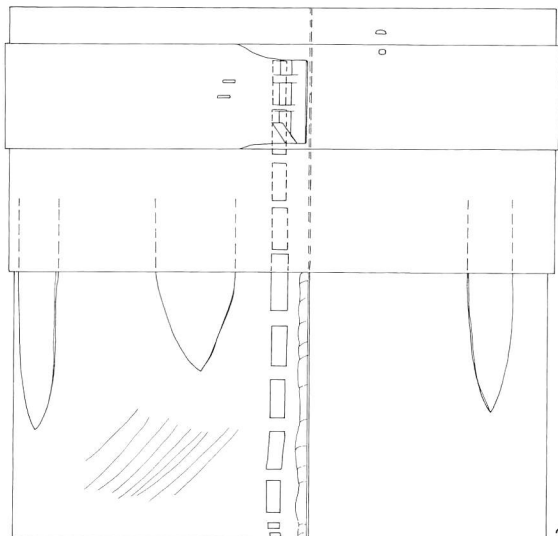
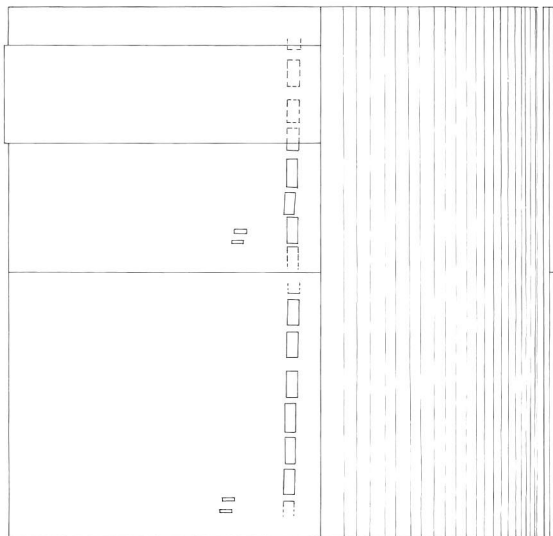
第36図 出土遺物21 (曲物・側板)

- 25 SE6上部曲物
- 26 SE5下部曲物
(右 検出状態、左 下半バンド除去状態)

0 20cm
1 : 8

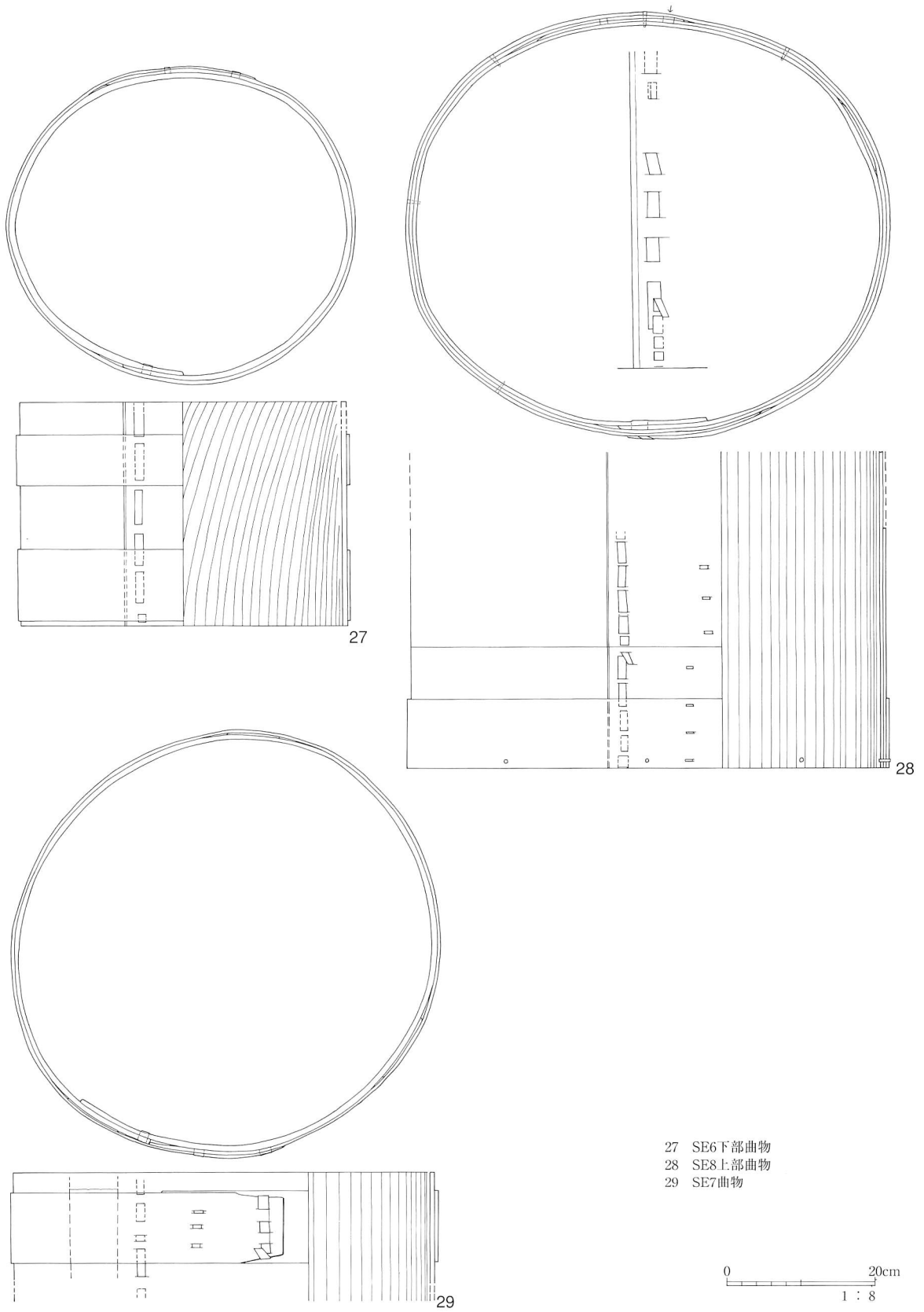


25



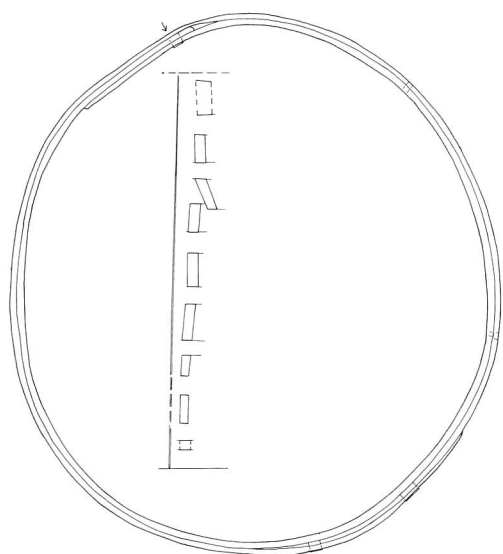
26

第37図 出土遺物22 (曲物)



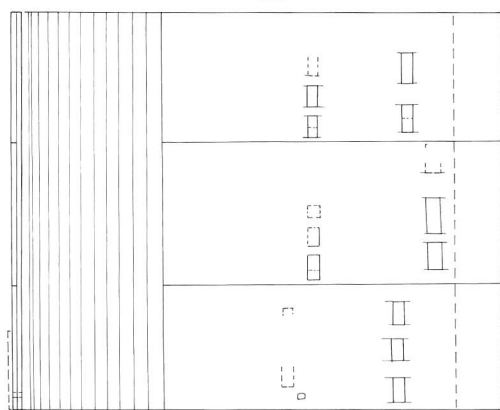
- 27 SE6下部曲物
- 28 SE8上部曲物
- 29 SE7曲物

第38図 出土遺物23 (曲物)

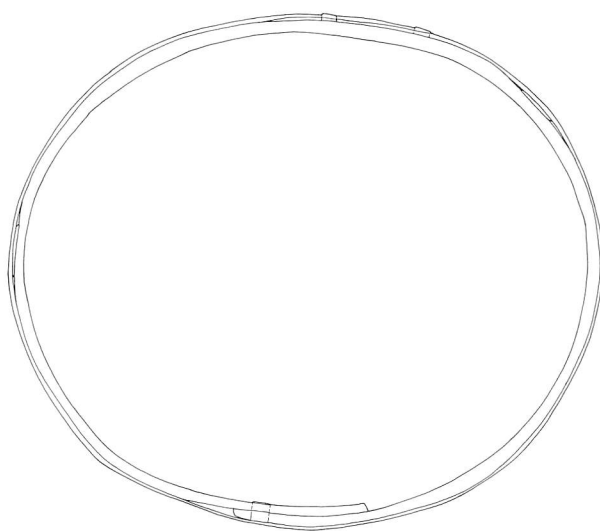


- 30 SE10曲物
- 31 SE9上部曲物
- 32 SE8下部曲物

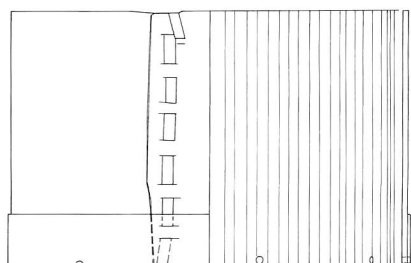
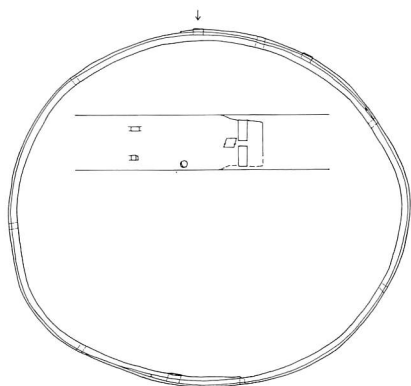
0 20cm
1 : 8



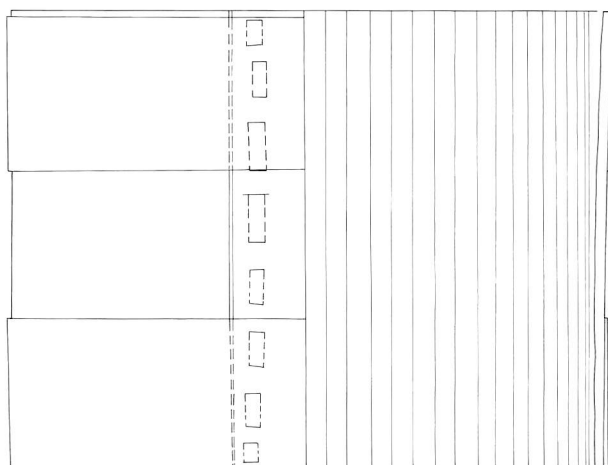
30



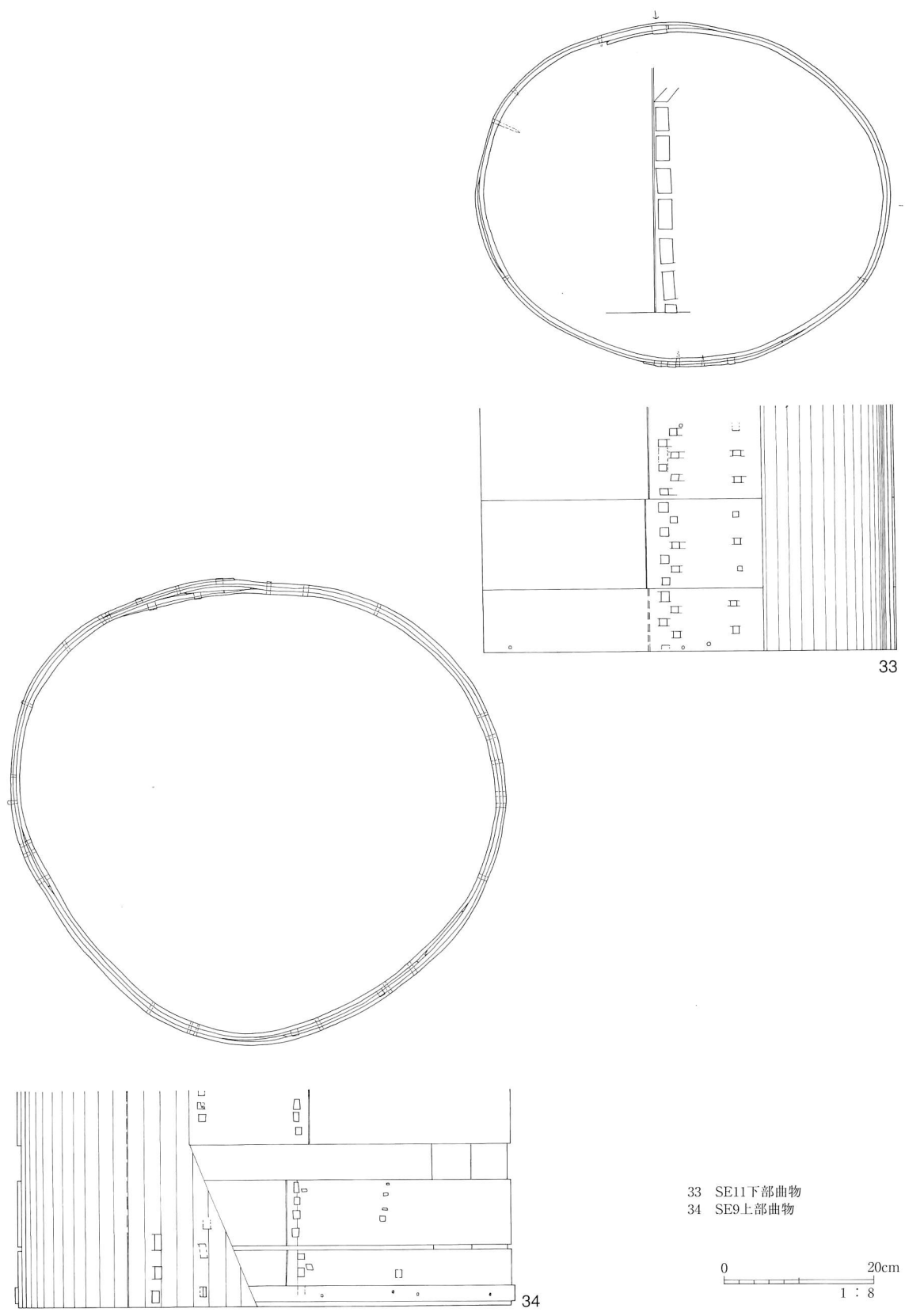
32



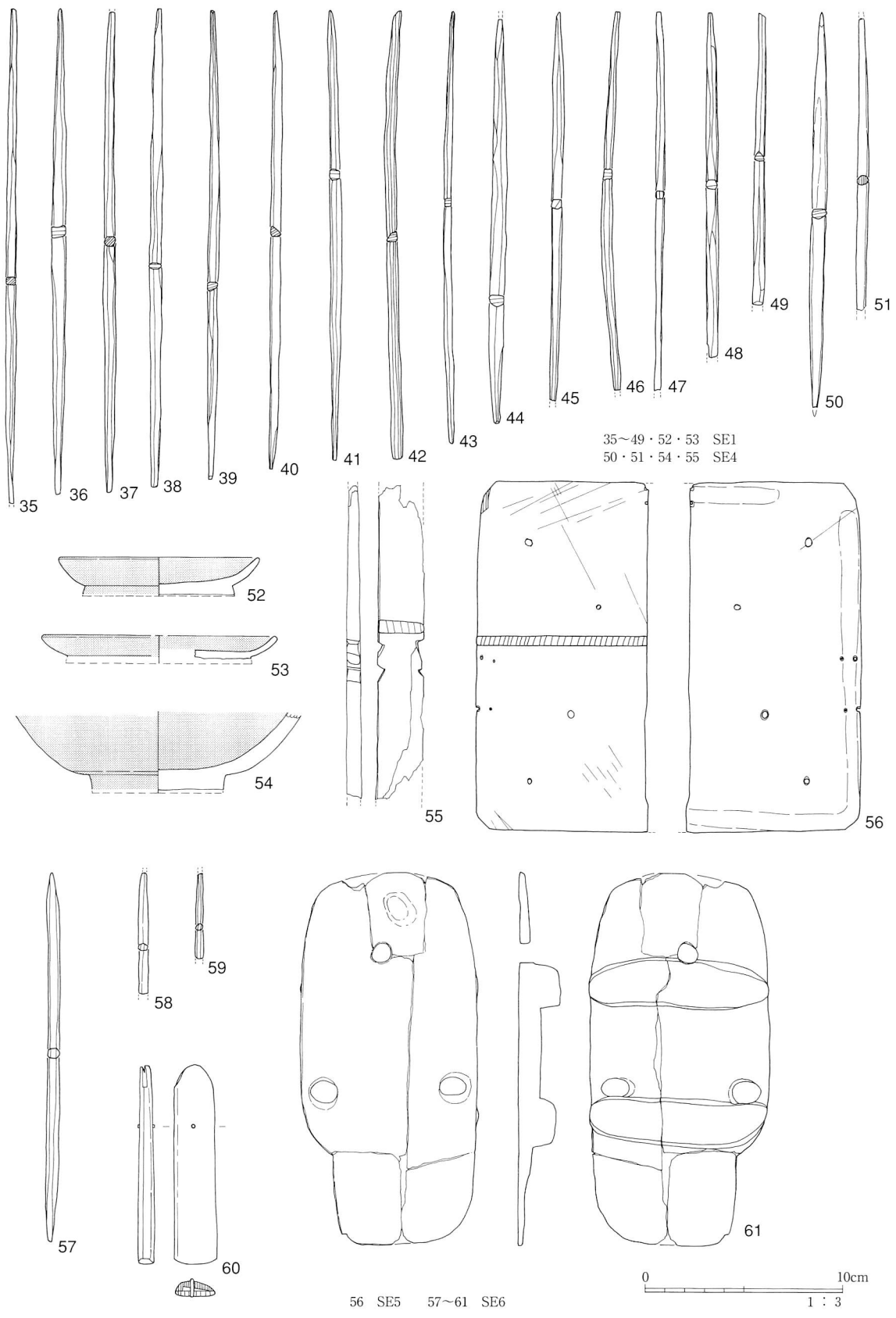
31



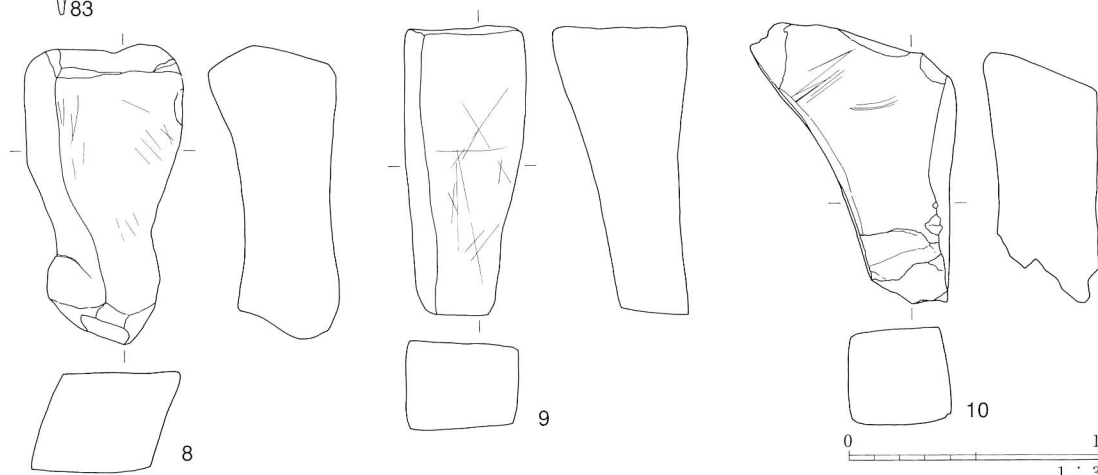
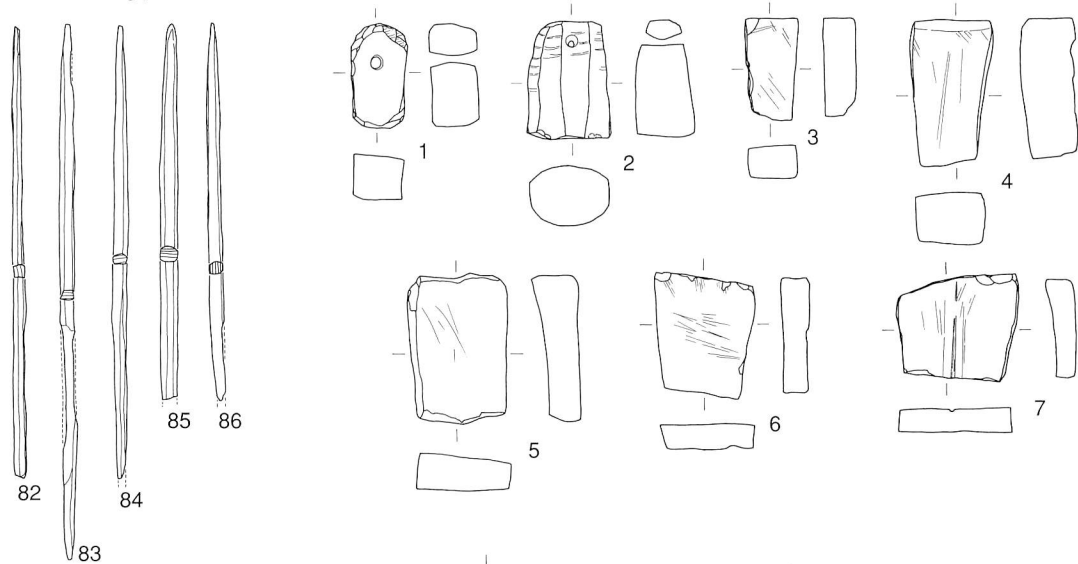
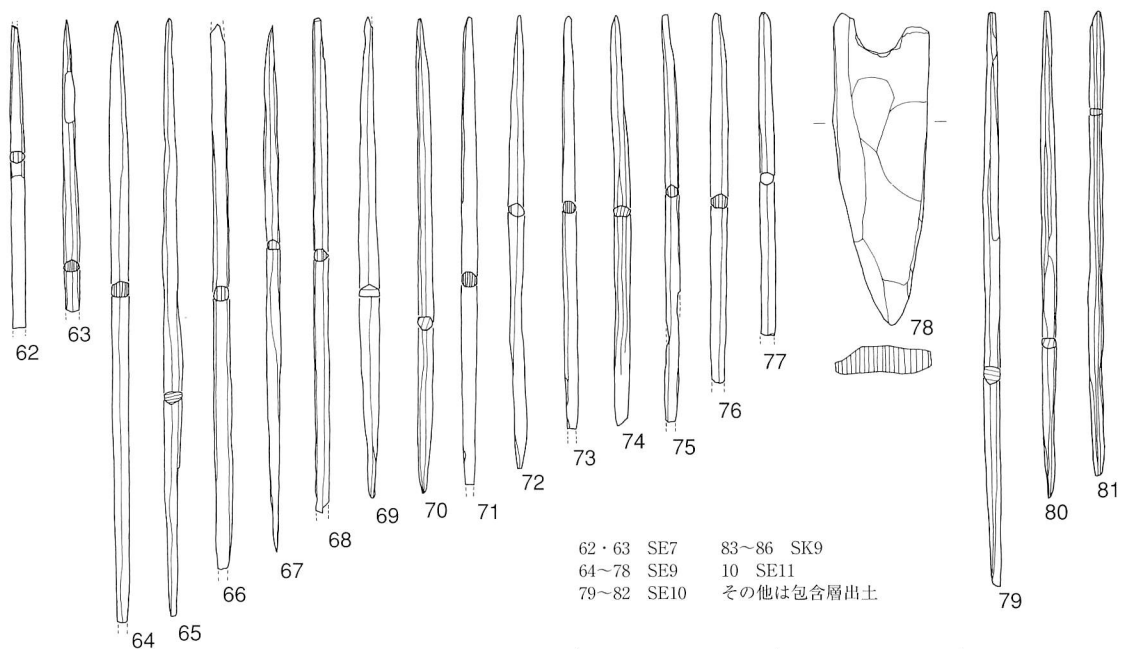
第39図 出土遺物24 (曲物)



第40図 出土遺物25（曲物）



第41図 出土遺物26 (木製品)



第42図 出土遺物27 (木製品・砥石)

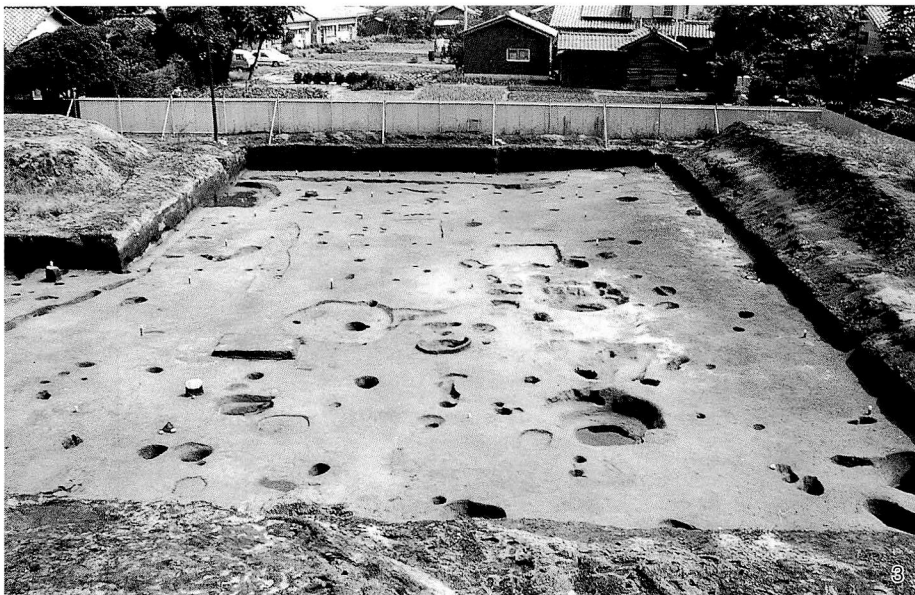
全景 1
(南から)



全景 2
(西から)



全景 3
(西から)





S B 1



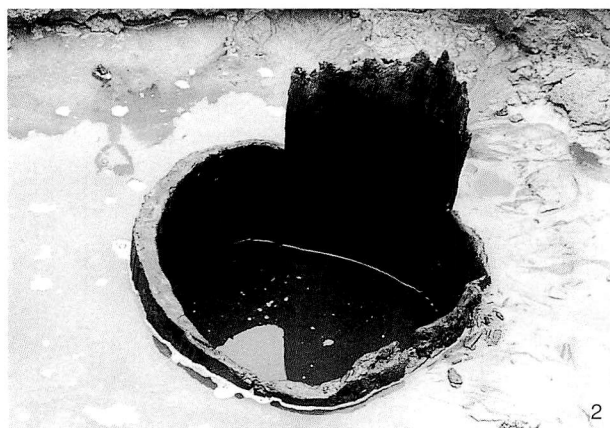
S B 3



S X 6



S E 1



S E 1



S E 2



S E 2



S E 3



S E 3



S E 4



S E 4



S E 5



S E 5



S E 6



S E 6



S E 7



S E 7



S E 8

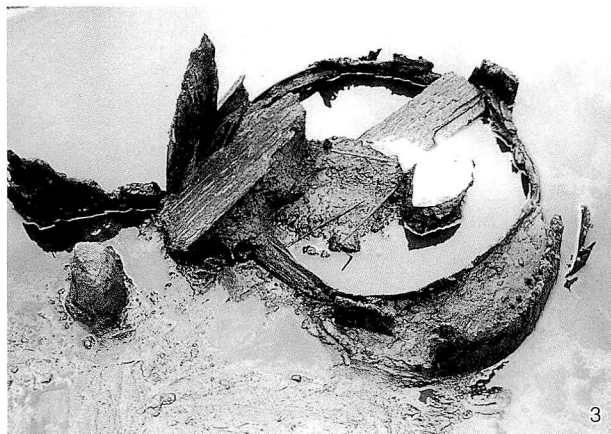


S E 8

S E 10 · S E 9



S E 11



S E 9

S E 11



写真図版6



1. S K 1
2. S K 2



3. S K 4・7
4. S K 9

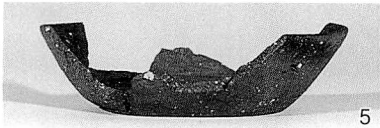


5. S K 10
6. S K 11

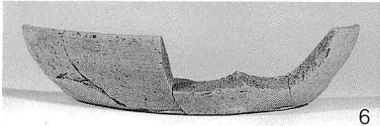


7. S K 13
8. S K 101
9. S D 2

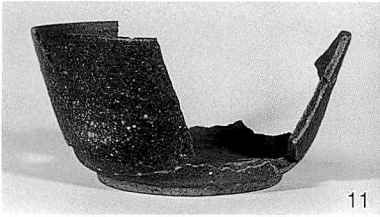




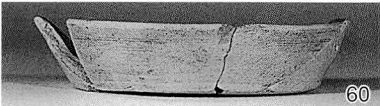
5



6



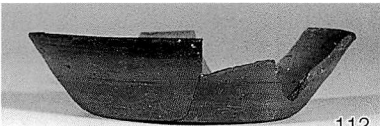
11



60



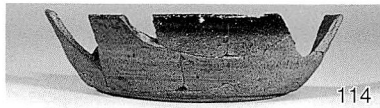
95



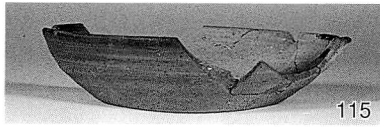
112



113



114



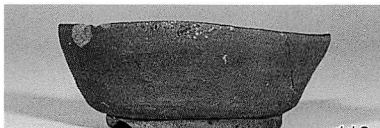
115



117



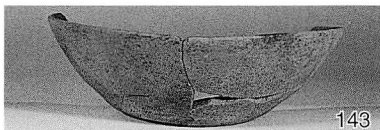
118



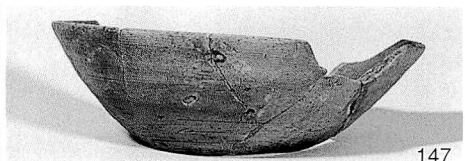
119



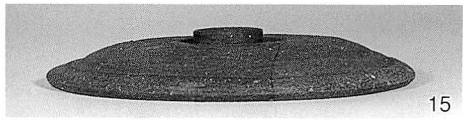
129



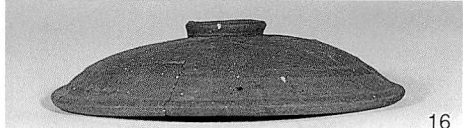
143



147



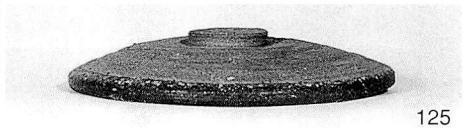
15



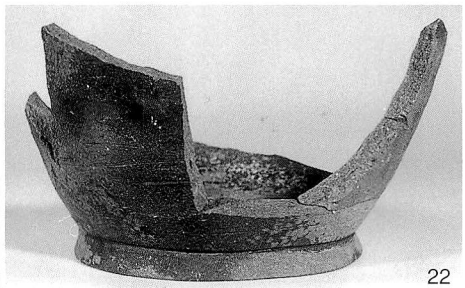
16



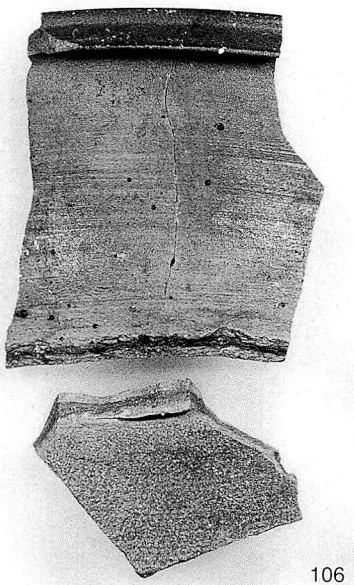
124



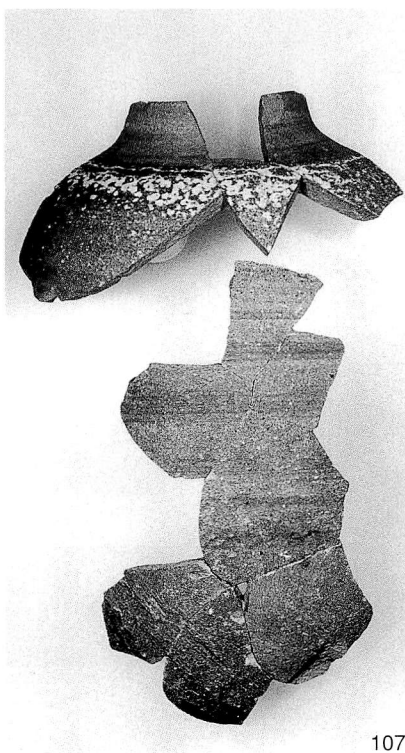
125



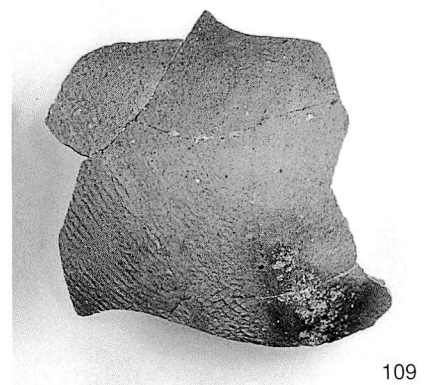
22



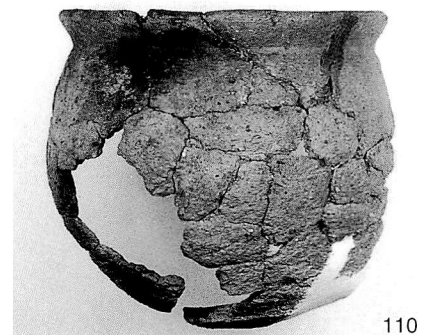
106



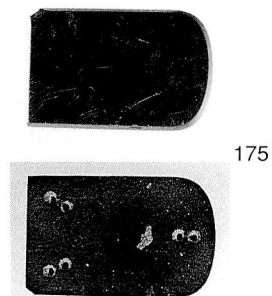
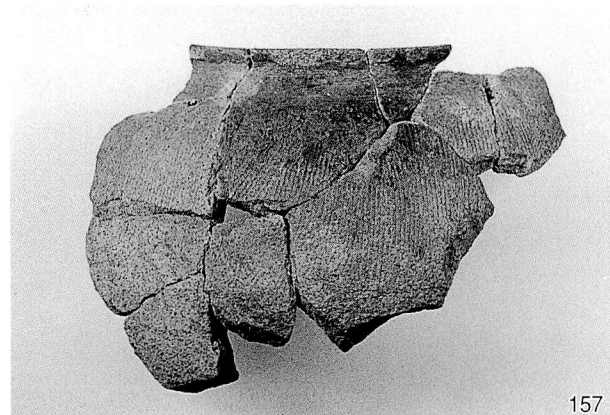
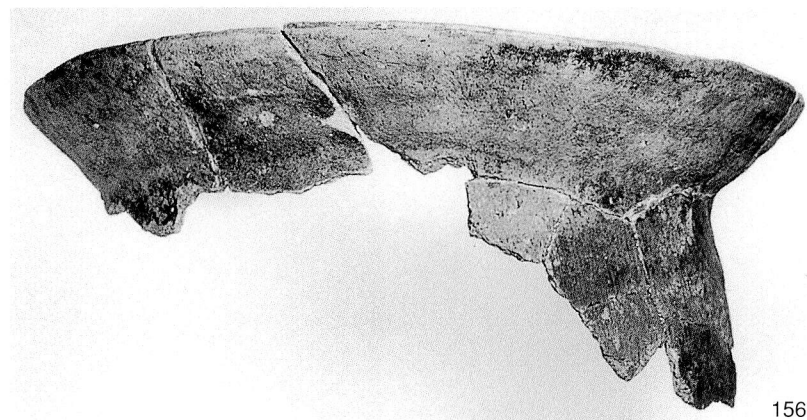
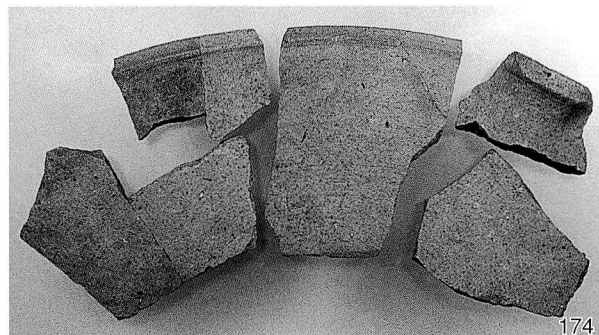
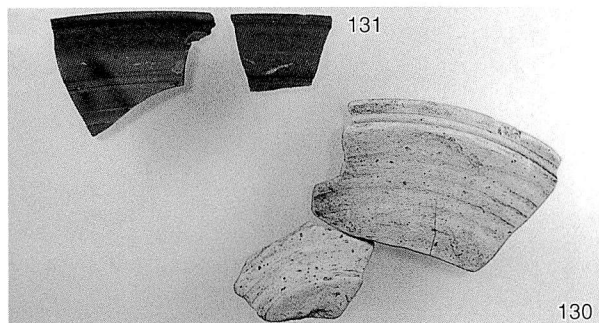
107



109



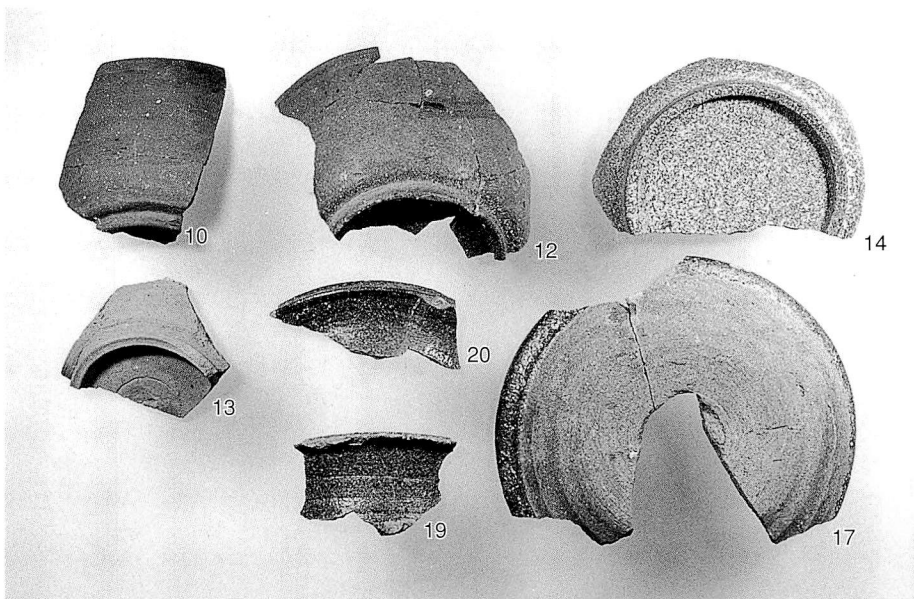
110



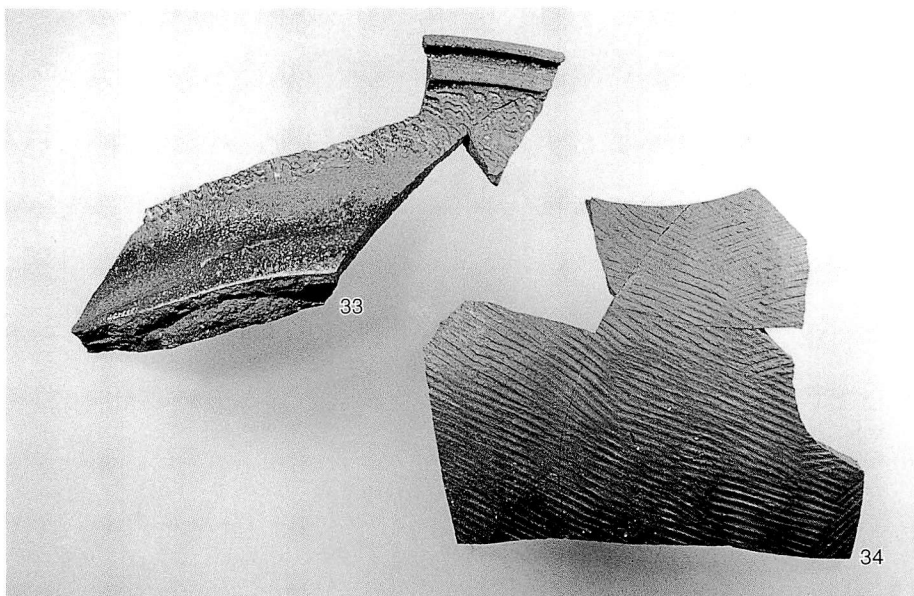
S X 6



S X 6

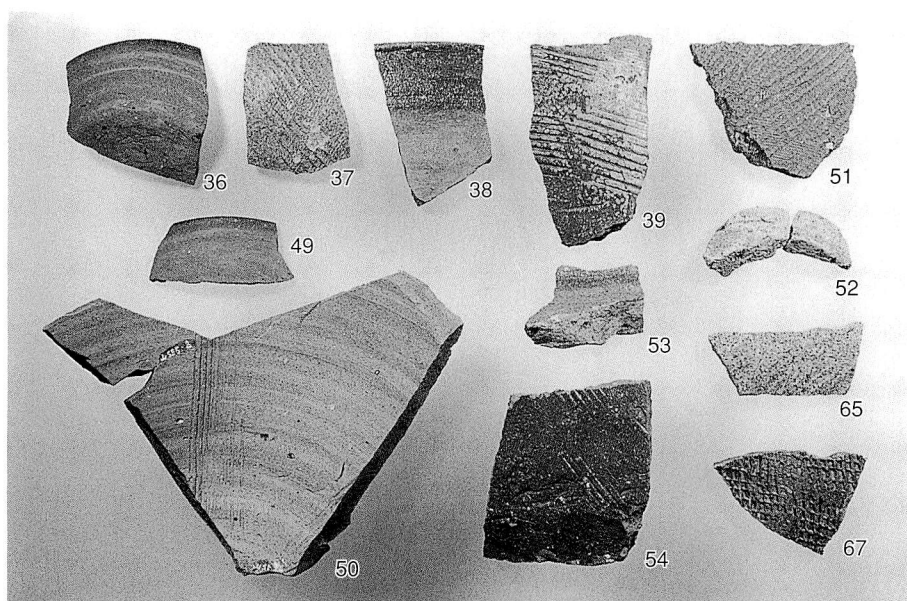


S X 6

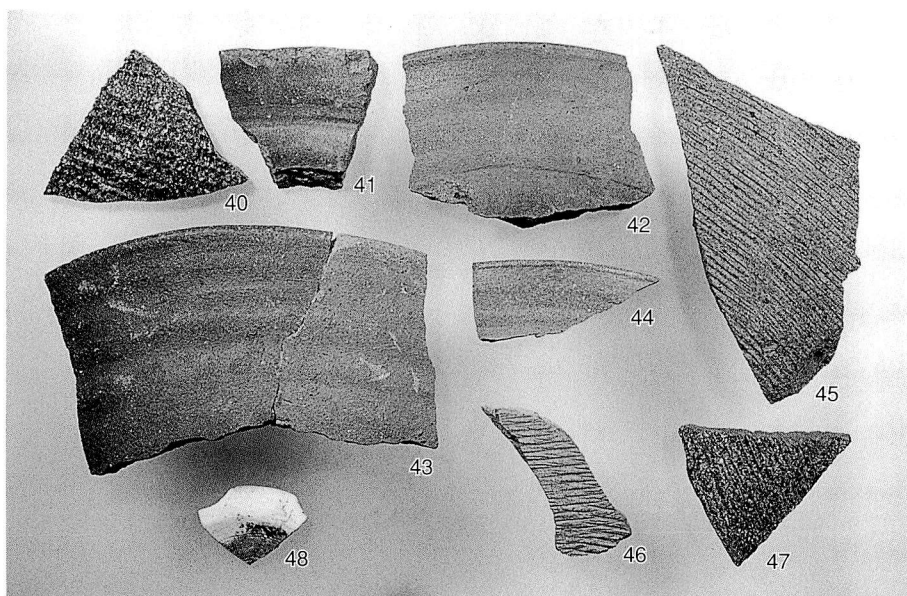




S X 6

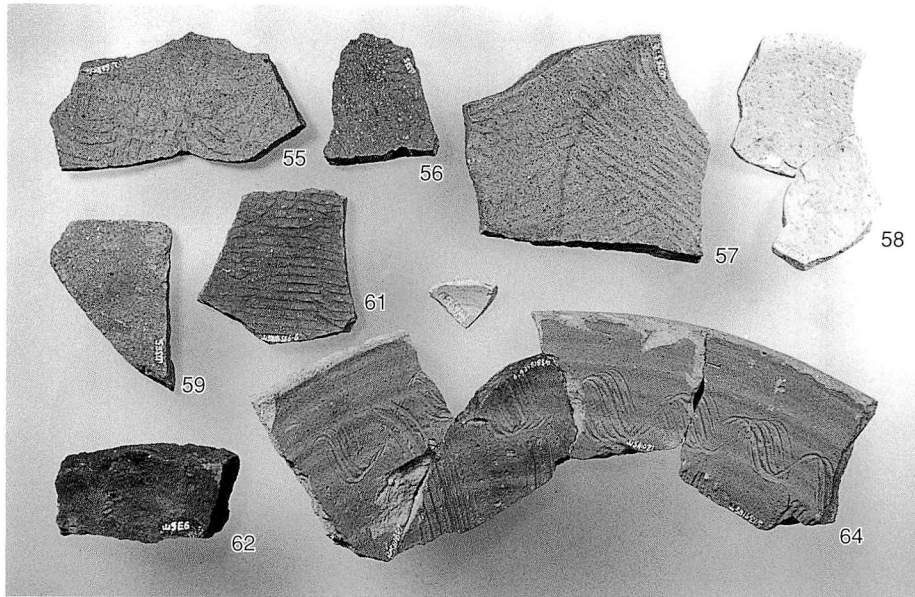


S E 1 · 3 · 4

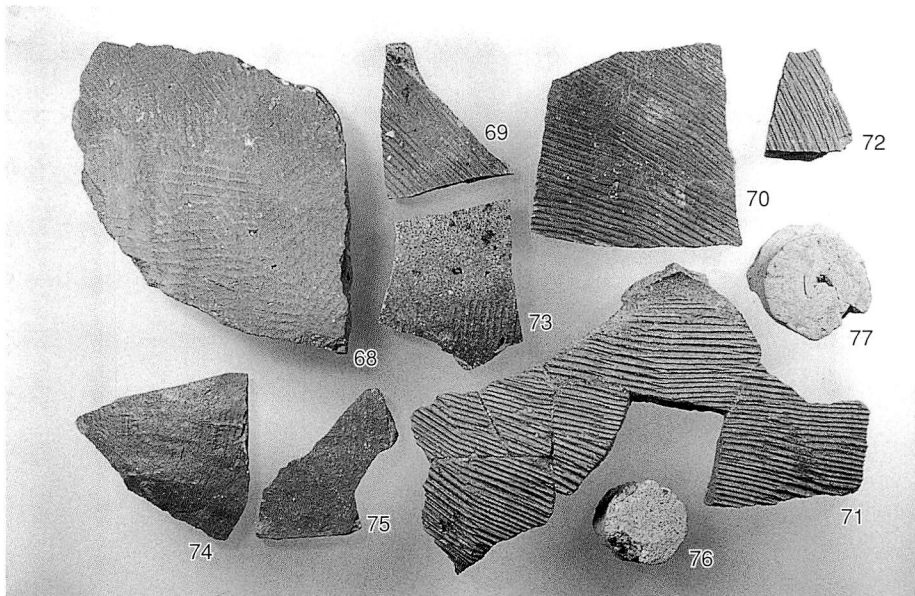


S E 2

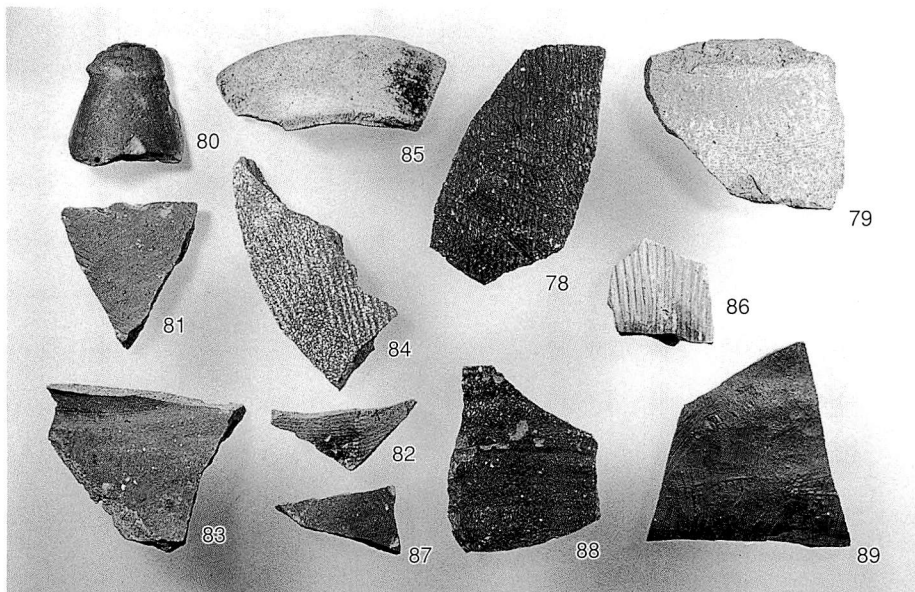
SE 5・6
(内面)



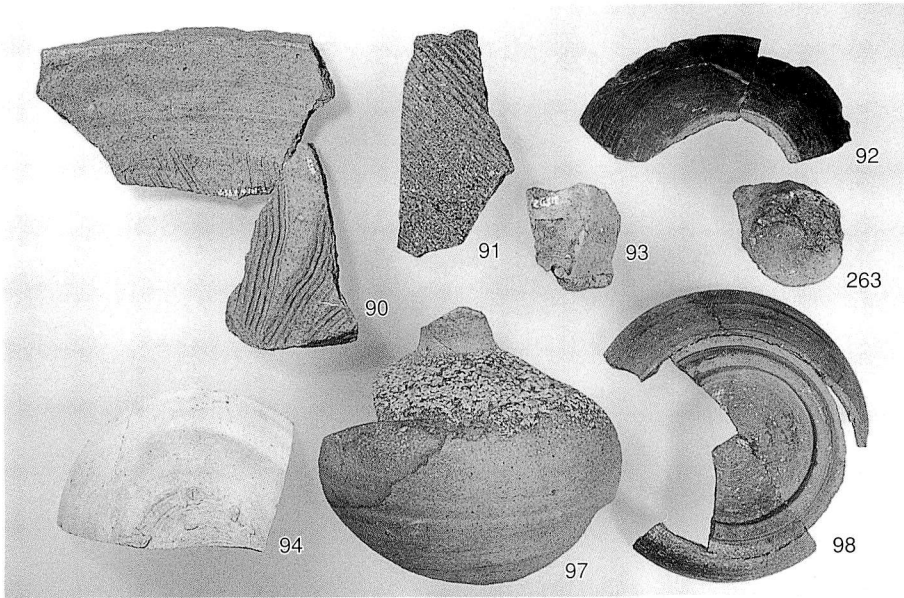
SE 9



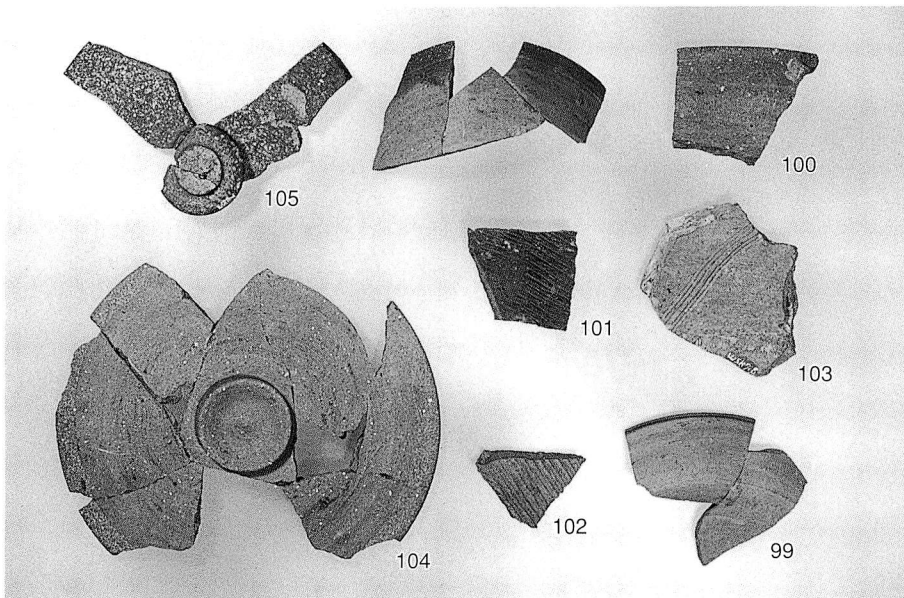
SE 10・11



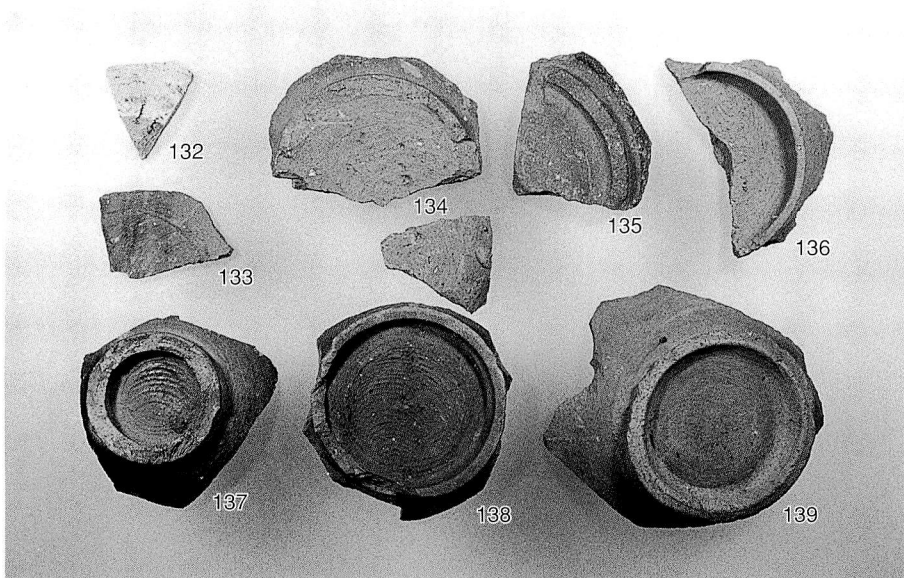
写真図版12



S D 1 ~ 3
S K 1 · 6

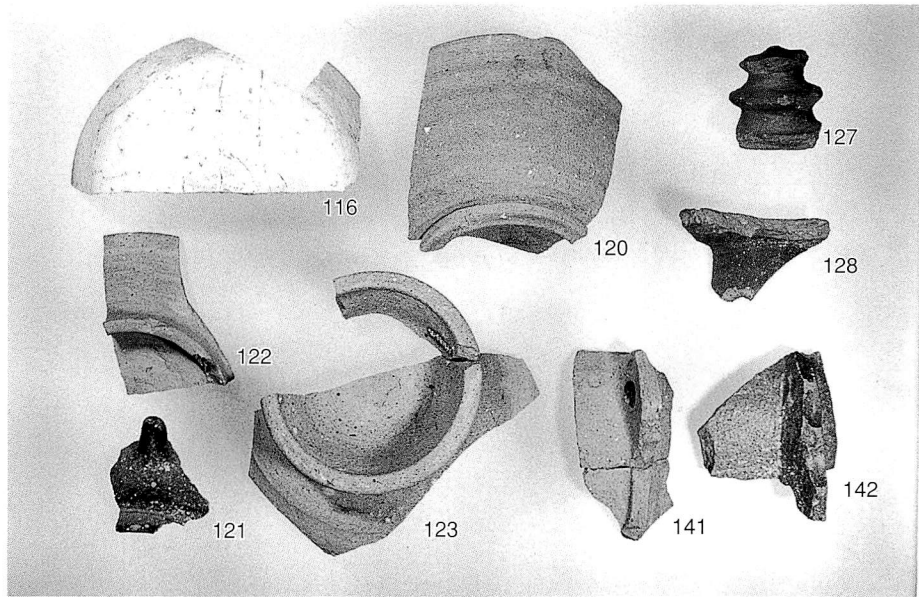


S K 4 · 6 ~ 8

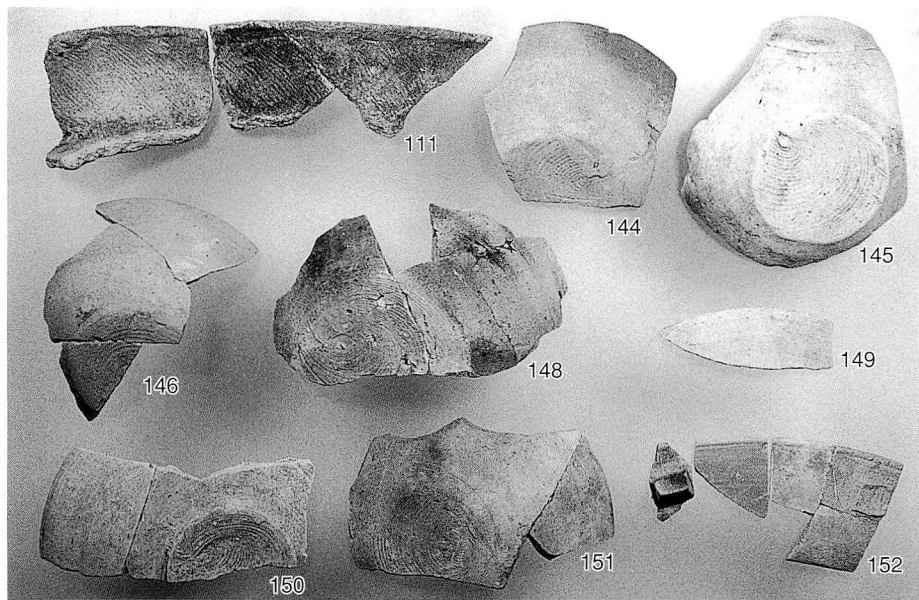


須 恵 器

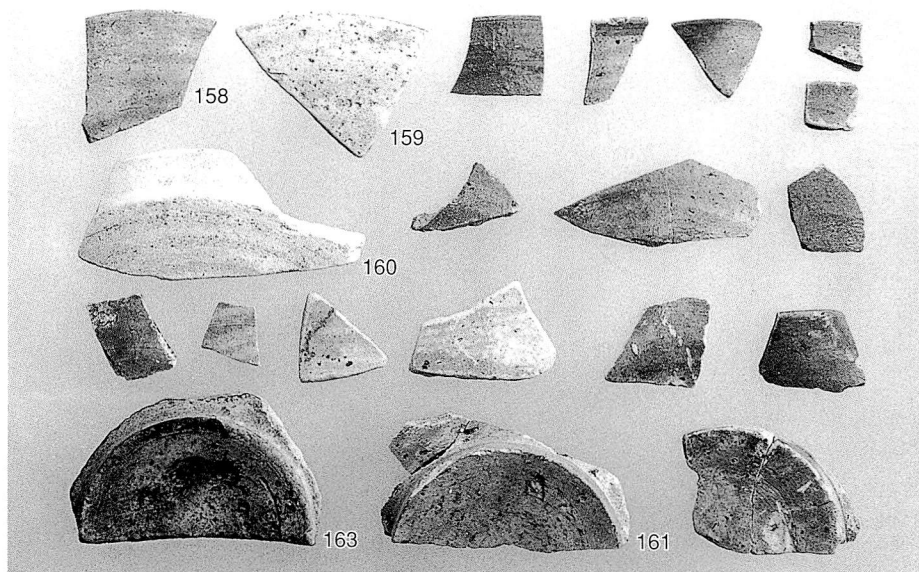
須恵器

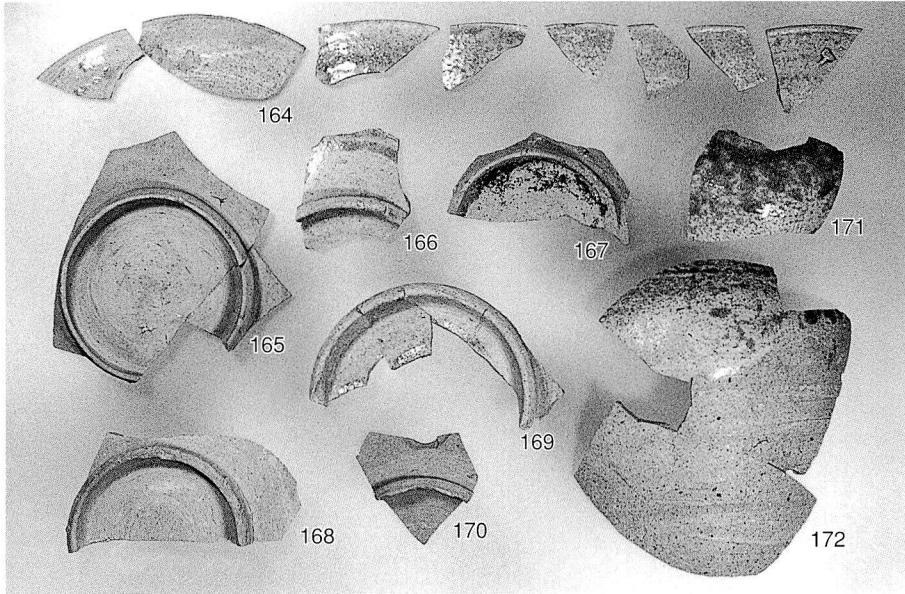


土師器

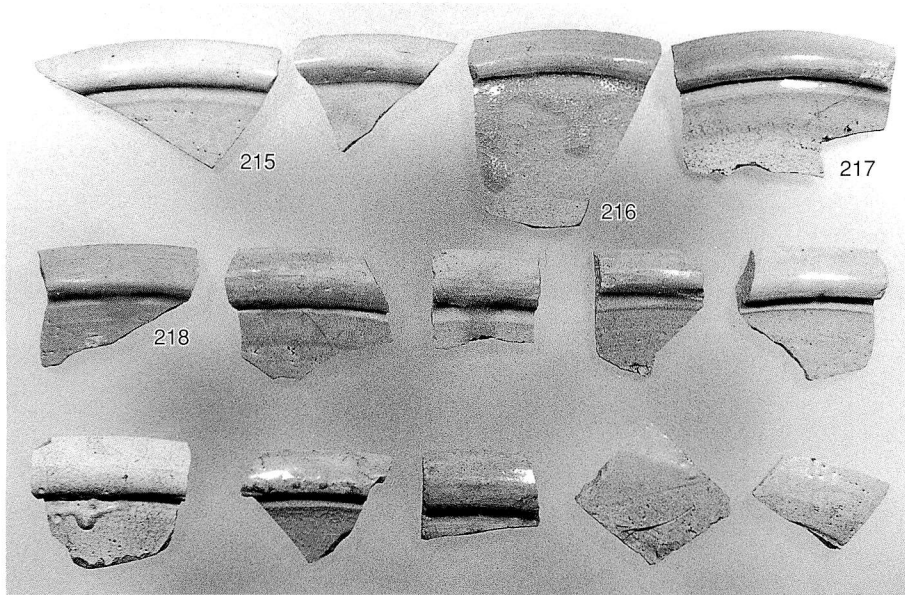


緑釉陶器

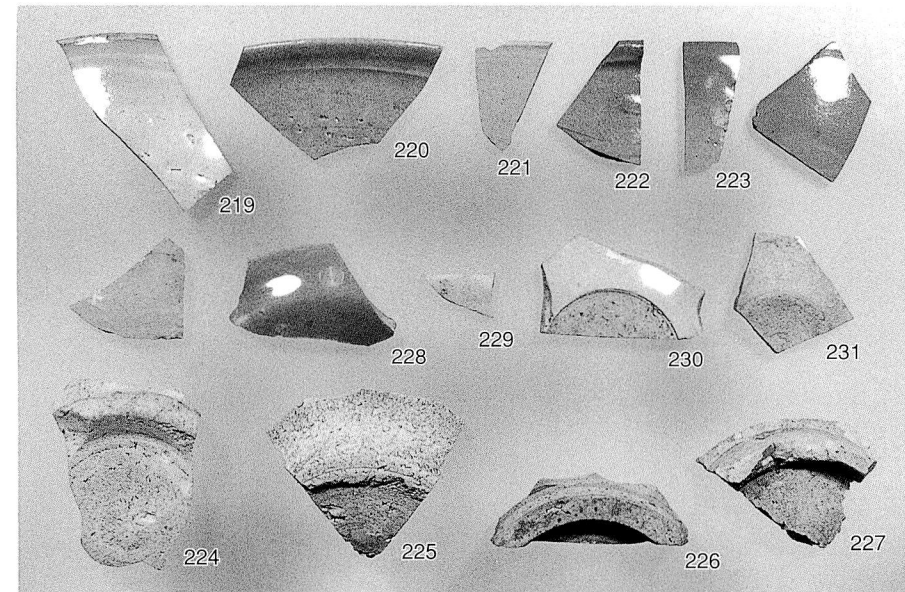




灰釉陶器

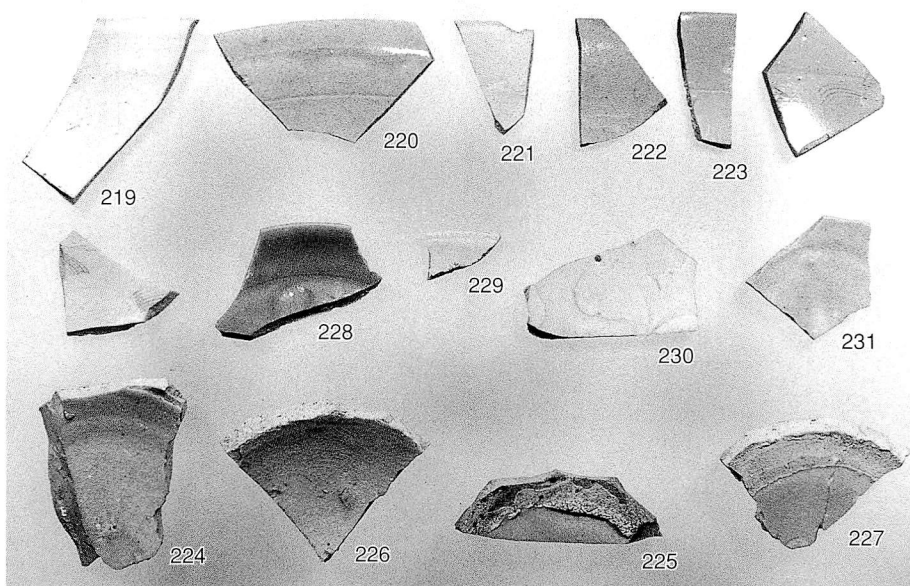


白磁

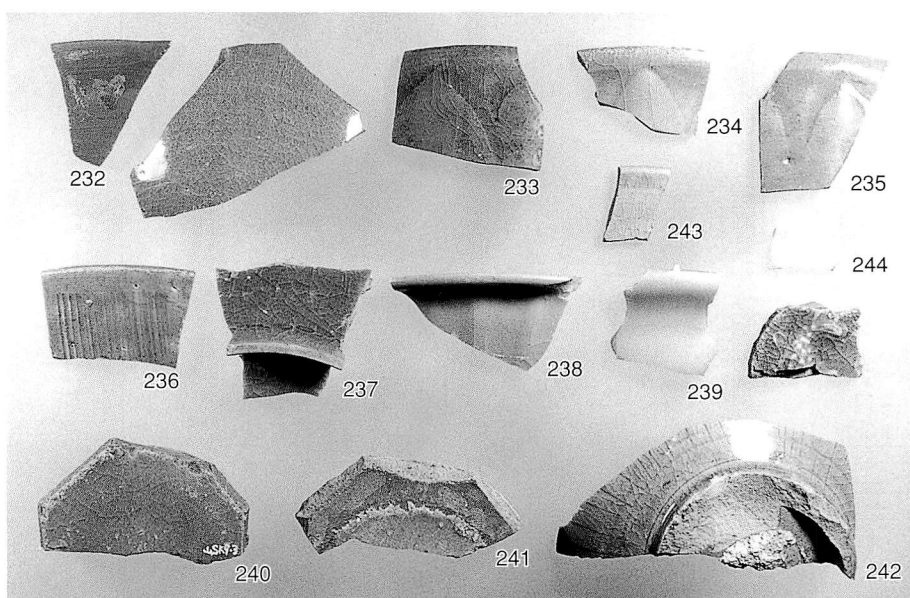


白磁

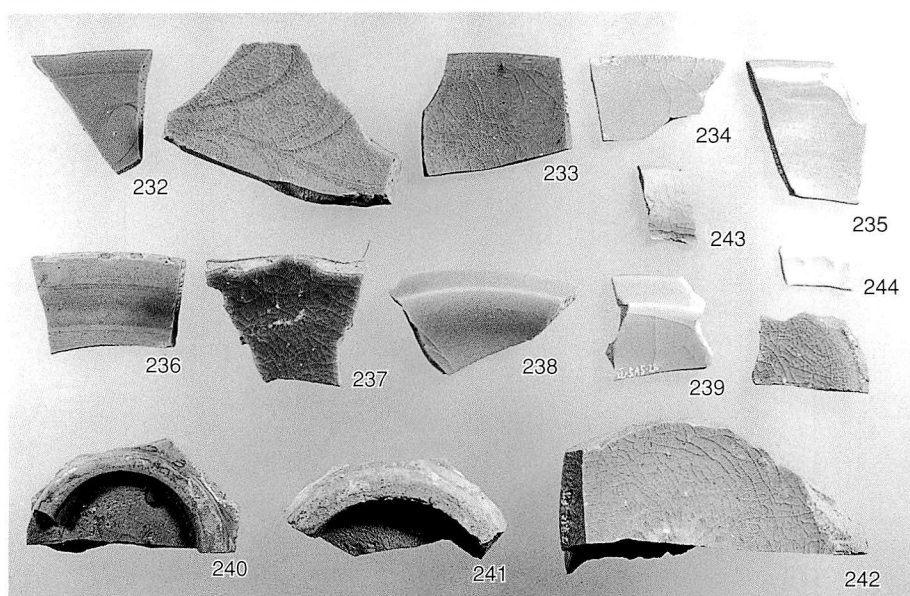
白磁 (内面)

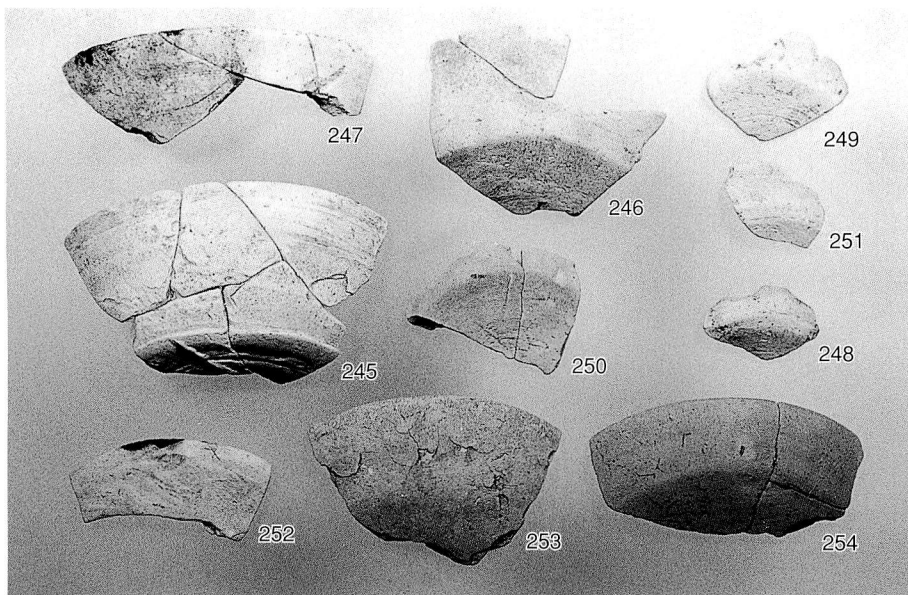


青磁

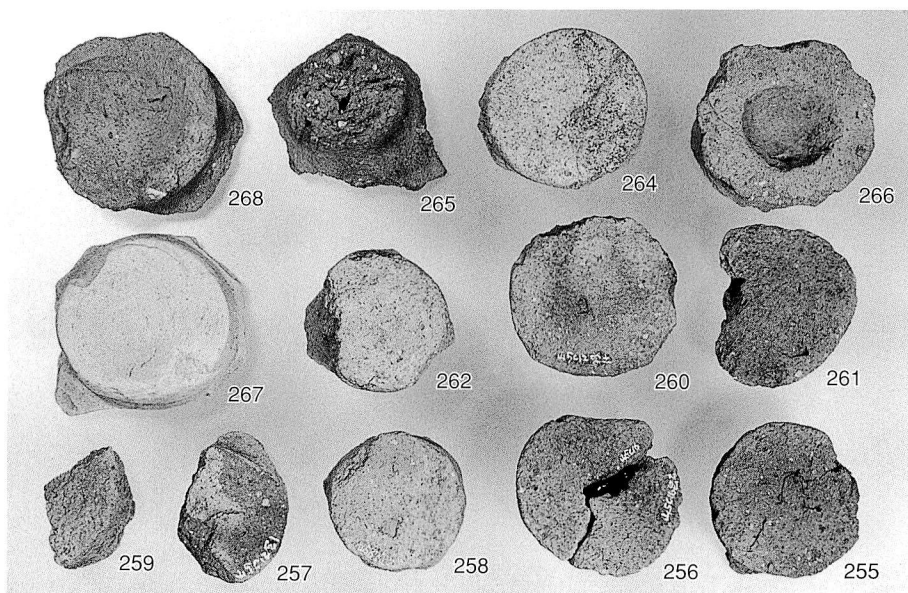


青磁 (内面)

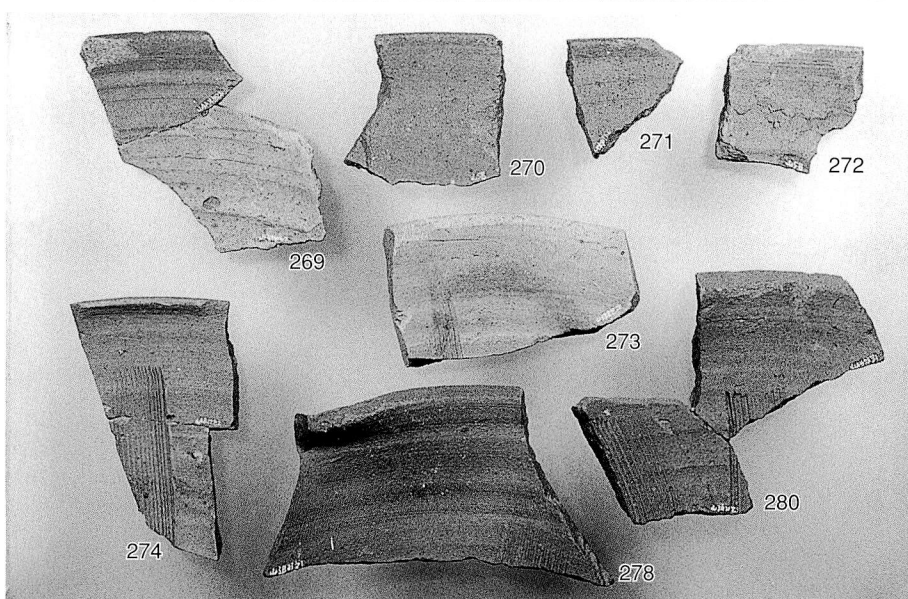




土師質土器

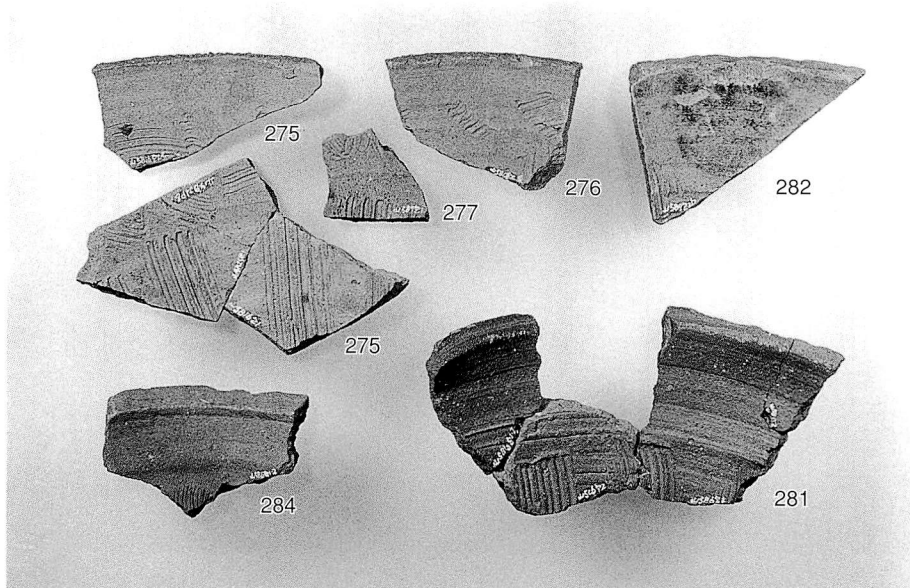


土師質土器

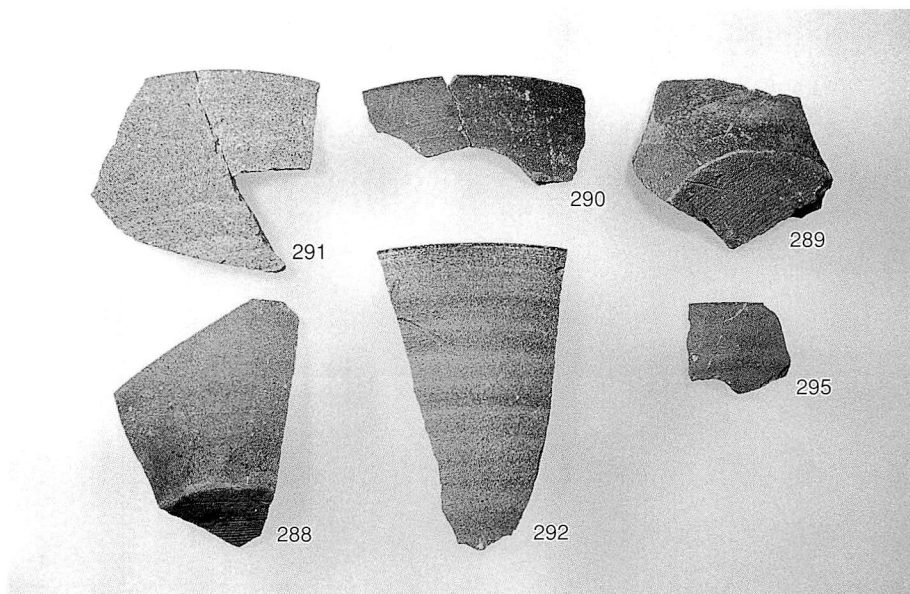


珠洲焼

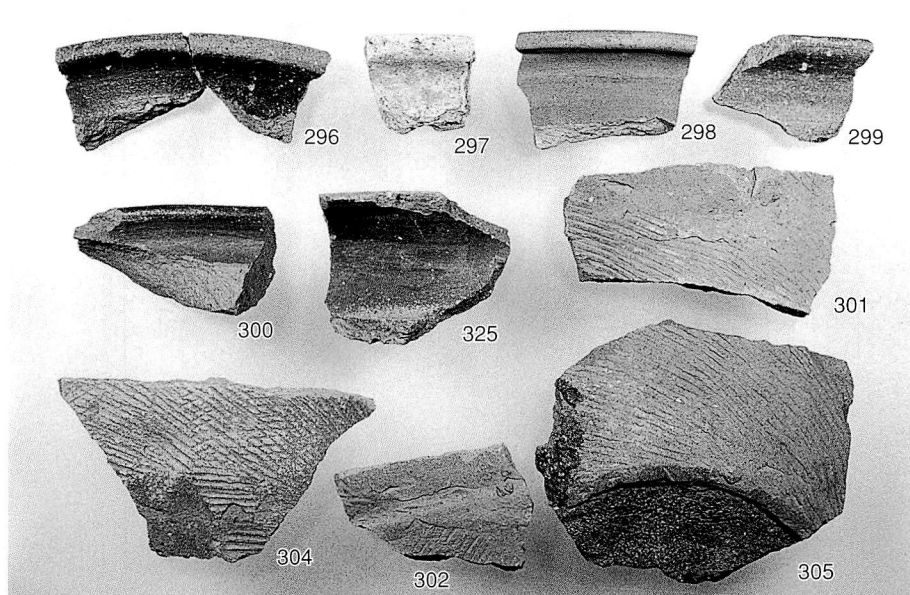
珠洲焼

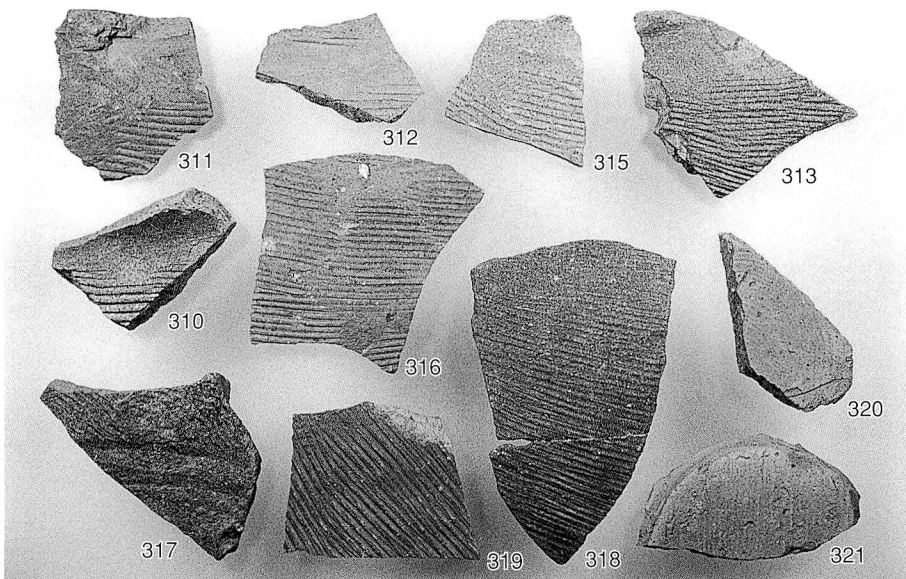


珠洲焼

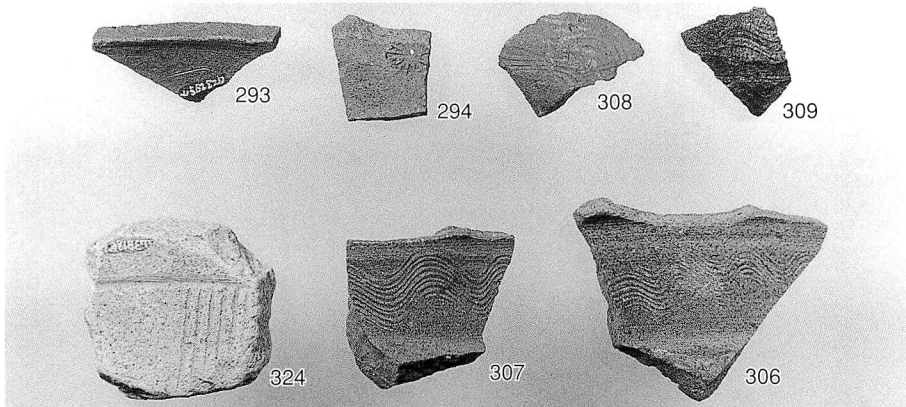


珠洲焼

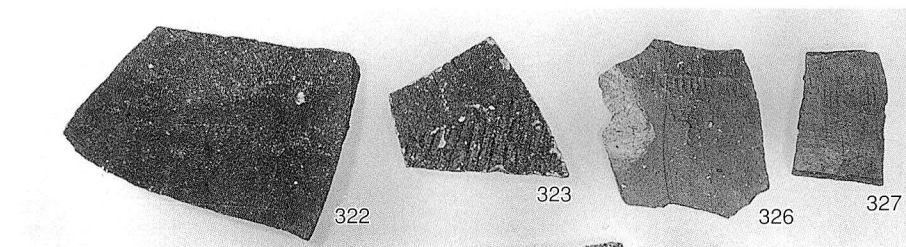




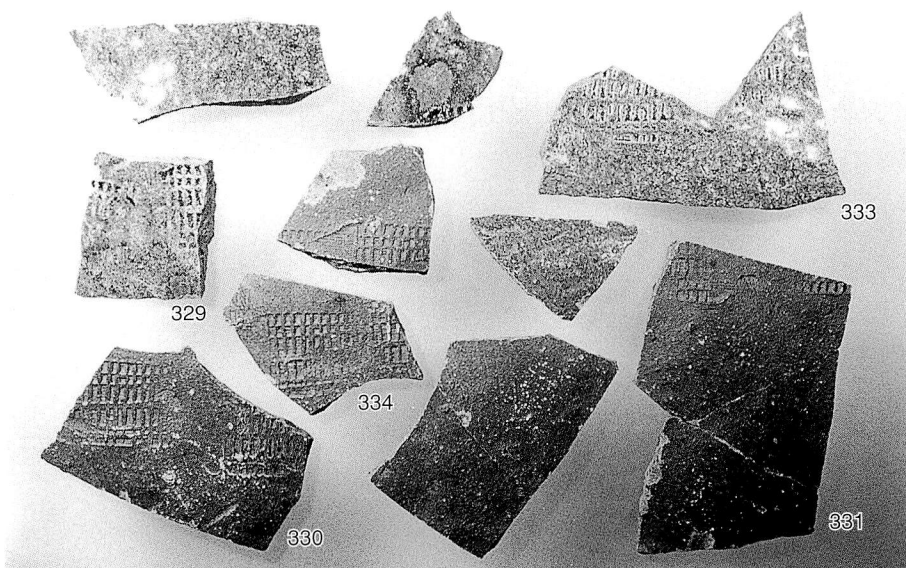
珠洲焼



珠洲焼・越前焼



瓷器系陶器



瓷器系陶器

墨書土器

95 「口川」

208 「口川」

177 「田口」

178 「田」

213 「高口」

176 「福」

192 「善」

184 「寺」

183 「寺」

28 「口」

205 「身」

182 「卅口」

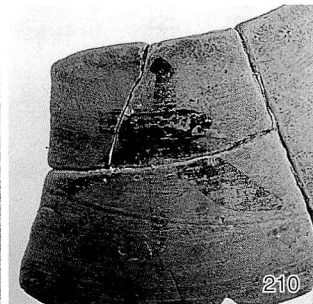
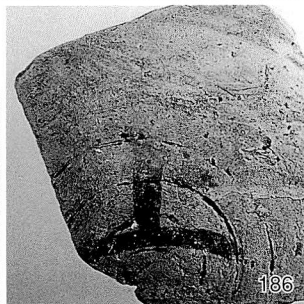
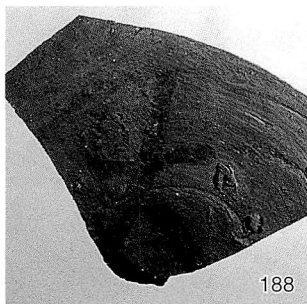
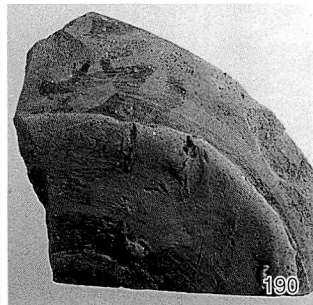
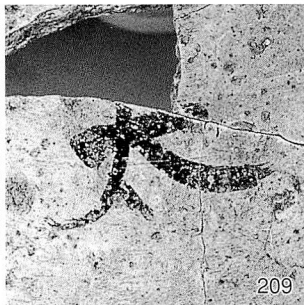
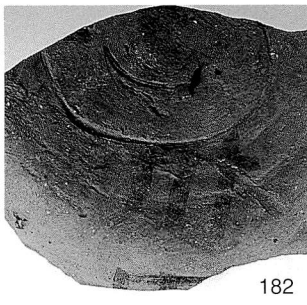
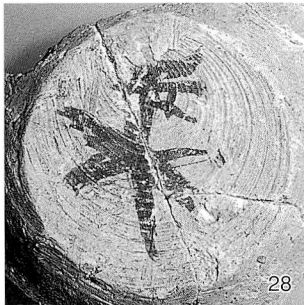
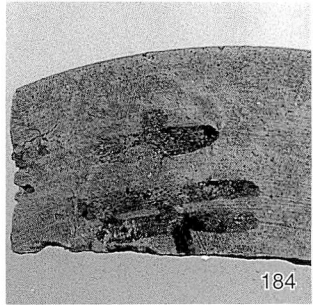
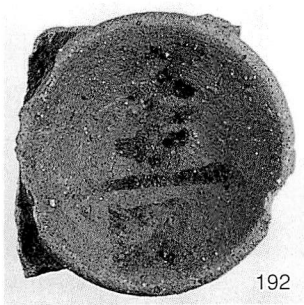
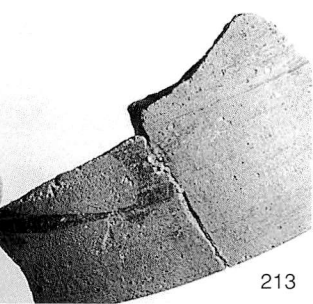
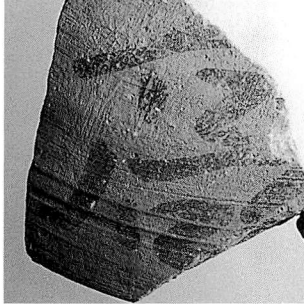
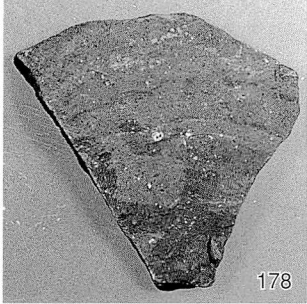
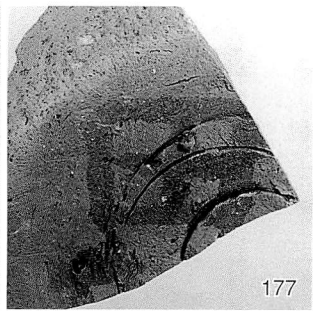
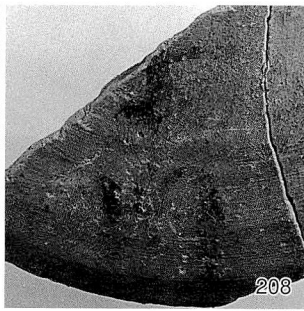
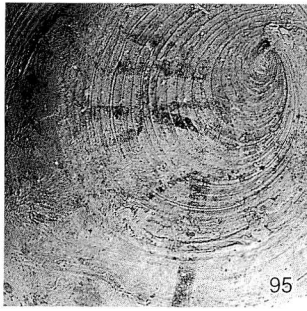
209 「太」

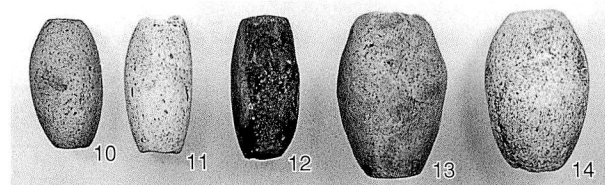
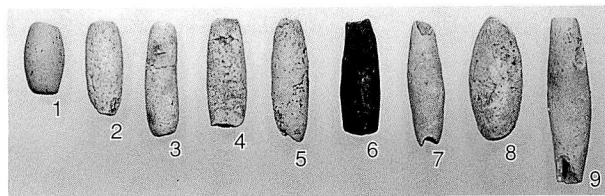
190 「口」

188 「大」

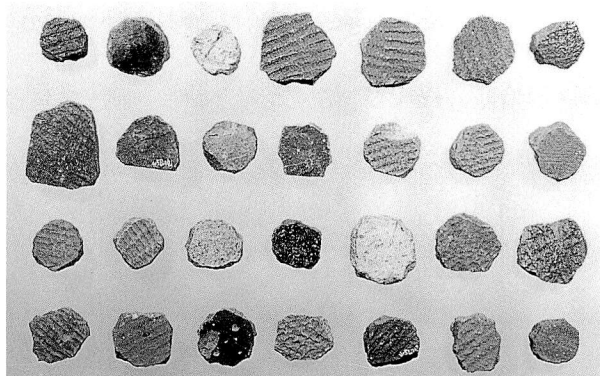
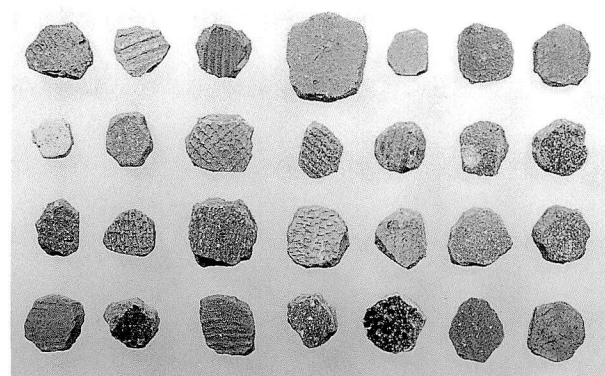
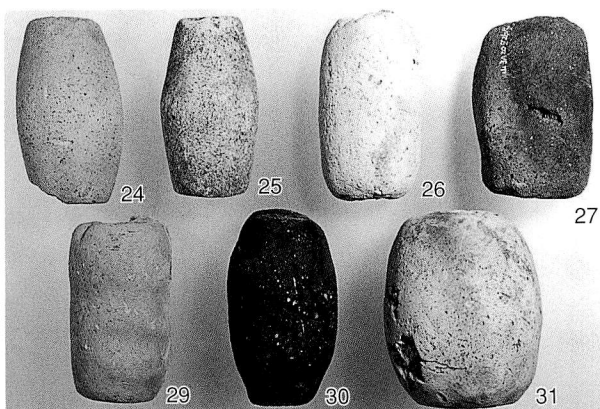
186 「上」

210 「木」

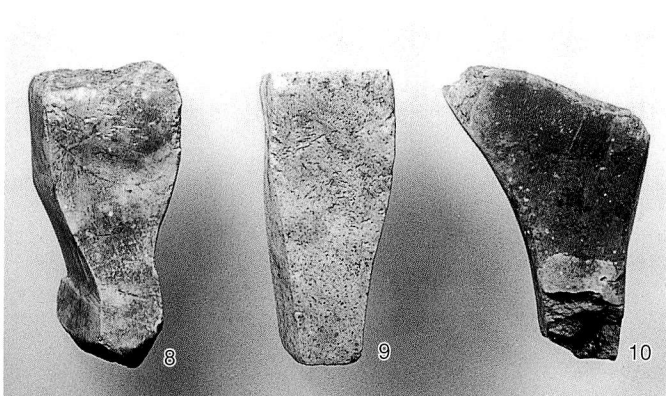
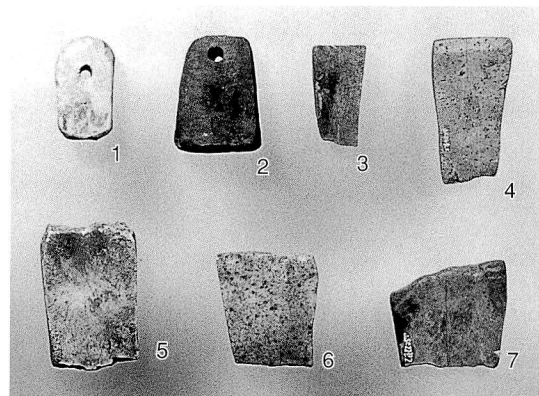




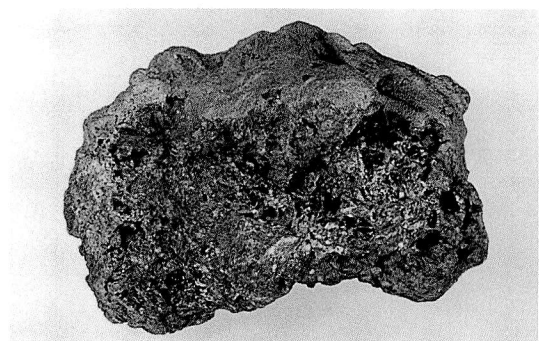
土 錘



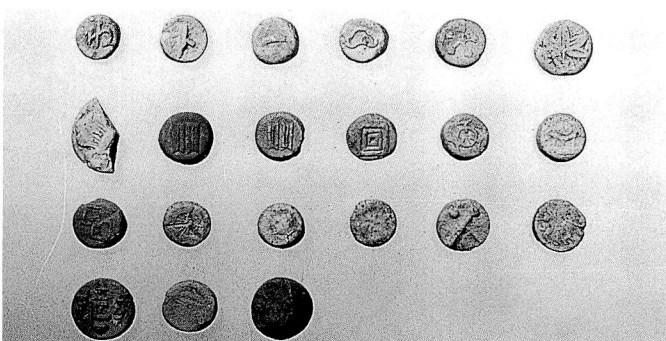
土器片円盤



砥 石

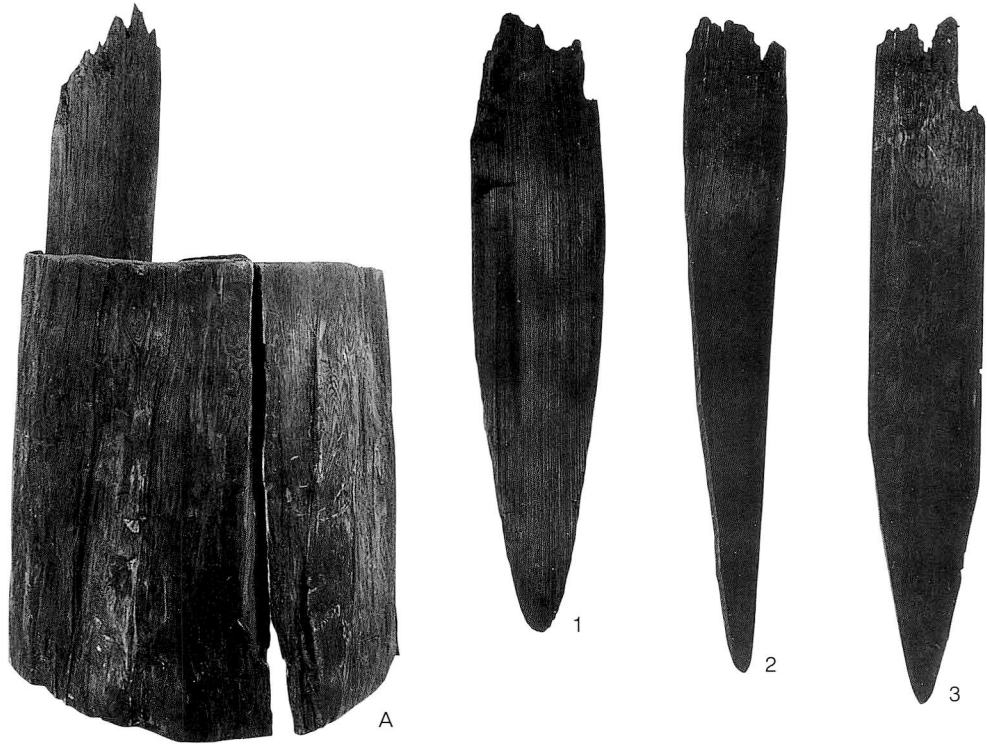


鉄 滓

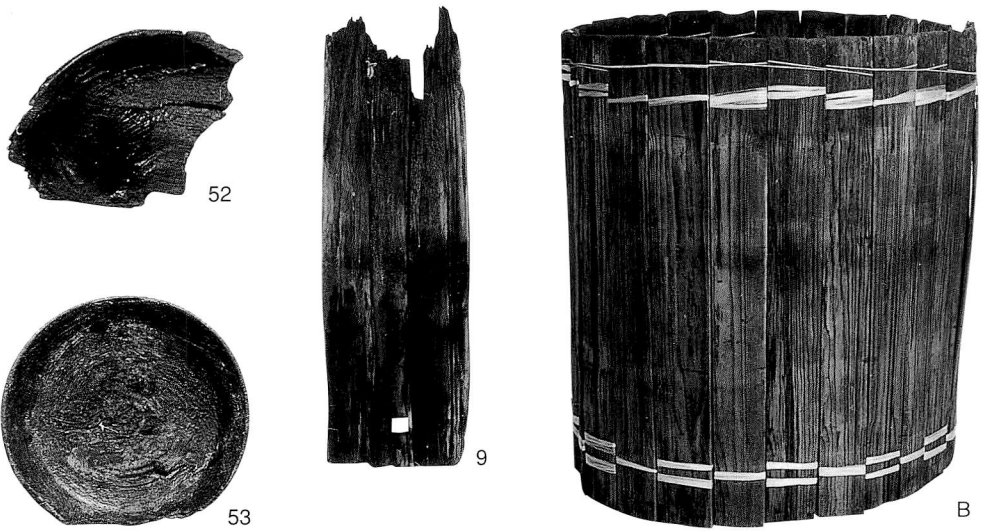


泥めんこ

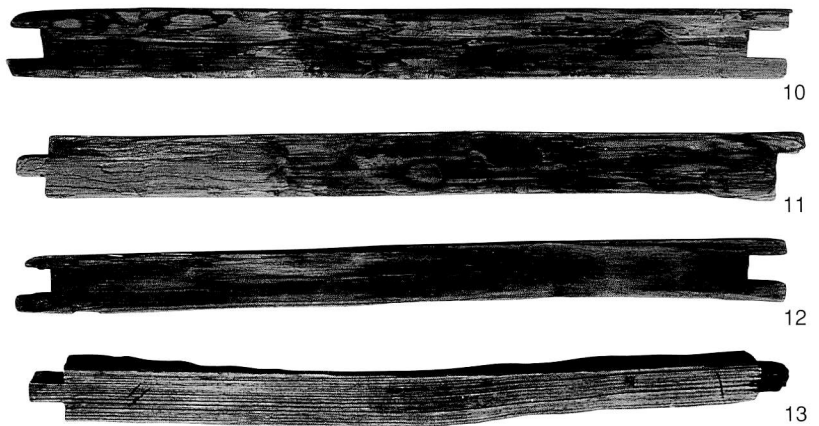
A SE1
1~3 SE1



52・53
SE1 皿
9 SE1
B SE2 桶



10~13 SE2 横 棧



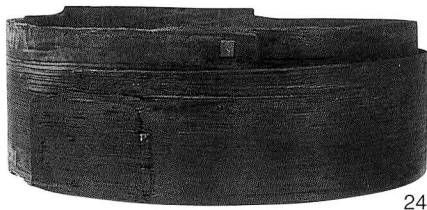
写真図版22



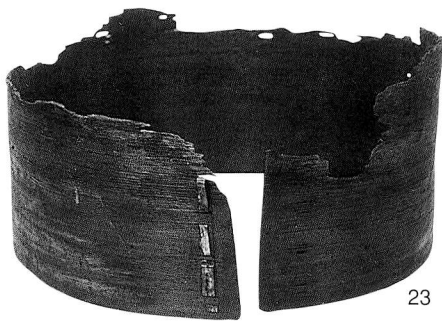
SE 2
 A 「十一」
 B 「一二」
 C 「一三」
 D 「十六」
 E 「十七」
 F 合印



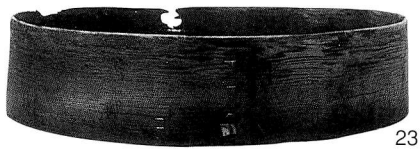
21



24



23



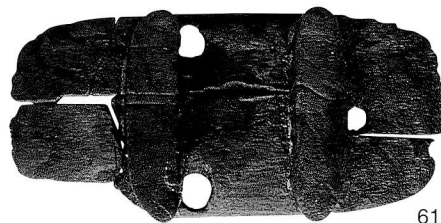
23



54



60



61



26

21 SE 3 上
 24 SE 3 下
 23 SE 5 上
 26 SE 5 下
 54 SE 4 椀
 60 SE 6
 刀子の柄
 61 SE 6 下 駄

25 SE 6 上



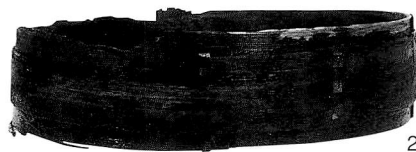
25

27 SE 6 下



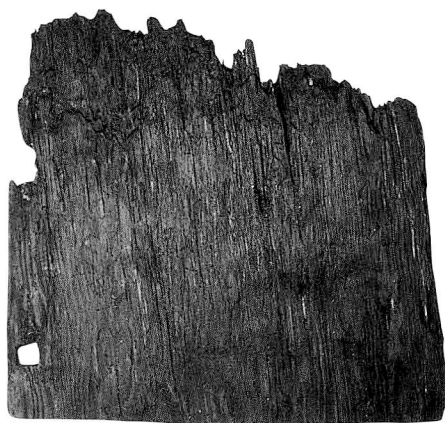
27

29 SE 7



29

17 SE 7



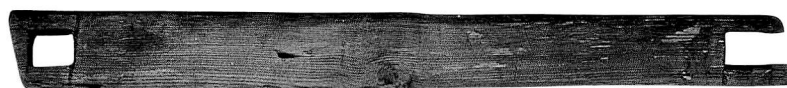
17

14·15 SE 7 横棧



15

28 SE 8 上



14

32 SE 8 下

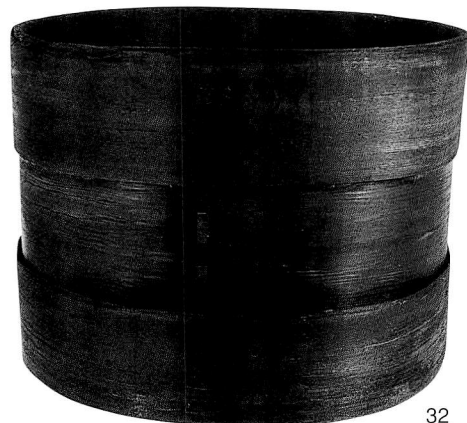


28



22

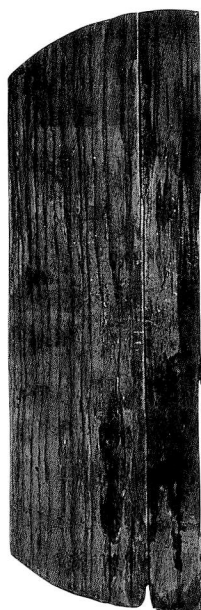
22 SE 8



32



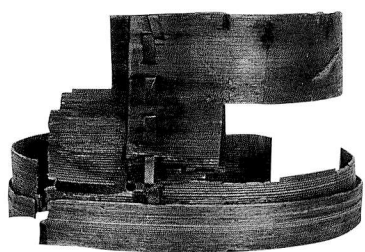
34



19

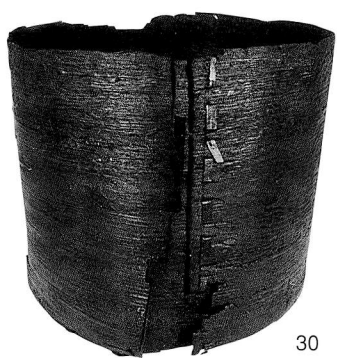


20

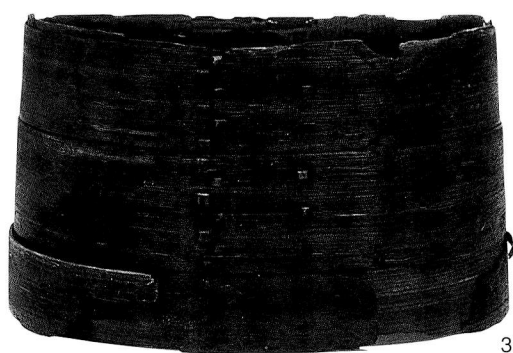


31

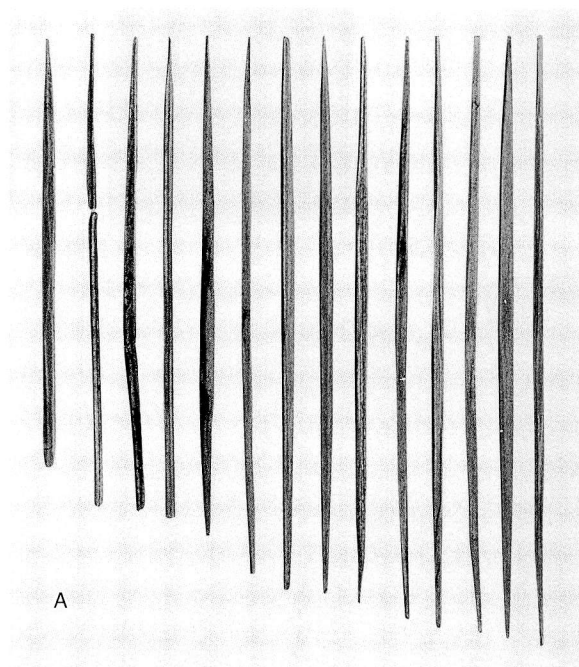
34 SE 9 上 30 SE 10 A SE 1 箸
 31 SE 9 下 33 SE 11 B SE 9 箸
 19・20 SE 11



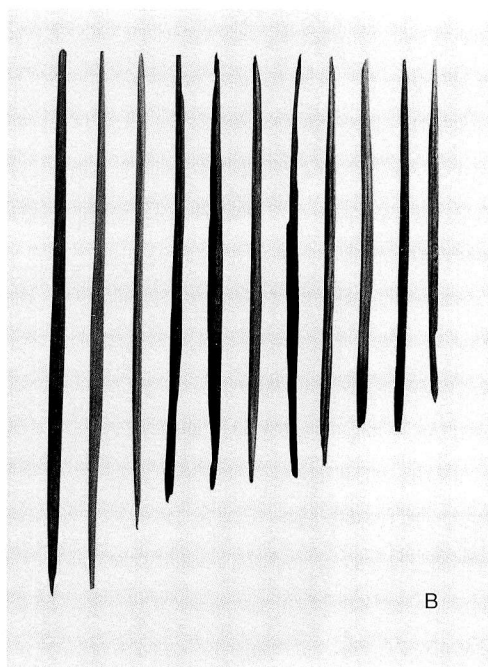
30



33



A



B

山木戸遺跡第1次発掘調査概報

1992(平成4)年3月31日発行

編集・刊行 新潟市教育委員会
〒951 新潟市学校町通1番町602番地1

印刷 (有)太陽印刷所
〒950 新潟市和合町2丁目4番18号
TEL. (025) 265-3101
